

神通桃色遊戯録

神通成人向合同誌

十八歳未満閲覧購入禁止書籍





神通桃色遊戲錄

一回へ...

満口ですすが...

ハア

ハア

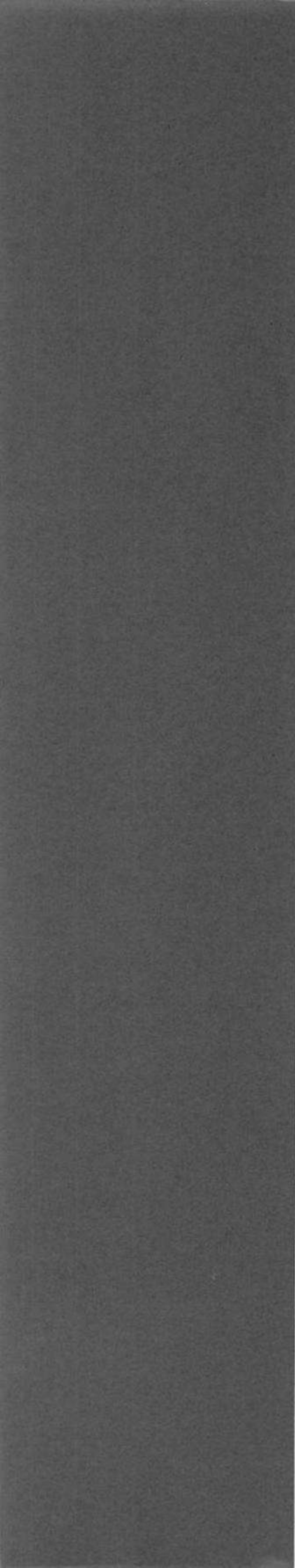
ト...



目次

- 004 みぬたち
- 007 ぷらむ
- 015 なぎはしここ
- 019 鈴木多労
- 027 赤木ハム
- 031 番茶
- 039 水菜
- 047 清川恒光
- 048 ユキ
- 056 かなと
- 061 ささくまきょうた
- 062 CK/旧七式敢行
- 070 洲央
- 078 silk
- 082 HISAGI
- 086 じゅんたか
- 087 坂上
- 091 IAPOC
- 099 s.t.fake
- 103 仮死パン
- 111 なぎりあ
- 117 琉球雛
- 125 風見櫻子
- 129 ちんぽ大將軍
- 134 ゆりも
- 135 ちくわん
- 143 ゴステロー
- 150 青清空斗
- 155 あさゆきはじめ

- 163 ゲストコメント
- 169 編集後記





おおっ…

何気ない
遣り取りだった

それが…
ありがとう
可愛い



の顔が
たいた

— 始まりは

自撮り
送って
…なん



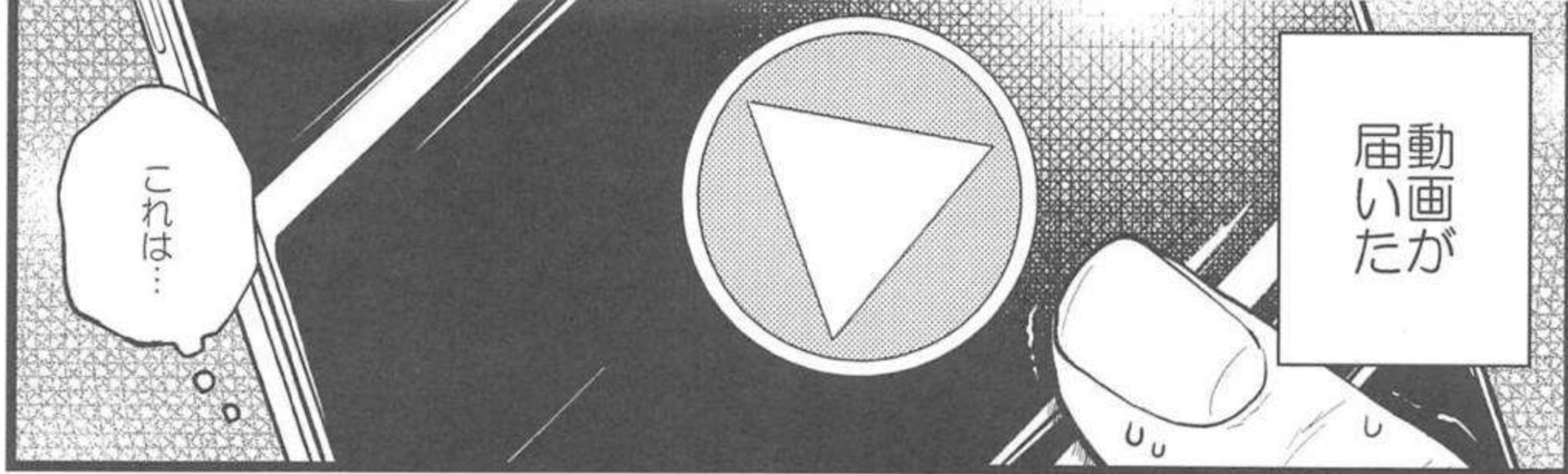
（…のでこっそり
プリントアウトして
楽しんだりも
している訳だが）

次第に際どい写真も
送ってくるようになった

長期的に
会えない時の
習慣になつて



そして今日



届いたが

しねば...

ピッ



提督
こんばんは!

ええと...
あつこれ
録れてる?

神通ですか?
そちらは
どうですか?

飲んでるなあ



俺の
シャツだ...

だから今日は
提督のベッドで
寝ようと思って...



みんな提督がいなくて
寂しがつてます



あつ...
でも...

一番寂しいのは
私です...♡

そしたら...



提督…これ神通に
お使いになる
つもりだったん
でしよう？

もう…
えっちなですね♥



ベビータのTは
こんなものを
見つけて
しまいました…

隠し場所が
へたすぎます

ああ…
……え？



あの…
とつても
恥ずかしいの
ですが…

今から私が
使うところを
お見せ
しますので

んんん



提督もこの動画
使ってください…ね？



提督の
大好きな
あつぱいごさっ♡

最近ちよっと
大きくなったんです

提督が
いつもずーっと
触ってる
せいですよ♡



乳首だって
こんなになっ...

はしたなく
なってしまうって...



全部分
提督のせい
なんですからっ

下着まで
濡れ...

もも♡



びりっ

下着
とっちやいます

こちらも
見せて
さしあげますね

えっちな染みが
ごきちやいました

すん...

ごは...
お願い...
くださいね

あつ...
入っちゃって...
♡

んっ...
ちよつと...
冷た...

びりっ



ごめんね
さじっ

わー

あー

あー

これっ
神の
おちんちんが
ないのさ...っ

あー

あー

神通
もう
らめれす

あー

神通の
イコウイコウ
見こころさ...

あー

あー

あー

あー

あー



お戻りになつたら

どん

神通と
いっほい
えつちなこと
しましようね

ぬ

お疲れ様
でした...あ



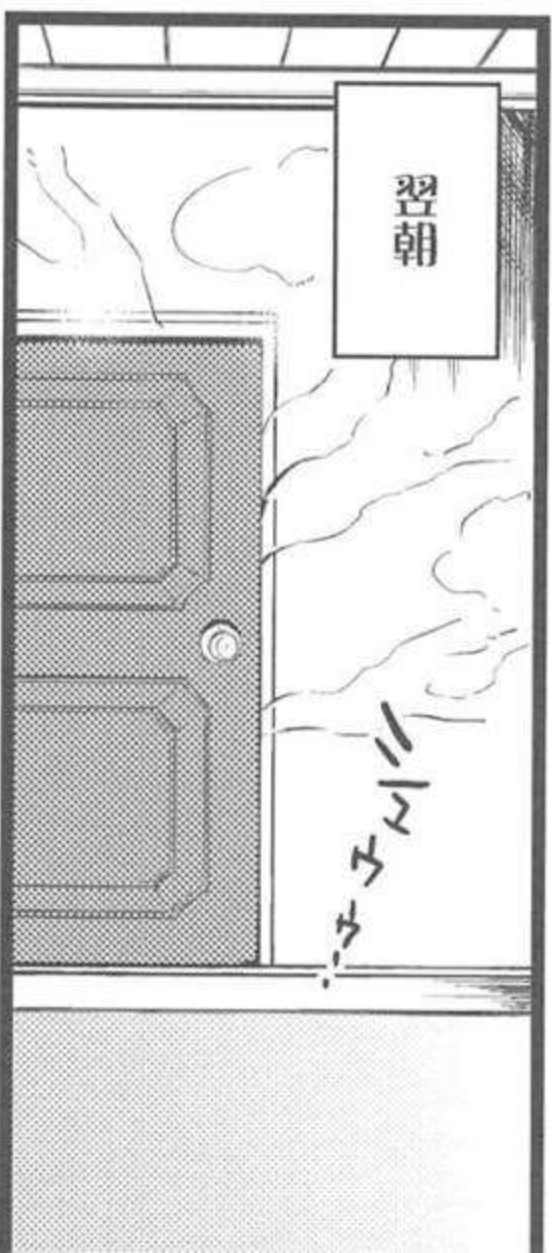
ぽん

後でお礼
送つとごう...



グググググ

おんげ



翌朝

シューシュー

いつも他人の
後ろについて歩く
控えめな少女

一方で

戦場では
凛々しく力強い
姿を見せる

提督：

提督

ていどく…

もつとも

いま目の前にいる
神通の表情は
そのどちらでも
ないのだが。

はーっ

は

ん…っ

だめ…ですっ

っあ…
それえ…

20<♡
Jury



わたし...
いつもより感じて...

んんん...

んんん...

んんん...
もろ...
んんん...

んんん...

んんん...

んんん...

んんん...

んんん...

♡



某鎮守府付
提督宅

ただいま

おかえりなさい

11月

11月

あゝ
今日神通は
非番だっけ？

わかれたわ

あ、あ、
お疲れ様でした！
提督……

神通ちゃんが
建造ちゃれんじ
する話。

裸

エプロン

DE

作：鈴木 多勢



実は…
長女・双子
建造ちゃんたちが



なぜ
そんな格好を？

で？
しゅん



ないの？

ないの？

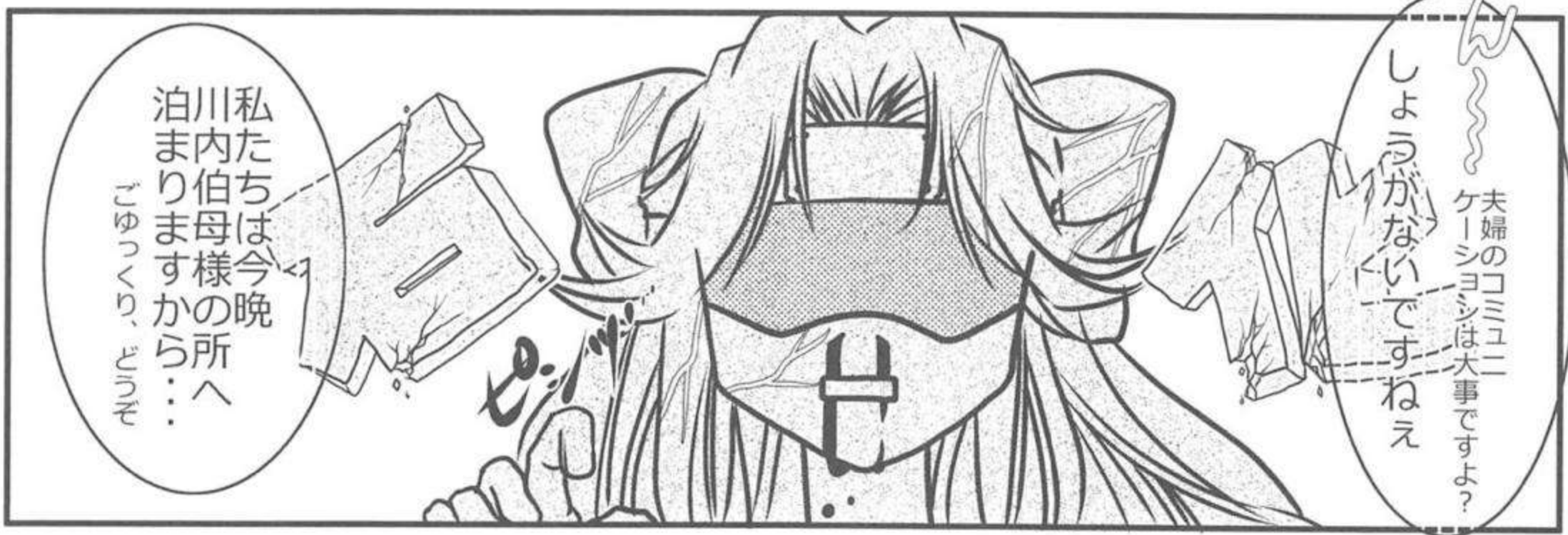
てっきり"空建造"しでると
思ってた…
長女

え？
最近致してないの？
建造のS.O.X



ぽん

提督との愛の結晶たち。



私たちは今晩の所へ
泊りますから…
泊まりますから…
泊まりますから…

夫婦のコミュニケーション
ケイションは大事ですよ？
しょうがないですねえ



と言う訳で
この格好も長女ちゃんの
アイデアで…

え、えっと

提督？

Good Job!
My Daughters!!

えっと…

お風呂

入渠されますか？

それとも…

ご飯
補給ですか？

即
建造に
決まってるで
しよっ！？

こんなカッパで誘っておいて！

で
ねえよ
えええ

あ
あ
あ

エラく今日は
積極的だと
思ったら...

あ
ち...
ち...

娘達に感謝だね

あ
っ
っ
っ

るるるん?

折角なんで
皆の好意に甘えて

あ
っ
っ
っ

あ
っ
っ
っ

今日はゆひり
致しまして...

あ
っ
っ
っ

あ
っ
っ
っ

あ
っ
っ
っ

あ
っ
っ
っ





ほらもう
俺の開発資材がヤル気に
なつた!

いじげん

開発資材
です。

いじげん



神通建造は一時間!
時間はたつぷりあるので
ゆっくり致しましょう...

いじげん

いじげん

いじげん

その頃
資材庫では…

大淀さん！
ちよっ
なんか
すごい音が…!?!?

これってあの
口の毛提督の
倉庫の資材！？

スゴイ勢いで
減って行ってる!?!?

あ
あ
あ
?!?



この後滅茶苦茶神通がうまれた...



えっ？
よ…4？

4ページ以内に急いで
子育てをしなければ
任務失敗に
なってしまう！



神通大変だ！
期間限定
任務だ！

「神通」と子育て
艦隊性交祭

獲得ボーナス



あっ…！
あの…どうしよう
ことごとくおっ…？



あっ…！！

神通！
いいから急いで
服を脱いで！！

たまには急いで
神通と××してみませんか？

赤木ハム

神通!
急いでこれを
啜えて!

え...はい

神通!
急いで
全部飲んで!

はぶっ!!

神通!
急いで足開いて!!
挿れるぞ!!

あっ...
はい...

ゆっくり
お願いし...あっ♡

神通!
急いで!!
イクぞ!!

はっ♡
...はい



あああああっ♡



提督：任務達成
おめでとう
ございます

お役に立てて…
本当に嬉しいです



任務はまだ
終わって
ないぞ！
神通急いで！

えっ？

神通！
急いで指輪を
受け取って
くれ！

神通！
急いで
結婚式を
挙げるぞ！

神通！
急いで出産
してくれ！

神通！
急いで子育て
してくれ！



よし！
神通急いで！
次は……

あの……
待って！！

どうした？
神っ……

う……！！



たまにはゆっくりと
神通と
お話ししませんか？



鎮守府ねやごと話

文・番茶

東北へ向かう新幹線を途中下車し、在来線を乗り継ぐこと二時間半。そこからさらに、山道をバスに揺られること二時間。

秘湯の宿として、時には軍上層部や政府関係者にも利用されると聞く数寄屋造りの木造旅館は、そんな人里離れた山中にひっそりと佇んでいた。

「——また、一階の離れには貸切りの露天風呂もご用意しております。ごゆっくりおつかりになれば、旅の疲れも取れるかと」

「は、はい。短い間ですが、お世話になります」

「ご丁寧に、ありがとうございます。お食事は十八時にお部屋までお持ちいたしますので、それまでご自由にお寛ぎください」

宿泊の手続きを終えて案内された旅館の一室。施設の簡単な説明を終えた仲居が、頭を深々と下げ、立ち上がる。礼儀作法通りに襖を開けて、部屋を出ていった。

音一つ立てずに閉められた襖から、神通は視線を部屋の中に移した。老舗の旅館にしては質素にも思える、必要なものを必要なだけ置いただけの内装。しかし、隅々まで行き届いた掃除や、さりげなく飾られた品の良い調度品からは、宿泊客に騒がしい日常から離れた穏やかな時を過ごしてほしいという気遣いを感じる。

立ち上がり、部屋の窓へ近づいてみる。窓を開けた途端、耳に届く心地よい水の音色。

眼下に流れる溪流と、敷き詰めたように広がるほのかに色づき始めた紅葉に、思わず感嘆の息が漏れる。

今でも十分に美しいが、朝靄や夕日に沈む光景は、現世から隔絶された幽玄の美を描き出すだろう。

——青葉さんが見たら、大喜びでシャッターを切りますね。

鎮守府の知り合いの顔を思い浮かべながら、しかし神通の意識は別のところに向いていた。こっそりと後方、部屋の中央に置かれたテーブルの前に座る提督の姿を確認して、神通はコクリと喉を鳴らした。

——こんな素敵な場所で、提督と……。

ここまでどうにか誤魔化してきた緊張もピークに達しつつあった。だが無理もない、今日から二泊三日、提督と同じ部屋で寝食を共にするのだから。

本当に自分でよかったのだろうか。そっと伸ばした指先に触れる、左手の薬指にはめられた指輪——戦力増強として大本営から配られるケツコンカッコカリ用ではない、正真正銘のケツコンの証を指でなぞりながら、何度目になるのかわからない自問を行う。

コレを渡される前後に起きた、鎮守府が物理的に崩壊しかねなかった騒動を思い返しながら、もう一度、心の中で呟く。

——ホントに、私でよかったですでしょうか。

もちろん、提督に選ばれたことは嬉しい。これまでのように遠慮することなく、いつでも——当然、時と場合は選ぶが——提督の傍にいられるのは、この上なく幸せなことだと理解している。

ちなみに、提督と温泉旅行に出かけることが決まった日の夜、この悩みを相談した姉妹——川内と那珂の二人には「幸せすぎて辛いつてことですね、ごちそうさま」と、生温かい目で慰められた。

——そんなつもりで相談したわけじゃないのに。

それでも本気で悩んでいるのに。小さく頬を膨らませた神通に、遠慮がちな声がかげられた。

「神通君、だ、大丈夫か？」

「あ、す、すみません、提督。ちょっとポーとしました」

どうやらそれなりの時間、物思いに耽っていたらしい。心配そうに自分を見つめる提督に、何でもないアピールするように小さく手を振る。

「宿までだいぶかかったからな、仕方がないさ。食事まで……あと一時間ほどか。少しゆっくりしよう」

「は、はい……よいしょ、と」

「む……」

窓から離れて、提督に勧められるまま、テーブルの向かい側に置かれた座布団——を提督の隣へ移動させ、腰を下ろす。

何か言いたげに提督が小さく口を開くが、抗議は無駄と判断し、代わりにお茶の入った湯呑みを神通の前にそっと置いた。

芳ばしい湯気に、こわばっていた肩の力が抜けるのを感じる。

「漣君や神通君ほど上手には淹れられないのだが」

申し訳なさそうに、提督がそんな言葉を口にする。

指揮を執っている時の勇ましさからかけ離れた気弱な態度だが、良くも悪くもこちらが本来の提督の姿。

初期艦の漣に次ぐ鎮守府古参の神通からすれば、「ああ、いつも

通りの提督です」と安堵に似た感情さえ覚える。

この辺り、同意してくれる艦娘は少なくないはずだ。

鎮守府メンバーの顔を思い浮かべて、確信めいたものを抱きながら、薄い桜色の唇に湯呑みを当てる。

「——お茶、美味しいですね」

一口、こくりと喉に流し込んで神通は微笑んだ。

こうして二人きりでいられる、その事が何よりも嬉しいのだと、言葉の外に込めながら。

「……………」

「……………」

「お、お菓子もあるぞ」

むず痒い沈黙に耐えかねたのだろう、旅館の定番 部屋に用意された和菓子を勧める提督の笑みはぎこちない。

緊張しているのは自分だけではないのだ。理解した途端、この気まずい空気も愛おしく感じられた。

「……………はい、いただきます」

伸ばした指先が触れたのは、綺麗に包装された菓子ではなく、それを勧める提督の手。ごっごつと硬く、節くれた手を、そつと両手で包み込む。

昼夜を問わず忙しい執務の傍ら、艦娘が無事に鎮守府へ戻ってこられるようにと、工廠の妖精たちと共に、艦装の改修や艦娘が操る艦船の改造に没頭して傷だらけになった——彼女にとって誰よりも綺麗で、とても優しい手を。

「じ、神通君？」

目を白黒させている提督に、何か言う代わりに神通はふわりと微

笑んで、指に触れるだけの口づけを落とす。

覚悟を決めた時の行動は流石、華の二水戦と、鎮守府の面々に囁し立てられそうな大胆な行動に、今頃になって顔が熱くなるのを自覚する。

「えっと、お食事までちょっとだけ時間があるから……だから、提督……先にお風呂に入りませんか……？」

「あ、いや……」

「……………ダメ、ですか？」

甘えるような上目遣いで問いかけに、提督の目が泳ぐ。耳まで赤くしながら答えを待つ神通の前で、右から左へ、左から右へと瞳のターンが続く。

たつぷり十数秒かけて、これはもう逃げようがないと腹を括り、提督は沈痛の面持ちで言葉を絞り出す。

「貸切りの……露天風呂の方でいいのかね？」

「あ………は、はい」

蚊の断末魔よりも小さな囁きを返して、コクリと小さく頷いた神通の顔は、山を彩る紅葉よりも赤く火照っていた。



気恥ずかしさから目を合わせられず、ギクシヤクと油の切れたブリキ人形がごとき動きで浴衣と肌着の替えを纏め、二人並んで一階の離れへと向かう。

仲居の説明に従い、離れの廊下をそろりそろり、警戒を怠ることなく慎重に進むと目的の場所はすぐに見つかった。

「こ、ここか」

「ここ、ですね」

『貸切り露天』——かまぼこ彫りで仕上げられた立派な看板を前に、ゴクリと仲良く喉を鳴らす。

——この緊張感、まるでMI作戦前夜の様だ。

「航戦の誇りを胸に戦う空母艦娘の少女が聞けば、ひどく複雑な顔をするだろう吹き。しかし、提督の側にふざける気持ちはただの一片もなく、真剣そのもので、難易度【甲】の大規模作戦攻略を任される方がいくらかマシというレベルで緊張していた。

「ぐう……」

「だ、大丈夫ですか、提督」

「あ、ああ、問題ない。ひさしぶりに胃が……ギリギリと痛むだけだから」

「そうですか……あとでお薬、飲んでくださいね？」

「う、うむ。念のため、持ってきて正解だった」

そう言って、提督は胃の腑の辺りを押さえ、隣に寄り添う神通は甲斐甲斐しく彼の背中をさする。

端で見ると分にはこれっぽっちも大丈夫そうでない光景だが、二人のこのやり取りは鎮守府において幾度となく繰り返されたもの。着任してから長い艦娘であれば、珈琲に砂糖を足す手間が省けた程度の反応で済ませるだろう。

「それでは、は、入ろうか」

「は、はひっ」

ここまで来たのだから撤退は許されないとはいいたげな表情で、貸切り露天風呂入り口の札を『入浴中』に裏返して暖簾をくぐる二人

に、「ラブホテルじゃないんですから……」とツツコミを入れながら。

脱衣所に入ると同時に、暗黙の了解で部屋の左右の壁際に離れて服を脱いでいく。互いに背を向けての脱衣だが、それ故に、する、しゆる、という衣擦れの音が余計に耳に響く。

「……も、もういいかね？」

「あの、その……はい、大丈夫……です」

一応の許可を得てから、壁の温泉効能一覽に釘で打ちつけたように固定されていた視線を後方に向ける。

「あ……」

いつもの緑色のリボンではなく、持参したタオルで髪を上にとめて、前面は提督と同じように、宿が用意してくれたタオルを駆使して隠す神通が待っていた。

無論、隠しているといっても男と違い、隠さねばならぬ箇所が多い乙女の柔肌。小さなタオル一枚では覆い隠せなかった部分が提督の視界に飛び込んできた。

赤く染まったうなじ、ほっそりとした鎖骨のラインや腰の括れ、そして白く、滑らかな肉付きの良い太ももを晒して恥じらう姿に、否が応にも目が奪われる。

「そ、そんなに見つめられると、私、混乱しちゃいます……」

まだ裸体を見られることに抵抗があるのだろう。提督の視線から逃れるようにモジモジと神通が身じろぎするが、逆にそれが艶めかしい。

——女性の脛に見惚れて神通方を失う仙人の話があるが……。

然もありなん。

自身の「男」としての劣情をまじまじと見つめてしまった気がして、少し落ち込む。清く正しいだけが男女の交際ではないが、好いた艦娘の前では下心など無いと格好をつけたい提督心という奴であつた。

「くちゅん！」

可愛らしくしゃみの音。冬には遠いとはいえ、既に季節は紅葉の頃。いつまでも小さなタオル一枚で凌げる気温ではない。

「体が冷えてはいけない、は、入ろうか」

「は、ははいっ」

後ろ髪は引かれたが、神通に風邪を引かせるわけにはいかないと、先導する形で露天風呂へ続くガラス扉へ手をかける。

——私は……先に髪と体を洗わせてもらおう。

悲しい目をして、提督はそう決めた。

腰に巻いたタオルの下、脛の裏に焼き付いたように浮かぶ神通の若く、瑞々しい肢体に我を失った己の半身が正気を取り戻すまでの時間が欲しかった。

湯の花の舞う乳白色の湯に体を沈める。

「ふあ……ん」

たまらず神通の口から声が漏れた。少し熱めの湯だが、山から流れてくる秋を孕んだひやりと冷たい風が、絶妙の塩梅にしてくれる。肩まで湯に浸かり、ぐっと伸びをすると、気持ち張っていた背中や肩が解れていくのがわかる。ピンと伸ばした手足の先から、日頃

の溜まった疲れが溶け出ていくようで、ああ、とまた声が漏れた。普段なら不快なはずの硫黄臭も、温泉という状況では心身を癒してくれる妙薬に感じるのだから面白い。

「気持ちいいですね……」

「……うぬ」

先に体を洗い終えて湯に埋まっていた提督に声を掛けると、返事の代わりにくつろいだ呻きが返ってきた。

「……鎮守府の大浴場もいいが、やはり温泉の心地よさには一歩劣るな」

どことなく悔しそうに提督は分析する。「提督さんと艦娘さんたちの疲労回復に一肌脱ぐのですー」という大義名分の下、暇を持て余した工廠妖精たちが建設した入浴施設——岩風呂からタイル風呂、電気風呂に水風呂サウナ等々、スーパー銭湯顔負けの充実のラインナップだ——も、人里離れた秘湯の宿で浸かる温泉の前では色褪せて見えた。

「そんなこと言ったら、また妖精さんたちが張り切っちゃいますよ？」

「うむ……その時は私も共に頑張ろう」

「ふふ、そうですね。提督、妖精さんたち側の人でした」

固い決心を匂わせる提督に、神通も苦笑するしかない。

ついさつき旅館の部屋で、昼夜を問わず忙しい執務の傍ら、と思ひ募らせながら握った提督の手だが、実のところ、機械弄りが数少ない彼の癒しであることも理解していたからだ。

もともと機械の方面に明るく、提督になる前は大きな鎮守府の工廠で技師として働く予定だったと教えてもらったことがある。その

言葉が証明するように、神通の素人目に見てだが、艦装や艦船の改修・改造の技術は工廠妖精たちと遜色ないレベルに思えた。

——工廠にいる時の提督はとっても楽しそうで見ている私まで幸せになっちゃいそうだけど……工廠で妖精さんたちと作業している時の方が楽しそうなのは……少しモヤモヤします。

不満とまではいかないが、想い寄せる乙女として承服しかねるものがあるのも確か。

「……………」

混浴という状況が彼女を大胆にさせたか。その辺りについて抗議すべく、神通は人ひとり分ほどあった提督との距離を詰める。

「な、なんだね？」

「……え、えい」

すすす、と静かに接近してきた気配に、提督が訝しげに送ってくる視線を無視して、神通はぎこちなく首を傾げ、彼の肩に自分の頭を預けた。

「う……………」

「……………」

どちらからともなく口を閉さす。一秒、二秒と沈黙の時間が延びる毎に、動揺や緊張が薄れ、代わりにむず痒い、けれども満たされている——そんな無言の空間が露天風呂を包み込んでいく。

「……………」

びくり、と神通の肩が揺れる。湯の中で握りしめていた彼女の手、提督の手が重ねられたからだ。

温泉の中心にいてなお温かい、包み込むような手のひらを感じなが

ら、そつと提督に向けた神通の顔は赤く上気していた。

「提督……………」

どこか熱に浮かされたような甘い声。それが温泉によるものでないことは、微かな期待の見え隠れする潤んだ瞳を見ればわかる。

貸切りとはいえ温泉の中で——理性の咎める声は聞こえたが、お互いを求めて脈打つ鼓動の音が掻き消してくれた。

「神通君」

「……………」

名前を呼ばれて、くすぐったそうに神通が目を細める。そんな仕草さえ堪らなく愛しく感じるのは、提督の頭もいい具合にのぼせているからだろう。

普段とは違ったシチュエーションに急かされるように唇を触れ合わせる。ついにむような口づけを重ねる度、チャブチャブと波の音が生まれ、湯面に波紋が広がるほどに、二人の唇の触れている時間が長くなっていく。

「提督……………」

提督を呼びながら何度もキスを返してくる様子は、親鳥にエサをねだるひな鳥のようで、愛しい気持ちは膨らむ一方だった。

「ちゅ……………」

息が続かなくなって唇を離す。だが息を吸う間も惜しいとばかりに、酸素を求めて喘ぐ神通の口腔に舌を侵入させる。

唇を割って入ってきた舌に一瞬、体をこわばらせた神通だが、その表情はすぐに恍惚としたものになり、歓迎するように自分の舌を絡めてきた。

「ンク……………」

舌先で唇の内側や、綺麗に並んだ歯列を一つ一つ数えるようになる。すると、神通の口から艶めかしい悲鳴がこぼれた。

競うように舌を挿かしながら、交換した唾液をすすする淫靡な音が響く。

「ふ、んう……………」

コク、コク、と神通は懸命に喉を鳴らす。舌を吸われながらは上手く呑み込むことができず、口の端から溢れた唾液が頬を伝っておとがい濡らす。

息苦しくはあったが、神通の腕は提督の肩口から頭の後ろに回されて、放すまいとばかりに舌先で相手の口内を舐っている。

——またキスしかされてないのに、私……………」

ジン、と頭の奥が痺れるほどの興奮と、かすかな疼きを下腹部に感じて体が震えた。

「っ、は……………」

「あ……………」

タイミングを見計らったように提督が唇を離す。

つう、と伸びた銀糸の橋を名残惜しそうに舌で追う神通に苦笑して、提督が耳元に唇を寄せて囁いた。

「……………」

「え……………」

確認されて、激しいキスの余韻に惚けていた神通が我に返る。ねだるように伸ばしていた舌を引っ込めて、音が出そうな勢いで何度も首肯する。

はしたない真似をしてしまった。恥じるように目を伏せた神通を「気にすることはない」と提督が抱き寄せて、あらわになった首筋

から耳へと口づけを降らせる。

「ひゃ、はう……」

唇の触れるくすぐったさに神通は息を呑み、提督の腕の中で身を震わせた。

提督と艦娘——それだけの関係を終えてからも変わらない初々しい反応がもつと見たくなり、唇で優しく食んだ耳介に舌先を這わせる。

「う、んん……はふ、はあ、あつ」

イヤイヤをするように神通が身をよじるが、それが本気の拒絶でないことは、彼女の切なげに漏らす吐息が教えてくれた。

「触るよ……」

律儀に一言断って、提督が手を伸ばした。大ぶりの果実を思わせる膨らみは柔らかくその手を迎え入れる。手のひらに少し余る乳房の重みと、しっとり濡れた肌の吸いつくような感触はそれだけで虜にされた。

痛くしてしまわないよう、昂ぶりを抑えながら指を神通の胸に沈める。武骨な手に似合わぬ優しく、繊細な愛撫に合わせて、神通の乳房は従順に形を変えた。

「てえ、とく……」

「く……っ」

しかし、鼻にかかった甘い嘔きは、薄紙一枚となった提督の理性に爪を立て、容赦なくかき走っていく。カッと火酒でも飲んだような興奮に頭の芯を炙られ、知らず愛撫に力が入った。

手のひらの中でツンと目「主張する」二つの薄紅色の蜜、その一つを挟むように摘んで指の腹で転がし、もう一方は本能の赴くまま、

乳房に顔を寄せて口に含む。

「ひあ……く、あんっ！」

ざらついた指に乳首を摘まれ、キュウと振じられる強い刺激に、神通の口から嬌声が漏れた。その声を「よし」の合図に、ピチャピチャと音を立てて提督が舌を蠢かす。

ぬめぬめした生温かな舌が硬く尖った薄紅色の肉芽を弾き、乳輪の中へ押し込むように突く。

「や、ア……ち、乳首ばかり……きゃふう!?」

ジワジワと這い上がってくる快楽に呼吸が乱れ、頭を振って身悶える神通。耐えるように下唇を噛んで、ギュッと閉じた目の端に涙を浮かべる姿は、彼女の限界に近いことを表していた。

「ダメっ……まだ、まだイッちゃ……」

年頃の少女として自慰に耽ったことは幾度もある。恥ずかしい話男——提督を想いながらはしたなく声を上げて達したことも。しかし、じかに提督に触られ、与えられる快楽はそれらの比ではなかった。

絶頂の足音を聞きながら、ぎりぎりのところで踏みとどまれているのは、艦娘としての厳しい訓練が育んだ精神力の賜物か。

チカチカと白く明滅する思考の中で、太ももを撫でていた提督の手が足の付け根に向かってせり上がってくるのを阻止する。

「待って、提督……待って、ください」

「す、すまない、嫌だったか」

「違います、そうじゃなくて……」

急に手首を掴まれ、行為を中断させられた提督が乳首から口を離して見上げる。自分の胸に吸いついていた提督に、「赤ちゃんみた

いで少し、可愛いです」と場違いな感想を抱き、神通は慈しむように頭を撫でながら言った。

「私ばかりしてもらっただけじゃなくて、提督にも……気持ちよくなつてほしいんです」

愛撫の残火に体を火照らせながら、湯の中へ手を伸ばした。愛撫の間にすっかり膨張しきった提督の男根を、神通のしなやかな指が撫で上げる。

「ぐっ、じ、神通君……」

下腹部に走った痺れにも似た快感に提督が腰を浮かした。「——だから、神通にもご奉仕させてください、ね？」

露天風呂の縁にある凹凸の少ない岩へ提督を誘う神通の目には、妖しげな光が宿っていた。

その目に魅了されたように、腰かけるのに丁度いいサイズの岩に提督が腰を下ろした。湯から出たことで必然、神通の前にいきり立った提督の分身が現れる。

血管の浮き上がったゴツゴツとした男の象徴はグロテスクで、何度見ても慣れない威容と、むせ返るような雄の獣性を漂わせていた。コクリと喉を鳴らし、神通がはちきれそうなほど膨張した提督の逸物へ指を絡める。触れた箇所から伝わる熱と、みっしり詰まった肉茎の弾力に自分が昂っていくのを感じた。

「こんなに大きく……いま業にしてあげますね」

広げた提督の足の間に跪いて、握った肉棒へ顔を寄せる。

小さく脈動するペニスに、提督へするような愛しげな口づけ。ピクリと震えた先端に舌を伸ばして、チロチロとくすぐるよう上下させる。

「くっ……うっ！」

「びちゃ……れう……どう、れふか？」

つつ、と肉棒の幹に舌を這わせながら神通が聞いた。

前戯で限界まで張りつめていた逸物への奉仕は、気を抜いた瞬間、果ててしまふような甘美な痺れを下半身に走らせる。

肉を食いしばって快感に耐えながら、気持ちがいいと提督は頷いて見せた。

「うれしいです……ん、む……じゅる、ん……んっ」

荒い息を吐く提督の反応に、普段なら決して浮かべない艶然とした笑みを浮かべて、提督の肉棒を口に含んでしゃぶり始めた。

口いっぱい男根を頬張り、その大きさを確かめるように緩やかに頭を前後させる。

「じゅずず……んじゅ、んん……はあ、あむ……」

「は……うぐっ、神通君、そんなに激しくされたら……」

熱心な口奉仕に根負けして、早々に龟头からカウパー液が溢れだした。提督が待ったをかけるが、口の中に広がる粘ついた感触とほのかな塩味に、神通の口淫はいつそう熱を帯びていく。

口内に溜まった我慢汁と唾液を塗りつけるように、ペニスの根元から先端を神通の唇が往復した。一定のリズムで頭を振る度、てらてらと妖しげに光る肉棒が神通の口腔を行き来する。

「うん、うむ、ちゅば……ちゅる、じゅううっ……」

くちゅ、ぐちゅ、と音を立てて男の逸物をしゃぶる姿は、清楚を絵に描いたような彼女のイメージからかけ離れた淫奔さで、提督に残された理性のゲージを容易く破壊する。

衝動的に神通の頭に手を置き、せり上がってくる射精感に肉を軋

らせながら提督が腰を動かす。

「神……通君……!!」

「んぶっ……!? は、あ……ちゅう……ずずっ！」

喉の奥に触れるほど深く突き込まれた龟头に神通が呻き声を上げるが、その瞳は悦びに潤んでいた。息苦しさはあったが、それよりも、遠慮を忘れるぐらい提督が感じてくれていることに満足していた。

口を押し広げて侵入する逸物は絡めた舌が火傷しそうなほど熱く滾り、間近に迫った限界に震えを大きくしていた。

快感の頂に達しようとしている提督の分身に胸が高鳴り、神通はいつそう食欲に提督の精を求める。

「出して……っ！ 提督、神通に……たくさん、神通のお口に出してくださいっ……ぐぶ、じゅるるるッ!!」

「は、ぐっ……うああ……」

提督が息を詰まらせた次の瞬間、緊張から堰を切ったように勢いよく、白く濁った粘液が噴き出した。

「ぐむっ、んんっ!? んぐ、んんうう……!!」

ドクン、ドクンと肉の棒が激しく脈動し、喉に絡みつくような濃い精液が容赦なく注ぎ込まれる。

生臭い白濁液に口を塞がれ、たまらず神通が苦悶の表情を浮かべるが、吐き出される欲情の塊を受け止めるべく、逸物を啜えたまま離さない。

「はあ、はあ……す、すまない神通君、口の中に……」

「ん、う……んんん」

射精を終えて虚脱していた提督が我に返り、慌てて神通の口に栓

をしていた男根を抜き取った。

「お、お口から溢れちゃいます……」

唇を押さえて、神通はふるふる頭を振る。

予想以上に放出された精液にむせ返りそうになるが、自分の奉仕に応えてくれた証だ。一滴さえこぼしたくないと、ほっそりした首を反らして、口の中の白濁液をこくり、こくりと喉を鳴らして懸命に飲み下した。

「ぶは……は、あ」

すべてを胃に収めて、神通が熱い吐息を漏らす。体の内側まで提督に染め上げられた錯覚に、恍惚とした笑みが浮かんでいた。

「……」

淫らに微笑む少女の姿を見て、吐精を終えたばかりの逸物がむっくりと鎌首を持ち上げる。

射精前と変わりなく、むしろ臍につきそうなほどの最大仰角で反り返った提督の主砲に、困った風に神通が言う。

「ああ……そんな、もう次発装填済み……」

言葉とは裏腹、うっとりとした瞳を濁させた神通を、半ば強引に露天風呂から引き上げる。

「……そんな顔で言われても説得力がないよ」

風呂と奉仕で火照った体を抱きしめ、甘い囁きを少女の耳朶に吹きかける。

器用に片手で神通の体を支え、そっと太ももの付け根へ手をやる。と、ぬかるんだ感触が待っていた。口奉仕だけでいやらしく花開いた淫裂に指を這わせると、溜まっていた蜜が溢れてくる。

「ふあ……ひっ、やあ……」

足を閉じて神通が抵抗しようとするがそれを許さず、愛液を絡めた指を恥丘の隙間へ侵入させた。

既に十分に濡れた秘所は抵抗もなく、あっさり歓迎するように提督の指を呑み込んで締めつける。

「ずいぶんと解れているようだ」

「い、言わないで……くふ、はううっ……！」

纏わりつく恥肉を指でかき分けてやると、神通が甘えるように頬を擦り寄せてきた。

「んう……提督が意地悪です」

「この状況で堪えるという方が、よほど意地が悪いと思うのだが」

媚肉を弄られて体を震わせながら、拗ねた声で抗議する神通に困

ったと提督は苦笑する。

可愛らしく口を尖らせながら、その下で指では満足できないと、

挿入をねだって食虫植物のように女陰が蠢いている。

清楚と淫猥、矛盾した少女の二つの顔。自分だけがそれを知って

いるという浅ましい優越感に、くらくらと視界が揺れるほどの興奮を覚えた。

本当は部屋まで我慢するつもりだったが、押し寄せる愛欲の火を

鎮めることなど不可能に近い。

膣口から指を抜いて、神通を抱いたまま立ち上がる。

腰ぐらゐの高さのある岩に手をつかせると自然、尻を突き出した

形になる。陶器のように白く滑らかな臀部を両手に掴むと、尻肉は

柔らかく形を変えた。

余計な贅肉のない、しかし女性らしい丸みを帯びた尻たぶを揉みしだくと、とろとろと淫液を垂らす割れ目だけでなく、その上の小

さなすほまりまで露わになる。

「う、うう……この格好、恥ずかしいです……」

肩越しに振り返った神通が、羞恥に泣き出しそうな顔で訴える。

せめてもと手を後ろに回して不浄の穴を隠すが、そんないじらし

い抵抗も、いまは提督の興奮を煽るだけだった。

「月並みな言葉だが……その、綺麗だよ」

神通の手を掴んで食い入るように恥部を見つめながら、本心から

の感想を伝える。

愛液に濡れた秘裂の入り口に痛いほど勃起した分身を触れさせ、

改めて聞いた。

「……挿れてもいいかね」

「あ……そんな聞き方されたら、私……混乱しちゃいます」

恥丘を押し広げる亀頭の硬さと熱に神通の腰がくねる。

誘うように腰を揺らして、期待と不安に潤んだ瞳を向ける神通に、

提督の中で最後の理性の糸が切れた。

いままで律儀に聞いていた返事を待たず、先走りを漕のように垂

らしていた怒張を、神通の最奥に向けて深々と突き入れた。

「ひう、ああんっ!?」

「くっ……す、すごい熱さだ、それに痛いぐらい締めつけてくる」

いきなり根元まで肉棒を押し込まれて驚く神通の腰を掴み、膣内

の道筋を確かめるように、逸物をゆっくり往復させながら提督が声

を震わせる。

熱しきった蜜肉は待ちわびたと言わんばかりに提督のペニスに

絡みつき、無数の肉裂が射精をせがんでしこいてくる。熱く蕩けた

膣内のうねりは肉棒全体を舐めまわして、脳髓まで浸食されてしま

いそんな快楽を生んだ。

長くは持たない。じりじりと背中を這い上がってくる射精への欲

求に、腰が勝手に動いて逸物の抽送を速める。

「くふっ、あはあっ! い、いきなり奥なんてえ……あああっ」

太く、逞しい肉の杭に穿たれる衝撃に神通が体を震わせる。

一突きごとにいやらしく広げられた膣口から、肉棒の力りに掻き

出された淫水がこぼれ、神通の足元に失禁したような水たまりを作

った。

「あふっ、んっ……ひやうう、ダメ……あはああっ!」

悩ましげに首を振った神通の頭から、髪を纏めていたタオルが外

れる。

長い髪を振り乱して嬌声を上げる神通を背後から抱き寄せ、自分

の体に密着させる。柔らかく、甘い香りのする髪と、しっとり汗ば

んだ肌の感触に昂ぶった提督が、獣じみた腰遣いで肉壺をかき混ぜ

る。

「んっ、はひ、あっ……て、てえとく、もう少しゆっくり……!」

そんな突かれたらイツちゃ……あんっ、んうん!!」

「ぐ、うっ……大丈夫、ちゃんと支えるから、好きなタイミングで

……!」

ガクガクと膝を震わせる神通を後ろからしっかりと抱いて、抽送が

単調にならないよう、挿入の角度やグラインドを加える。

「きゃふうっ! そ、それ無理い、ひあああっ! あんっ、あっ……

……くうんっ!」

体の奥で大きな熱の塊が暴れまわっている。激しいピストンにあ

られもない悲鳴を上げて、絶頂の予感に膣肉をひくつかせる。

「やあつ、あああ……奥つ、神通の一番奥う……提督のがトン、ト
ンって……！」

「はあ、はあ……わかるよつ、奥が吸いついて……ぐうう！」

「うっ……ひっ！ なにこれ、んふう……ひああっ！」

荒々しく膣内を蹂躪する提督の逸物。しかし、最奥にある子宮の
入り口には優しく、気遣うように亀頭がノックする。その度に、痺
れるほど甘い快感が神通の下腹部から脳天まで駆けた。

必死に首を巡らせて、焦点の定まらなくなった視界に提督を収め
てうわ言のようにねだる。

「はひ、はあ……イ、イキます、提督つ、神通……も、イキますか
ら、膣内……ください、私の膣内にいっぱい……！」

射精を促して自ら腰を振る。限界が近づいた膣内は戦慄くように
収縮を繰り返して、提督の精を搾り取ろうとする。

「ああ……ああ！ 私も、もう……！」

一心不乱に膣内射精をせがむ神通に対して、提督も強烈な快楽に
菌を食いしばりながら腰を突き上げる。激しい抽送によって白く泡
立った淫液が飛び散って、二人の足を濡らした。

「ふああっ！ あひ、ああん！ あはっ、ひああああ！」

「う、ぬ……く……ぐううう！！」

お互いを貪り合うような濃厚な情交に終わりが訪れた。

限界を幾度となく超えて膨らんだ逸物を、神通の膣奥へ突き立て
る。子宮の入り口をこじ開けるように押しつけた亀頭の先端から、
熱く煮えたぎるような白濁が噴出した。

「ひっ、あああ……出てます、提督の精子いっぱい……あ、うう……
……」

膣内に吐き出される濃厚な精液を感じて、神通は恍惚とした表情
を浮かべ、快楽にぐったりと虚脱した体を震わせる。

「はああ、はあ……だ、大丈夫かね？」

「は、はい……私は平気……ん、あ、やだ……ううう」

最後の一滴まで子種汁を注ぎ終えた提督の逸物が、膣内から引き
抜かれる。ポタポタと秘裂から精子と愛液のブレンド液がこぼれる
感触に、神通が慌てて足を閉じた。

糸を引きながら床に落ちた情事の証に顔を真っ赤にする様子に、
ただただ愛しいという想いが募る。

「神通君」

「はい……？」

名前を呼ばれ、小さく首を傾げる少女を抱き寄せる。

「えっと、その……あの……」

「き、気にしないでくれたまえ。ただ、なんとなく、こうしたいと
思っただけだから」

「……わかりました」

困惑する神通の髪を撫でながら、それだけ言っただけでささやく微笑
む。腕の中でふわりと神通も微笑んで、提督と同じように背中へ腕
を回した。

「はくちゅん……！」

「せ、せっかく温泉につかったのに、体が冷えてしまったな」

もう一度入り直そうか。そう言おうとして、はたと気づいた提督
が口を開いたまま固まる。

「て、提督 どうしたの？」

「あ、ああ、いや……」

先ほどまでの柔らかな表情から一変、硬く青ざめた顔で気づいて
しまったことを言葉にする。

「食事……十八時に部屋へ運んでくれると仲居さんが言っていた
な、と」

「あ……」

すっかり陽は落ちて辺りは暗く、ぼんやりとした外灯の光に照ら
された露天風呂の中、愕然とした神通の声は妙に響いた。

「すまない、私が我慢弱かったせいで……」
「ううう、提督のせいじゃないです……私も、提督と一緒に我慢で
きなかったから」

「そ、そう……か」

ちなみに。

お互いに歯止めがきかなかったことの照れと、多少の喜びを感じ
ながら、大急ぎで部屋へ戻った一人を待っていたのは、山の幸をふ
んだんに使った温かな料理の数々と、

「お気になさらないでください。よくあることでございますから」

こんなこともあるうかと、と厨房に話を通しておいでくれた仲居
の手慣れた仕事と、この上なくいい笑顔であったことだけ書いてお
く。

肌寒い季節。太陽は顔を出しておらず、厚着をして出かければならない気候にため息をつく一人の男が居た。その男は上に立つ者で数多に存在する艦娘達の司令官を務めている。そして、その男に一枚の毛布をかける艦娘が居た。

「提督、あんまりため息を吐きますと幸せが逃げてしまします」

「……そうだな」

他愛のない会話。静かな執務室には提督と秘書艦である神通のふたりきりだった。無音で、時計の針がカチカチと鳴り続けている。なので、余計に提督のため息は目立ってしまうのだった。

神通は提督に毛布をかけてから自分の机につく。主な仕事は書類の整理だ。提督に渡すもの、渡す必要がないもの、書類が謝っているもの。慣れた手つきで区分けをしていく。

「そういうえば、神通。午後の予定は？」

「はい、午後一には工廠へ向かい改修の定例報告。その後に財務省からお客様がいらっしゃる予定なので、会議室へ足を運んで頂き、会議。予定は一六時までとなっています。会議の内容は先日提督が提案致しました予算要求の件です。資料

のほうは既に準備してあります」

「敏腕秘書だな」

「勿体無いお言葉です」

神通は少しだけ頬を染め提督から目を逸らす。

「一六時からやっと自分の執務が出来るというわけか」

「はい、お付き合い致します」

「ありがとう、でも神通……最近無理をしていないか？今日

はゆっくり休んで欲しいのだが」

「お気遣いありがとうございます、しかし私は秘書艦です。

誠心誠意執務に務めさせて頂ければ幸せですから」

「……」

少しだけ間が空く。提督が難しい顔をし、顎に手をあて考え事をする。

「……休むことも執務のうちだ。今日はひとりでどうにか出来る範囲だから大丈夫だ。休んでくれ」

「……提督」

こうなると意地でも休ませることを神通は知っていた。なので、ここは潔く引き下がる。

「分かりました、会議後にお休みを頂きます」

神通の思いは複雑だった。休みを貰っても、提督が休みでなければ結局は意味がないと思っていたからだ。休暇を過ごすなら共に過ごしたい……出来ることなら、提督と共に居た

い。本音は言えない。思いと仕事は分けなければいけないから。

「それじゃあお昼にしよう」

「はいっ」

書類をまとめて、神通と提督は食堂へと向かった。

一六時。会議を終えてから、提督は執務室へ。神通は自室へ向かった。神通が自室に入ると、姉である川内が居た。

「あれ？神通こんな時間に珍しいね」

「……姉さん」

神通は静かに川内の胸に飛び込んだ。最初は慌てた様子を見せた川内であったが、次第に神通の鼓動を感じて思いを察した。

「難しいことを考えているね」

「私は……私に嘘をついています。こんなにも好きなのに」

「それを隠しているのが辛い？」

「……はい、とても辛いです」

「そう、辛いね……」

川内は神通の背中をさすり、頭を撫でて神通を落ち着かせた。

「あの人は無理をしすぎです、それに頑固です……ご自分のことより私のことを気にかける。だから、だから……」

「……だったらさ、こんな所で悩んでいないで提督のどこに行きな？神通のその顔を見せたらきつと提督も分かってくれるよ」

「……姉さん」

神通はゆっくり川内から離れると自室を後にした。走って執務室へ向かっていく。

「……まったく、頑固で自分よりも提督のことと思っているのはどこの誰なんだか」

「……提督っ」

執務室の扉を開くと、神通は驚いた。

「て、提督……？」

恐る恐る近寄ると、提督は毛布を肩にかけながらうつ伏せになっていた。最初神通は倒れたのかと思ったが、どうやら眠っているようだった。

「……全く、提督は。疲れているのは一体どちらなんですか」
独り言で提督の愚痴を言う。眠っているから、今なら好きなことを言えるかもしれない。

「……ふふ、可愛い寝顔」

ふと、神通の中に眠る何かが目覚める。抑止出来ない、神通はゆっくりと提督に近づいていく。

「……提督」

顔を近づけて、唇を重ねる。その瞬間は一瞬だったかもしれないが、神通にとってはとても長い時間に感じた。

「……はっ」

ふと我に帰る神通。

「私は、何を……」

「……そうか、そういうことだったんだな」

「!？」

声の元は提督だった。提督は起き上がり、神通の顔を見上げる。

「すまん、気づいてやれなくて……」

「てい、とく……」

「いや、本当なら気づいていたのかもしれない。だけど、私のほうが怯えていたのかもな。違ったらどうしようってな。そう考えていたら気づいちゃった、すっかり神通に惚れてしまったことに」

「……惚れ、え、あ……」

「……もう一回してくれないか？」

「……んっ」

今度は二人の意識がはっきりした状態で唇を重ねる。長く、長く……今までお互いが我慢していたのを埋めるように。

「ん、ちゅ……」

唇で唇を舐めるように絡める、神通は涙を浮かべ、提督は

神通を抱き寄せる。

「……てい、と……くっ……ん、ぷはあ」

唾液が互いの唇に橋をかけ、神通は蕩けた顔をしていた。

「……神通、好きだ」

「……提督、私も大好きです」

二人は抱き合い、やっと言いたかったことを言えて満足していた。だが、これだけで終わりではない。提督は少し離れ、

神通の顔を見ながら言う。

「神通、いいか」

「……はいっ、来て……ください」

提督はソファに神通を押し倒し、胸を弄った。服の上からでも分かる大きな乳房に、提督は夢中になってしまう。その必死さから神通は高揚し、吐息が漏れてしまっていた。

「んあ……は、提督……」

「神通……ずっと、触りたかった」

「いっぱい、触ってくだ、さ……ん、はあ……」

衣服を脱がし、綺麗な肌が露わになる。乳房の先にある突起はぷっくりと膨れあがり、魅了した。我慢できずに、提督はしゃぶりつくす。舌と乳首が触れ合い、転がす。神通は声をあげて、しだいに汗が吹き出す。

「あっ、は……あん……ん、んっ……きもち、い……」

普段真面目な神通がここまで乱れていることに驚きつつ

も、もっと乱れている所を見たいという欲が更に興奮を高鳴らせる。乳首を吸い上げつつも、提督は手を太ももに移し、スカートをめくりながらも根本まで運び秘部を指でこする。

「そこ、はあ！」

「ダメか……？」

「……触って、ください」

ああ、こんなにも自分の秘書艦は破廉恥だったのかと。神通の表情は涙と、汗と、涎でぐちゃぐちゃだった。その光景がとても淫らであり、美しさを感じるほどであった。

指でこすると徐々に湿り気をもちはじめ、秘部の形がはつきりとにじみ出て来る。

「提督、提督……直接、触ってください……」

舌足らずな神通の言葉に従い、下着を脱がす。クリトリスは膨れつつも、愛液で飾り、提督は思わず見惚れてしまう。

「あんまり、じーっと見られては……」

「綺麗だ、とても……」

「……恥ずかしいです」

こんなにも綺麗なものを自分が触って良いものなのかと思いつつも、自分色に染めてみたいとすぐに意見が変わり、提督は指でクリトリスを弄り始める。

「ひゃ、あ！ああん！」

びくんと腰が浮いてしまう。思わず提督も驚くが、味を

しめたのか笑みがこぼれてしまった。それを見た神通はこの後どうなるのかを想像し、更に頬を赤くした。

「あ、あっ！」

「気持ちいいのか……？ここが」

「はい、い……きもち、いい……んああ!!」

声が最初よりも大きくなっていた。神通は今まで感じたことのないような気持ちよさに浸かり、提督に全てを委ねていた。しかし、ここで神通はあるものが身体に触れていることがわかった。提督の股間にある大きくて硬いものが、ずっと自分の背中に当たっている。提督はこんなにも気持ちよくしてくれているが、提督は気持ちいいのだろうか？そう思い、神通はゆっくり提督の股間に手を伸ばした。

「……!? 神通！」

「……提督も、気持ちよくなってください」

クリトリスを触っていた手が離れ、神通が提督のズボン、そして下着を脱がす。すると、今まで神通に対して興奮したこともあり、太く、大きくなったものが神通の目に前にあった。

「……こう、でしょうか」

手で優しく包み込み、握る。ぎこちない手つきで上下にし、擦る。もどかしさがありながらも、初々しさが更に興奮させる。

「……む、む」

あんまり気持ちよさそうにしていけない提督を見て神通は意地になる。強く握ってみたり、弱く握ってみたり……様々なことを試しながらも提督の反応を見た。しかし、自分がクリトリスを触られた時のような反応はしなかった。

「……あ、むっ」

手ではダメだと感じた神通は提督のものを啜える。唾液をペニスにつけ滑りを良くし、さっきまで手で包んでいたものを今度は唇で包み込む。口内の温かさが、ペニスにとって心地よいのか先程よりもビクビクと脈を高鳴らせる。

「じんつ、それ……すご、い……」

「ん、へいほふ……ひもひい、れふ……？」

「うあー！」

神通は心のなかで良かったと思いつつ、フェラチオを続けた。ぬぶぬぶと淫らな音が執務室に鳴り響く。いつも静かな執務室とは思えないほどだった。その異常さが、ふたりをさらに興奮させる。

「れろ、ちゅ……る、ちゅむ……ん」

舌で龟头を舐めつつも、上下運動させて口を性器のようにする。

「じんつ、も……で、る」

「らひへ、ふらふあ……」

提督は神通の頭を抑え、激しく出し入れをする。

「く、うあ……！」

「んんっ！」

勢い良く出てきた精液を必死に受け入れる。喉の奥にしまいくこみ、ごくごくと飲み込んでいく。喉でつかえるような感覚であったが、必死に唾液と共に流し込んだ。

「ん、は！けほけほ……」

「はあはあ……神通、大丈夫か」

「けほ……はい、大丈夫です。ご、ご……」

「……？」

「ごちそうさまでした……」

「……神通!!」

「きゃっ！」

もう我慢が出来ない。ここまで魅了されてしまったのは、最後までしてしまおう。提督はそう思い、神通の秘部にペニスをあてがう。

「神通……」

「来て、ください……初めて、なので……優しく……」

「ああ……」

龟头をあて、こすりつけ愛液をつけ拡張するように挿れいく。膣内はきつく、挿れれば挿れるほど、神通が唸る。

「あ、あ……ふ、あ……つつ、あ……」

「きつ……」

「提督、キス……して……」

「んっ……」

唇を重ねると、神通は緊張がほぐれたのか、肩の力を抜いた。そうすると、膣内も和らぎ、ペニスはゆっくりと奥へと入っていった。

「あ、はあん！ん、あ……ああ！」

奥まで入ると今までの中で一番神通の声は鳴り響き、それと同時に身体をビクつかせた。

「奥まで、入ったぞ……」

「嬉し、い……です、すごく……う、う……提督の、あつくて、大きい……感じます、入って……凄い……」

「動くぞ」

「……はいっ」

ゆっくり抜いて、勢い良くまた挿れる。神通は目を見開き、腰を浮かせ、汗を飛び散らせた。

「はあ、あああ！」

今までの比ではないほどの快樂が神通を襲う。頭の中は徐々に真っ白になっていった。

「もっと、もっと……」

「分かった……」

思わず強請ってしまう姿を見て、提督は腰を振る速度を早

める。激しく出し入れをし、神通は愛液でソファを濡らす。

「提督、好き……好き、好き……」

「神通、愛している、ぞ……」

ぱんぱんぱんっ、と肌と肌がぶつかり合う音。提督はこみ上げて来るものを感じ、抜こうとする。しかし。

「ダメ、です……膣内に、くだ、さ……」

足で提督を抑えつけ、無理矢理膣内射精をさせようとする。提督は逆らうことが出来ずに、腰を振り続け、絶頂を迎えようとしていた。

「神通、神通……うっ、く……」

「ふ、あ、あああ!!」

膣内に精液が広がり、その熱さを神通は感じ取っていた。ドクドクと射精は止まらず、その度に神通はびくりと身体を動かしていた。

「あ、あっ……は、あ……あっ……」

「うあ……」

「んう！」

ペニスを抜くと、神通の秘部から精液が垂れる。その姿を見て提督は思わずまた興奮してしまう……だが、神通はもう息を切らして、涙を浮かべていた。ならば、することは神通を慰めることではないか。

「……神通」

「提督」

抱き寄せると、応えるように擦り寄る。今まで近くながらも、少し遠かったふたりが、今最もお互いが近いところに居る。その事実がより一層安堵感を持たせるのだった。

「……臆内に出しちゃいましたね」

「抜こうとしたんだがな」

「……初めては全部提督にあげたかったの」

「子供が出来たらどうする」

「……責任取ってくれますか？」

「……仕方ない、喜んで取らせてもらおう」

「ふふ」

神通は柔らかく笑う、それを見た提督は神通の頭を優しく撫でるのであった。

時刻は二〇時。ことが終わってから服を着てふたりで執務をこなし、なんとか終わった時刻である。これから神通は提督の部屋で眠ることにした。秘書艦としてはなく、今は婚約者として提督と共に歩んで行くことにした。

「そっかあ、神通良かったね」

「はい、川内姉さんもありがとうございます」

「いいんだよ。神通が幸せなら私も幸せだしさ？」

「姉さん……！」

荷物をまとめ、寝間着等は提督の部屋に持っていく。

「……しかし、まあもうやることやった感じ？」

「姉さん！」

「凶星かあ、いいなあ〜！」

「……もう、無粋ですよ」

口を尖らせながらも、荷物を一つにまとめあげた。

「それじゃあ、私は提督のお部屋で寝ますので」

「うん、那珂には遠征帰ってきたら言っておく。まあ後日凄い質問攻めされると思うから覚悟しておいて。あーあと」

「……？」

「……？」

「姉さん的にはまだ子供認めないから、避妊はちゃんとするように」

「姉さん！」

思わず川内の頭を叩いてしまう。

「痛い！だ、って！大切でしょ！」

「そうですけど！」

……先程自分がやったことを思い出すとまた頬が赤くなる。なので、神通は考えずに自室を後にした。

「……神通、おめでどう。本当に、良かった」

姉である川内は見届ける。妹の幸せを。

提督の部屋につくと、布団が二枚敷かれていた。片方は提

督の、もう片方は神通のだろう。急いで寝間着に着替える、途中で提督が神通を見ていたが、神通は気にせず着替えて支度する。

「……て、提督。失礼します」

「ああ、いつも一人だったから新鮮だ」

「ふふ、もう寂しくないですね」

「本当に、そうだ」

布団に入るが、神通は見慣れない天井以上に違和感が拭えなかった。もっと側に行きたい、そう思い神通は提督の布団に入る。

「こうじゃないと、私が寂しくなります」

「……布団一つでよかったんだな」

「はい」

また神通は柔らかく笑った。提督は抱き寄せ、こうやってしているとお互いの鼓動も伝わるようだった。神通は提督を見上げる、提督も神通の顔を見る。恥ずかしさ以前に嬉しさがこみ上げ、唇を重ねる。

「……ん、また……欲しくなりますね」

「……いいぞ」

ふたりの夜は始まったばかり。執務室であったことを思い出しながらも、長い夜は続いていくのであった。

おしまい

清川 恒光





お帰り神通!



軽巡洋艦
神通

遠征よりただいま
戻りました

**神通ちゃんが
提督を元気付ける話**

ユキ



怪我なく
戻ってよ
かった...

ほ



あつ...
私も



提督! 私は
入渠中の子達の
お世話してきますね



神通ちゃんは
そのまま♡

え?



やっと戻れたし
いっぱいなさい
甘えちやいなさい

提督ったら
神通ちゃんが
遠征から戻るまで
ずーっと
そわそわして
たのよ♡



…提督

あの…



愛宕さん
たらっ…
はっ…



かあ
…っ!?



皆には内緒に
してるから

カチヤ
キキキ

安心して
提督との事は

お疲れじゃ
ないですか？

早く
おやすみに
なれた方が：

神通パンツ
丸見え

おっぱい
丸見えでも
パンツは
恥ずかしいと！

やっぱり
嫌なんだろ？

え？

オレにこうゆう
事されるの
辛いなら…

違います！







それと同時に
このままで
いいのかって

いつも
神通が無事に
帰って来ると

すごく
安心するんだ

神通は
どうしたい？

提督
私も…

あぁ..
じわ



わかってるよ
神通のここは
素直だな



そんな
激しっ…!!





すみません：
わたし粗相を：



すごい
中がトロトロだ



提督の
私の中に…



ククッ
ククッ
ククッ

ククッ
ククッ
ククッ

キョッ
キョッ
キョッ

ククッ
ククッ
ククッ

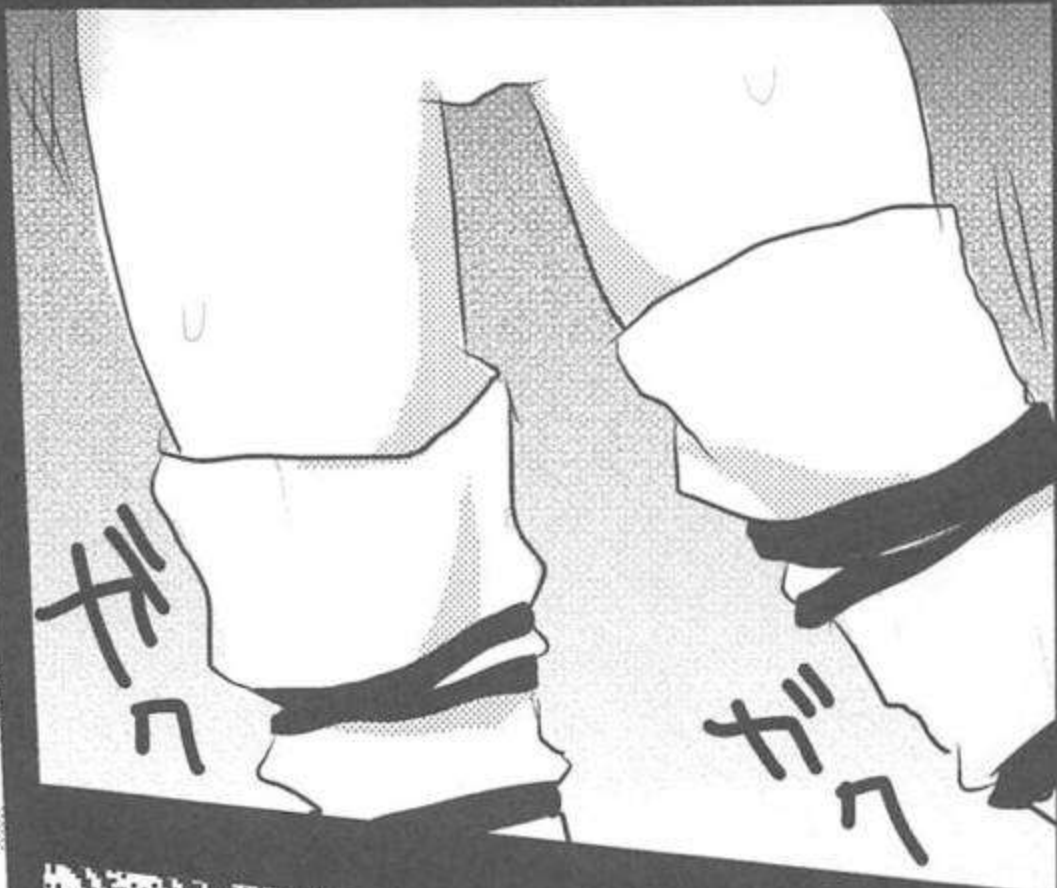
おしまい♡

夢の中でも
怒られる
オレって…

おしまい♡

あつ…提督







いつちや…



なにこれ…



提督…
これ…またして
ください



『川内が報告に来る 5分前』

PandaCotta * ささくまきようた



羽根神通ちゃんともふもふエッチ

CK / 旧七式敢行

隠し事が苦手な人間というのは、どこにでもいる。
例えば、この鎮守府の提督と秘書艦がそうだ。

午前中に訓練を切り上げ、もう一つの戦場である執務室に戻った神通は遠征の報告書に確認の印を押す。
ちら、と隣の机に座り海図とにらめっこをする提督に目を向ける。

目つきが悪い、と周囲から言われている彼はこの日最高に悪い目つきでソロモン海峡をにらみ続けている。

「どうした？」

「あつ、いえ、なんでもありません……ごめんなさい」
視線に気づいた提督に声をかけられ、神通の背中で白いものが揺れた。

純白の翼——鳥と同じ白い羽毛が綺麗に生えそろうた翼が神通の背に生えてから半年近くになる。

それが深海棲艦から受けた傷痕から生えてきたことを知っているのは神通と提督のみ。

「俺は5時までしか仕事をしないからな」

提督の目つきは、まだ悪いままだ。

「不知火です。第三艦隊、戻りました」

ノックの音に続いて、ラバウルの高湿多湿の空気とは対照的な冷たい声がドア越しに響いた。

「入れ」

桃色の髪を結わえた陽炎型2番艦——不知火が執務室に入ってきた。

「東京急行任務、作戦終了しました」

「ご苦労、今日はもう休め」

神通の机の上に報告書を提出した不知火に提督が声をかける。

「はい……はい？ よろしいのですか？」

いつもならこのまま訓練や近海警備に行かされるはずなのに、それが無い。

「休めるときに休んでおいてください、不知火さん」

神通も報告書を受け取ると不知火に休むよう命令した。
「わかりました、失礼します」

「司令と神通先輩、何かあったんでしょうか？」

執務室を出た不知火は外で待っていた初霜に自分の感じた違和感の原因を尋ねる。

「何かあるというか……これから何かあるというか」

初霜は少しうつむきながら答えになっていない言葉を返す。

「どういうことですか？」

「いいから！ 明日には仲良くなってますから」

初霜は釈然としない様子の不知火の手首を掴むと足早に執務室から離れた。

——提督も神通さんも、隠すのが下手すぎますっ！

赤くなつた顔を不知火に見られないように初霜は兵舎へと急いだ。

執務室に似合わない間の抜けた鳩の鳴き声で、時計が5時を知らせた。

「よし、終わった！もう仕事はしないぞ！」

まとめ終わった書類の束をまとめてクリップで止め、神通に渡す。

「お疲れ様でし……きやつ」

いきなり抱きしめられ、神通は飛び上がりそうになる。「ダメです、提督……窓が……」

「朝からずっと我慢してたんだ、これ位いいだろ？」

今夜、と決めてから我慢してきたのは神通も同じだ。

「風紀が乱れてしまいます……んう」

言葉でだけ小さく抵抗し、提督のキスを受け入れる。

提督は構わず神通の太ももを撫で、そのままスカートの中へ右手を滑り込ませる。

肌はいつまでも触っていたくなるなめらかな触り心地と絶妙なハリで男を誘惑する。

「誰か外にいる。気づいてないフリをして」

右手で神通を抱き、左手で胸を揉む提督が神通の耳元に口を寄せる。

「で、できません……無理ですっ！」

驚きのあまり提督の腕の中で小さく跳ねた神通はふるふると首を横に振る。

「大丈夫、行つたみたいだ。壁に手をついて」

提督に促がされがれるまま、神通は壁に手をつく。

スカートが捲られ、ぬるく湿った空気に神通の下着が曝される。

提督の手が行き掛けの駄賃とばかりに下着越しに神通のお尻を撫でる。

「ひやつ……あう……」

下着に指をかけ、ゆつくりと下ろすと、優美な曲線を描くお尻の上を薄水色の下着が滑っていく。

「ふう、うう……」

くるぶしのあたりまで薄布が落ちてくると、提督の命令を待つまでもなく神通は右足を、次いで左足を上げる。

屈んだ提督は下着に無理な力がかからないよう優しく片足ずつ脱がせ、神通の脱ぎたての下着を自分のポケットにねじ込んだ。

「いい眺めだ」

そう言われるとなおさら自分の今の格好を意識してしまい、神通の中で何かうずく。

「ここでするのも悪くないけど……見つかるよ嫌だし」

「ひやつ」

お尻にキスされ、神通は飛び上がった。いつも後ろから抱くときは違う提督の動きに神通は戸惑った。

「続きは部屋でしよう」

「えっ、あの、でも……」

神通はスカートを直し、恥ずかしそうに内腿を擦り合わせる。

「パ……」

「ぱ？」

「パンツ……神通のパンツ……返してくださいっ！」

「でも部屋に着いたらすぐに脱がせるよ？」

そのあとの行為が浮かんでしまい、神通の顔が今度は耳まで赤くなる。

「提督のえっち……っふうっ……」

抗議の声をキスで封じられ、神通は抵抗を諦める。

「行こう」

提督の言葉に神通は従うしかなかった。

「やっぱり神通の感じてる時の声を聞かれたくないし」
神通の身体が一気に火照っていく。

「早く、行きましよう」

普段は自分から手を繋ごうとしない神通が提督の手を取って急かす。

「神通はせっかちだなあ」

「提督のせいです」

提督の私室は執務室のある棟とは別の建物にある。

「だいぶ降ってるな」

赤土に覆われた地面を大粒の雨が絨毯爆撃し、すでに大きな水たまりがいくつも出来ている。

幸い渡り廊下でつながっているの、濡れる心配はなかった。

誰かに見られていないか、誰かに聞かれていないか。

それを気にするほどに神通の体は恥ずかしさと興奮でさらに熱を帯びた。

部屋につき頃には、内腿を生暖かい蜜が伝っているのが自分でもわかるほどに昂っていた。

「神通」

扉にカギをかけると、提督は神通に向き直った。

「はい」

「今日はいっぱい、エッチしよう」

もう少し気の利いた言い回しもできるだろうに、提督は単刀直入に言った。

「提督のばか……」

でも、そうやって包み隠さず言ってくれる提督だから、神通は受け入れたのだ。

頬を撫でる大きな手の薬指にある白金の輝きは神通の薬指に付けているのと同じ、契約の証。

「ふっ、ちゅ……」

頬を撫でていた手に顎を掴まれ、軽くキスをされる。僅かに残る麦の香りが口の中に広がる。

そのまま抱きしめられ、お互いの体温と鼓動を重ねる。

「神通の匂いがする」

「申し訳ありません、時間がなくて……」

午前中、訓練から戻ってそのまま執務室での秘書艦業務に入ったせいで、神通は汗を洗い流す暇もなかった。

「このままでいい」

「それに、こっちのほうが興奮する」

「提督は、変態さんです」

「なら、ノーパンでこんなに濡らしてる神通は？」

「ひゃんっ！」

提督は指ですくった神通の蜜を見せつける。

「違いますっ！ これは汗……です……たぶん……」

「じゃあ、確かめてみようか」

神通の前にかがみ込んだ提督はスカートの中に頭を突っ込み、覆う布のない神通の入り口を舌でこじ開けた。

「だめっ！ ふわ、あっ……」

らついた異質な存在が侵入し、神通の敏感なところをまさぐる。

「んくっ、うう……そこ、だめ……」

小刻みに震える神通の足を開かせると、提督の舌は更

に奥へと侵入する。

うごめく舌は探るように円を描き、弱点を見つけると執拗に責め立てる。

体中に広がっていく甘い誘惑に負けた神通は提督の頭を抑えていた手から力を抜く。

「音、立てないでください……恥ずかしいです」
「んー？」

首を傾げながら提督は神通の股間に吸い付き、わざとらしく大きな音を立てる。

「やっ、提督、下品ですっ！」
快感と恥じらいでバサバサと翼が暴れる。

「神通のここ、美味しいよ」
「あうう……言わないでください……あう、んっ……」

激しい吸い付きをやめ、襲の一枚一枚を確かめるように提督の舌が神通の中を探る。

神通が逃げないよう腰を抑えていた両手はいつの間にか背後へと回り、神通のお尻を揉みしだいていた。

「やっ、だめ、来ちゃいますっ！」
提督はもがく神通の腰をしつかりと押さえつけ、溢れる蜜をすすり、舌をねじ込み、中をつつき回す。

「あっ、だめっだめだめあああああっ！」
逃げることもできず、神通は絶頂を迎えた。

「おっ」と
崩れ落ちそうになる神通を抱きとめると、提督は自分の隣に腰を下ろすよう指で示した。

「神通、少し太った？」
「うん、少し太った。」

「神通の背で翼が揺れた。この翼の分も神通は重いのだが。」

「いや……違う」

思い当たる節があつたのか、提督は神通のセーラー服をめくり上げた。

白い肌には高速修復材でも埋めきれなかった傷跡がいくつも残っている。

「まだ、産まれてないのか」
提督の言葉に神通は無言で頷いた。

神通に翼が生えてから、彼女は2週間に一度、卵を産むようになった。

「これも、提督と神通だけの秘密。」
「ごめんなさい提督、隠して……」

「大丈夫だよ、神通」
表情を緩めた提督はいたわるように神通の髪を撫でた。

「もう産まれそうなんだから？」
「はい」

「じゃあ、見てるから、神通のたまご産むところを」
「だめですっ！ 恥ずかしくて死んじゃいます！」

神通はぶんぶんと首を横に振る。
「えー？ 見たいなあ」

「駄目です」
きつぱりと断る神通だが、これで引き下がるほど提督は潔くない。

「じゃあ、これからエッチしない」
「どうしてそうなるんですか！」

三段階ほど重要なところをすっ飛ばして食い下がる提督に流石に神通も声を荒げる。

「神通の事をもっと知りたいから、じゃダメかな？」
「うう……提督はやっぱり変態さんで、ズルいです」

神通は少し躊躇してからスカートを外し、足を開く。大事なところが提督に丸見えになった恥ずかしさで翼も身体も震えている。

「あの……提督、ひとつだけお願いがあります」

神通は提督に向けて両手を伸ばした。

「手を握って、離さないでください」

提督は火照った神通の手を握る。

「こうか」

提督に握られた両手を握り返し、神通はいきんだ。

「ふう、んっ……くう……」

汗ばんだ指が滑り、そのたびにお互いの手を握り直す。

「はあっ、うぐっ……んんっ……」

神通は引き裂かれそうな痛みを耐える。いきむほどに

力がこもる両手を、提督は優しく握る。

「がんばれ、神通！」

額にも汗が浮かび、荒い呼吸に合わせて翼も揺れ動く。

抜けた羽が翼の風で部屋の中を舞う。

「きまつ……来ますっ！ あああああつ！」

ひとときわ大きく神通の背中が翼が暴れ、神通の股の間

からころんと翼と同じ純白の卵が産み落とされた。

「はあ……はあ……産まれました」

「よく頑張ったな」

脂汗で濡れた髪を提督に撫でられ、神通は目を細めた。

「これは……危ないからこっちに」

提督は神通の愛液で白く輝く卵を部屋の隅の座布団に

乗せる。

「ごめん神通、きみが卵を産むところを見ていたらもう我慢できなくなつた」

提督の股間の膨らみはもう隠しようがなかった。

「仕方のないひと」

そう言いながら神通はチャックを下ろし、そつと肉茎を取り出す。

ツンと鼻を突くオスのニオイが神通の身体を疼かせる。

「いつもより、大きくないですか……？」

ずつと心待ちにしていたせい、目の前でそり立つ

モノは普段より大きく見える。

「気のせいだつて」

「うう……はあむっ……」

訝しみながらも神通はゆっくりと口を開け、赤黒い先端をいっばいに頬張る。

「んっ、くふ……」

先走りのぬめりに続いて、理性を焦がすニオイが神通

を欲望で染めていく。

「んっ、じゅるっ、ちゅうっ……」

鈴口を舌先が擦り、提督の腰が動く。

「ううっ、神通、そこやばっ」

「……ふふっ」

提督の弱点を見つけた神通はわざとそこを避けるよう

に別のところを責める。

「じゅるるるっ、ちゅぽっ」

「げ、下品だぞ、神通……おおうっ！」

さっきのお返しとばかりに大きく音を立てて提督のも

のを吸い上げ、弱点を舌で突いて黙らせる。

「へいほふらっへ、げふいんれひたよ？」

「神通、ごめん」

「んっ、ふっ……ちゅっ」

神通は妖しい笑みを浮かべ、先端に優しく口づけする。

「はうあつ！」

「きやつ！」

びくんと跳ねた提督の肉茎が神通の頬を打った。

「いけないおちんちんさん……あむっ、くぼっ……」

「あつぐ、神通、痛いっ！」

さしもの提督も甘噛みされた痛みで腰を浮かせた。

「ふうん？」

神通は先ほど歯を立てたところを舌でねぶる

「やられたらやり返すのが、二水戦です」

「うおあ！そこはヤバいっ！」

悶える提督に神通はさらに追撃をかける。

「んつく、ん、ううんっ、んぐっ……」

喉まで使って全体をしごき、添えた手で袋を撫で回す。

「んんっ、じゅぽっ、ちゅ、はふっ、じゅるっ」

龟头をぱっくりと啜え、舌でぐるぐると舐め回す。

「うっ、ああつ、で、出るっ！」

「んぶうっ……」

青臭い臭いと粘つく精液が口の中に吐き出される。

「んっ、こくっ……」

吐き出しそうになるのを我慢して、神通は喉に絡みつ

くそれを飲み込んだ。

「提督、溜まってらしたんですね」

「飲んだのか、全部」

神通はむせながら頷く。

「けふっ……濃かった……です」

「無理して飲まなくていいのに、神通は真面目だな」

「だって……提督の精液、もったいないんですもの」

「ああもう、神通は可愛いなあ！」

提督は神通を抱きしめ、優しくキスをする。

神通を抱き寄せる提督の腕が彼女の背中——翼の付け

根に伸び、人差し指でそつと撫でる。

「ここ、触られるの好きだもんな？」

こくりと頷く神通。

「いっぱい触るからな」

「はい……ん、ちゅ」

提督の唾液と精液の残りが神通の口の中で混ざり合い、

極上の媚薬になって神通の理性を溶かす。

「後ろからでもいいか？」

「はい」

神通は起き上がり、四つん這いになって提督の方へお

尻を突き出す。

長い髪が肩と翼にかかり、白と黒の素晴らしいコント

ラストを生み出す。

「ああ、綺麗だよ神通」

曲線を描く美尻を提督の手が撫でた。

神通は後ろからされるのが好きだ。というよりも、躰

を重ねる時は必ず一度は後ろからしてほしいと言う。

提督もこの体位は嫌いではなかったし、何より、翼を

痛める心配がないのがいい。

「あつ、んうう……」

もう十分過ぎるほどに濡れそぼった神通のそこは提督

の剛直をすんなりと受け入れた。

媚肉を味わうようにゆつくりと侵入してくる存在を感

じながら、神通は甘い息を漏らす。

待ちに待ったものが神通をこじ開け、押し入ってくる。

「神通の中、とっても気持ちいいよ」

「言わなくていいですからっ！ あんツ！」

引き抜かれる肉槍のかえしが神通の膣内をこそぎ、甘い快樂が体中を駆け巡る。

「くふ……うっ……あぁっ」

突き入れられ、熱い刺激が心を満たしていく。

「あっ、うう、んんっ……」

「すまない神通、こつちを忘れていた」

「ひやうっ！」

翼の付け根をそつと撫でられ、神通の翼が広がる。

敏感な部分を体の中と外の両方から責められ、気持ち

よさと愛しさで感情が満たされていく。

もう、我慢はできなかつた。

「はね、掴んでくださいっ！」

はしたないお願いだと分かっている。

「乱暴にっ、神通のこと乱暴にしてくださいっ！」

大好きな人に、たくさんしてもらいたい。

「神通のお願いなら仕方ないな！」

提督は神通の翼を掴み、最奥まで剛直を突き入れる。

「はぁっ、うっ」

敏感な翼の付け根を無造作に掴まれ、子宮口を貫きそ

うなほどの激しい一突きで神通は軽く達してしまう。

「もつと、くらしやい、提督、いっぱいんツ！」

「神通っ！ 神通っ！」

提督もうねるように締め付ける神通の媚肉に翻弄され、

迸りを僅かに残った理性で押しとどめて腰を振る。

お互いの肉と肉のぶつかり合う乾いた音と、絡み合う

粘液の水音が部屋の壁に反響し、お互いの興奮をさらに

煽る。

「提督、最後は……」

「わかつた」

提督は荒い呼吸のまま枕を縦に布団の上に置き、神通をその上に仰向けに寝かせた。

こうすれば翼が下敷きにならず、体重をかけても神通が痛がらなくて済むことを彼は学んでいた。

「上、いいか？」

「んっ、どうぞ」

提督に促されるまま、神通はセーラー服を脱ぐ。

「サラシも、いいよな？」

神通が頷く前に、提督の手はサラシを解いていた。

解放された神通の豊かな胸が果実のように揺れる。

「あつんう……」

その甘美な果実のとびきり美味しい部分に提督がむし

やぶりついた。

「柔らかい……神通のおっぱい……」

胸を愛撫されている間、神通はもどかしさでいっぱい

だった。早く挿れてほしいのに、提督は胸に夢中。

「あうっ……ていとく……」

「いくよ、神通」

今度は前から、提督のものがねじ込まれる。

「やあ……んう、く」

背中を支える枕のせいで、後ろから愛されていたときとは違うところを刺激され、神通はただ快感に溺れた。

「やっ……これ、深いっ」

体重がかかる分だけ奥へと侵入してきた肉茎が神通の

奥を無遠慮にノックし、甘美な刺激を響かせる。

「神通、あんまり締めると、漏れるっ」

「嫌です提督、一緒じゃないとっ」

神通は首を横に振り、提督を締めすぎないように意識をむけるが、更に快楽を感じてしまう。

「ごめんっ、なさっ……提督、私、もう……」

突かれるごとに甘い電撃で背骨を貫かれ、神通は限界に近かった。

「くださいつ、提督のっ、たくさんっ！」

神通のすらりと伸びた足が提督の腰をしつかりと掴む。

「イクぞ、神通！ うっ……」

「あつ、あつ、提督っ……あつくうううんっ！」

三度、四度、提督が神通の中で脈動し、熱い精を最奥へ注ぎ込む。

提督は一滴残らず注ぎ終わると、力なく神通の上に倒れ込んだ。

「神通……大好きだ」

「はい、提督。私も提督のことがいちばん好きです」

神通は器用に翼を動かし、両腕と翼で提督の背中を抱きしめる。

「ありがとうございます、たくさん愛していただいて」

「んっ……」

何度触れても飽きない唇が重なる。

「私、この時間が好きです」

「ん、もうそんな時間か？」

提督は身を振って時計へ目を向けようとした。

「時計ではなくて……」

神通は提督の顔を自分の方へ向かせる。

神通しか知らない、優しい目。

「提督に、愛していただいたあとに過ごすこの時間が好きなんです」

神通は提督と指を絡める。

「ひどいな、神通」

「えっ」

神通の蕩けていた表情が一瞬で凍りつく。

「俺は神通と一緒にいる時間なら、いつだって大好きなんだけど」

「……やっぱりずるいです、提督」

真っ赤になった顔を見られるのが恥ずかしくて、神通は顔を両手で覆った。

「今夜は寒い」

スコールと一緒にやってきた寒気は、火照った肌には

少し冷たい。

「包んで差し上げますね」

「うむ……んっ」

触れ合った唇を離すと、神通は白い翼でお互いの身体を包んだ。

柔らかな温もりに包まれた提督が眠りに落ちるまで、

そう時間はかからなかった。

「提督、おやすみなさい」

提督の穏やかな寝息と鼓動を確かめると、神通も幸せな眠りの世界に沈んでいった。

翌日の朝食が、提督だけ大盛りの玉子丼になっていたのはまた別の話。

「あなた、さすがにこれは……恥ずかしいのですが」

夏、太陽は容赦なく大地を焼き、むせ返るような生命の香りを温風が緩やかに運ぶ季節。蟬達は伴侶を求めて愛の言葉を大声で叫び、大空を映して流れる青く透明なせせらぎは爽やかな喜びを人々に届ける。

「何を言うか、世界で最も美しい眺めだ！」

市街地から外れた竹林の一角に、嵐山武道場は居を構えていた。古の大木から切りだした一本梁が象徴的な古風堂々の日本家屋は、遠く二山の借景を利用した見事な池泉回遊式の庭園に向けて縁側の障子を開き、昼下がりの空気の中に泰然と佇んでいる。

「こんな陽光の下で、私……もう……」

日の本一の剣豪と謳われた先代を継いだ灼王寺天嶮とその妻・灼王寺神通の他に住まう者のいない嵐山武道場は静まり返っており、神通のか細い声だけが庭先に響いた。

「さあ、ソーメンを流せい！」

リンと風鈴が鳴った。

神通の脳内は混乱の極みにあった。愛する夫は暑さで頭がやられてしまったのだろうか。自分は どうしてこんな姿をしなければならぬのだろうか。いくら人がいない、否、人が来ることの絶対がない場所であるとはいえ、これでは夫より自分の方が狂った人

のようではないか。

「ほ、本当にやるのですか……？」

最後の確認にも、着流しの夫はもちろんだと血走った目で言い切って口を開けた。腰を落とした彼の口元には真一文字に割られた節を削がれた孟宗竹。地上一メートルと僅かばかりに固定されたその傾斜を辿れば、凡そ三度の角度で昇り、足を開いて直立する神通の下へ辿り着く。

「変態です……あなたも……私も……」

神通は傍らの鍋にて氷水に浸したソーメンを震える箸で一束持ち上げると、孟宗竹のもう一方の縁に恐る恐る近づけた。固定されたホースから流れる無色の水は申し訳程度にチロチロと囁き、神通がそのままソーメンの束を孟宗竹に落としたところで夫の口に達するまでの数メートルを押し流せるだけの力はなさそうだ。やはり、やらねばならない。

「んうっ……私……」

煌びやかな陽光、穏やかな夏風、愛する人と二人だけの庭先で、神通は尿道に力を込めた。これまで一度も日に当てたことのない秘所は煌々と照らされ熱を持ち、直毛の濃い茂みは風に吹かれてざわざわと肌をくすぐる。蕾の奥の紅石は触ってもいないのに硬くなり、披裂の奥のめしべからはトロリと粘性の液体が染み出して、半分は孟宗竹に、半分は肉付きの良い太腿を垂れて羞恥の証に足元を濡らす。

「はあ、ああ……こんな、ところでえ……ッ」

大切な所に触れる孟宗竹の一端は切り口も鮮やかに、ささくれ

の一片もなく滑らかだ。夫が「では早速！」と一刀にこれを切り出し、丹念に磨き始めた時には何が起こるのかさえ分からずにいた自分の能天気な恨めしい。しかしそれでも、夫が目の細かいやすりを必死に使って磨いていたのを思えば、彼がいかに自分を傷つけぬようと細心の注意を払っていたのかが容易に理解できてしまい、胸の鼓動の一層速まってしまう神通であった。

「も、もう……ダメえ……ああ！」

指の二本を用いて肉唇を開き、ホースの水だと言いつの出来ぬほど濡れ火照った秘所を孟宗竹にそつと当てる。下着を召さぬ着物の前を肌蹴て裸体を白日の下に晒した自らの醜態を思うにつけ、困ったことに快感の津波が神通の理性を押し流していくのだ。最後の一線も、もう間もなく越えられてしまいうだろう。

「やあ、出ない、でえ……はっ、ずかしい……うんっ、や、ああ！
見ないでえ、やつ、ダメッ！ はああ……ッ！」

神通の小さな尿道口は引き攣り呼吸していたが、ついに押し寄せる濁流を留めることができず、一拍の収縮の後に盛大に拡張した。シャツと音を立て一個の尿塊があらぬ方向に吐き出されたのを皮切りに、一筋となった薄黄色の温汁が、行儀よく孟宗竹の上を滑り出した。

本日は無人、しかし普段は陽炎はじめ弟子の子どもたちを指導するこの庭で、雄大な自然に全身を晒して、大和撫子にあるまじき立ち小便の変態的痴行に及ぶ背徳感は何ほどか。神通は尿の発射と同時に抑えていた快感が噴き出し、脳内が真っ白に染まるのを受け入れた。

夏用の衣を押し上げて乳首が風に尖っている。力の抜けた箸からはソーメンが滑り落ち、止まらぬ尿の流れに乗って勢いよく愛する人の口へと向かって流れていった。

気を抜けばたちまち腰砕けになってその場にへたり込んでしまふような衝撃、それでも神通は妻としての務めを果たそうと、けなしの意識でソーメンを鷲掴み、飛び散る激流と化した披裂の滝に放り込んだ。

「んなあ！」

これに驚いたのは大口を開けて神通の尿滝の到来を待ち構えていた天嶮であった。武道家の彼は百撃の中に勝機を見つける鷹の目を持って、神通の秘所が濡れ出してから指によって拵げられたその綺麗な桃肉の裂け目から小水の漏れ出すまでをつぶさに観察していたのだが、第一波のソーメンに気を取られ、第二波に対する警戒を怠ったのである。

第一波において神通の小水は水と混ざってほとんど味も匂いもせず、ただソーメンだけが流れてきたのだが、第二波は規模が違った。鉄砲水の勢いで香り立つ尿の激流がソーメンの大群を引き連れて彼の口めがけて一気に鴨越の逆落としが如く迫ってきたのである。

「うっふ、んくっ、うう！」

顔面尿塗れになりつつソーメンだけは何とか溢さずに咀嚼していく。麺液にピッタリの塩気が彼の喉を潤し、快感と背徳感に板挟みになりながら絶頂する妻の表情は彼の心を満足させた。鼻から眼から神通の羞恥水が押し寄せて、その尿に溺れるという有り

得ない快感が天嶮の脳味噌を狂わせる。

天嶮の精神的高揚を最も促したのは、濁流の中でふと己の頬を拭った折、指先に付着した一本の縮れ毛であった。それは神通の恥丘を覆う林の一本に相違なく、あの貞淑な妻にも淫靡な蔭が存在するのだという確かな示唆をもたらすようで、たまらなく刺激的なのだった。膝立ちのせいで張った着物が勃起を阻んで何とも苦しく、無意識に彼は帯を解いて起立を白日に晒した。

そんな夫の動物的で何とも無様な姿に、神通の乙女心は益々愛しさで溢れ返った。

「ひゃあ、あ……んううっ！ はあ、まだあ……ふああっ！ ああああ！」

神通の膀胱は最後の一滴まで絞り出そうとする勢いを、緩める気配はまるでなかった。齒の浮くような快感に加え、流体に尿道の敏感な内側を刺激されるゾクゾクとした痺れに、神通の手はソーマンを絡めながら自然と硬くなった突起へ導かれた。愛する夫が自分と同じように性器を露出しつつ、ソーマンを尿と共に恍惚の表情で味わっているのだ。その献身とも言える姿に神通の興奮は最高潮となった。

「ふあ、ああ、んんっ！ わたしい……おもらししながらお外でこんなっ！」

それがとてつもなく恥ずかしいことであるとは分かっていたが、皮越しに淫乱の実を潰す指は止まらない。地面に落ちる影にもはつきり分かるほど勃起した乳首にも手を伸ばして強く抓んで外に引っ張れば背筋を冷たい稲妻が駆け巡り、さらなる排泄を促した。

「止まらない、お、おしっこお！ 私こんなっ、やらしいところ見られてえ、やあ！ イイツ、んあ！ ダメツ、気持ち良くなったら、ダメなのにい！」

ソーマンのぬるりとした独特の感触が剥き出しの果肉に擦れ、未知の快感を生み出す。迸る尿道の恥液からは濃いアンモニア臭に加えて発情した雌の匂いが漂い、明らかに神通の嗅覚を刺激した。どんなに否定してもし切れぬ、普段は先生として子どもたちを指導している野外にて発情し、尿をもらしながらソーマンを触手に見立てて絶頂の階段を昇りつめていくのだという事実。そんな自分を見てほしい。鍛え抜かれた肉体を、秘めた純情な乙女を、乱れた淫乱な表情を、世界と何の隔たりもなく通じているこの場所で、しかし愛する人にだけ見て、同じように興奮してほしい。

「はずかしいのにい、どうしてえ！ あっ、あなたあ！ 見てッ、神通の恥ずかしい、すがたあ！ あっ、イクツ、イツちゃうう、うんっ、やつ、やああああっ！」

大音声を上げながら神通は絶頂に達した。尿の最後の噴射と同時に大量の愛液が伸縮を繰り返す膣より飛び出し、粘液の流水が孟宗竹を滑り落ちて、愛する夫の口内へと注がれていった。それは特濃の媚薬に違いなく、夫婦の営みをさらに促進するはずである。

「あああ……はっ……はあ……はあ……」

肉体の余韻に震えて吐息を漏らす神通と対角線で結ばれた、精神的絶頂を体験した天嶮。しばらく水の流れる音だけが異様に目

立って聞こえていたが、やがて両者は視線を合わせ、「……ご馳走さま」「お粗末様です」と短い会話を交わしたのであった。

「それでは次は、私の番ですので」

所変わって道場に付属した和室の縁側、さんさんと降り注ぐ午後の日差しは中々に強い。

「それで神通、私はどうしたら……」

白い太腿を和服から露出させた神通は足を伸ばし、天嶮はそんな妻に膝枕されていた。先程の絶頂のせいで神通の頬は上気し、その身体からは普段以上に雌の香りが漂っている。

「ダメですよあなた、赤ちゃんはバブウしか言いません♥」

神通は本気だ。天嶮は妻の笑顔に自分以上の変態性を見つけた。彼女はこれから十歳も年上の夫を赤ちゃんとして扱おうと決めたのだ。

「……バブウ」

観念した天嶮がそう呟くと、神通は満面の笑みで前屈みになりながら自らの肩に手をかけた。するりと落ちる布、そして。

「はい、おっぱいですね♥」

「おむう!?!」

天嶮の顔面にもつちりとした神通の乳房が覆い被さった。谷間の汗が天嶮の顔面と接着し、神通の香りとは別に甘じょっぱいおっぱい浦の香りを運んでくる。天嶮の脳内に大きな太陽と白い浜辺、透き通る青海が広がった。完全に夏。だから勃起しても仕方

がなかった。

「あなた、ごはんの時間ですよ♥」

神通は左乳首がちょうど天嶮の口にくるように調節した。天嶮は妻の乳首を舌でつついてその勃起具合に驚愕した。神通の乳首は愛撫を完全に完了した時よりも硬く大きくなっていたのだ。

神通がおつまみにと買ってきた乳首に触感が似ているという葡萄グミ、天嶮の脳裏にはなぜかそれが思い浮かんだ。これは実はグミなのではないか。甘噛みするとコリコリしているし、乳輪の毛穴のぼつぼつ感とイマイチフィットしないような気がする。

「あう、こおら♥ 強く噛んだら、めっ♥ ちゃんと味わって飲んでくださいね♥」

神通に勃起したペニスを緩くピンタされてしかられる。その刺激だけで出してしまいそうになるのを天嶮はなんとか堪えた。

「んあ、そうです♥ ちゃんと吸って、ひゃあ♥ んああ、やああ♥」

天嶮は神通の乳首を舌の上で転がしたりつついたりしてみた。

夕焼け色の乳首はクリームのような甘さをベースに酸味が効いた味がして、それがなんだかチーズケーキのようだと天嶮は思った。とにかく妻はスイーツみたい甘い。

「あなたっ、もう♥ 意地悪なんですから♥ そんなに転がさないで吸ってください♥」

それほど言うならばと、今度はしっかり吸ってみる。天嶮の大口と神通の乳輪はほとんど同じ大きさで、ずりゆりゆりと音を立てておっぱいごと吸うと、神通の乳輪はさらに盛り上がってき

た。

「ああ私ッ♥ 赤ちゃんに吸われて乳輪ごと勃起しちゃってるう

♥ はしたないっ♥ はしたない妻でごめんなさいあなたあ♥」

神通の恍惚とした表情はもっと責めると言っていた。天嶮は神通の右乳房に手を添えてゆっくり揉みながら、左の乳首を堪能する。低反発枕のように、一番奥には到達し得ないが、程よくこちらを受け入れて埋もれさせてくれるおっぱいのぽよぽよとした弾力は優しく、舌先に伝う乳輪の細かな凹凸の卑猥と好対照をなした。丁寧な物腰と包み込む穏やかさ、そして夫にだけ見せる、羞恥心よりも好奇心を優先する扇情的な女としての表情、そんな二面性を物理的な意味でも使い分ける神通のおっぱいは、まさに神通のおっぱいなのだ。

「ああ、ダメです私ッ♥ これじゃあ、はあ♥ ねっちゅうしよ うっ♥ なってしまいますう♥」

夏の暑さが庭の方から風に乗ってやってくる。小さな扇風機一つではとても耐えられない。神通は夫に授乳しながら用意していた麦茶を飲む。コクリと動く喉、まだ口の中に残るいい塩梅に融けてきた氷。

「あなたもどうぞ♥」

神通は己の乳房に氷を吐いて落とした。滑らかな曲面を氷はつるんと転がり、乳首を啜える天嶮の口に到達する。

「ひゃあ♥ 冷たくてえ、こおり♥ いい、ですっ♥ もっと、もっと吸ってえ♥」

天嶮は口の中で妻の乳首を氷と一緒に転がしてやった。勃起し

た乳首は敏感で、口内の熱と氷の冷氣によって痺れるような快楽を生む。

「やああっ♥ んはああ、あああ♥ 私っ、おっぱいでっ♥ ん あ、はああっ、あつい♥ あついですう♥」

神通は帯に手をかけて完全に服を脱いでしまうと、麦茶のボトルを持って、わざとこぼしながら飲んだ。煌めく液体がボトルの口の形に変形した唇の隙間から、細い首を通って鎖骨に溜まり、さらに重力に従ってやや垂れた胸の縁を丸く、天嶮の口元へ汗の塩も一緒にかけ流す。

「たあくさん飲んでくださいね♥ んっ、そうそう、じょうずじょうず♥」

神通は右手を天嶮の股間へと伸ばす。そこには日時計の針となつた肉棒が聳え、だいぶ傾いた日差しを受けて鋭利に反っていた。

「こちらもっ♥ んっ、熱くてびくびくしていますね♥」

神通は汗ばんだ手で天嶮の肉棒をしごく。手を伸ばす必要性からそれほど気持ちいいわけではないが、妻の献身的な態度は天嶮に巨大な興奮を与えた。彼はお返しに愛を込めて、神通のおっぱいを吸うというより、唇でしごいてやるような動きで刺激してやった。

「あ、あなたあ♥ そんな動き、はっ、反則ですう♥ うやああ、すごいこれえ♥」

神通は天嶮の後頭部を左手で抱いておっぱいへ押し付ける。そこにいるのは授乳をする一人の母の姿ではなく、まぎれもない快楽を求める一匹の雌の姿だった。天嶮は神通の乳房の根元から先

つぽへと乳腺を刺激するように揉みながら唇で乳輪全体を吸い、引き伸ばされた乳首、その乳頭を舌先でつついた。

「あつ、ふああ♥ あなたの口でしごかれてる♥ じんつうのおっぱい♥ こんなのお、こんなの出ちゃいますう♥」

出もしない母乳を夢見ながら、神通は細かく絶頂しているようだった。妻の身体は震え乳首は尖る。母性の象徴で快感を得る、人体とは何と反道徳的に設計されているのだろう。

「はうう♥ はあ、あなたあ♥ おっぱいもつとお♥ いい、あああつ♥ んうう、ううう♥」

天嶮は後頭部に神通の股間から迸る汐が噴きかかるのが分かった。妻のフェロモンが天嶮を包み、雄としての本能を刺激する。もしかしたら神通は授乳を通して絶頂しつつ、排卵したのかもしれない。

「うああ♥ あ、わたしイッてますう♥ おつ、おっぱいでえ♥ おっぱい吸われてイッちゃってるううう♥」

神通の胸に埋もれながら、天嶮は妻の予想外の仕打ちに身体を震わせて耐えていた。皮の厚くなった妻の愛しい手に半端な握力で握られたままの天嶮の肉棒は、寸止めを繰り返されていたのだ。彼は性欲を抑える術を心得ていたが、彼の精子は卵子を探すために早く発射されようとそわそわしていた。

「あなた……ああ……っ……♥」

力尽きた神通は天嶮の横に裸のまま崩れ落ち、夫の胸板に頭を乗せて目を閉じた。天嶮の寸止め精子は火照りを奥にぐつぐつと燃やしつつ、待機を余儀なくされたのだ。

天嶮は神通の頭を撫でながら深い瞑想に入る。性欲の火を消すことはしない。ただその種火を身体の奥深くに封じるだけだ。炎が最も光を放つのは、夜の闇の中であることに間違いのないのだから。

「もうこんな時間……」

いつの間に日が暮れていたのだろう。雄大な山稜の向こうに太陽が沈むのを見て、夫婦はひとまず生活の中に戻った。つまり、夕餉の準備や風呂焚き、夜の稽古といった習慣をこなすのである。

天嶮も神通も細かいことを考えるのは苦手で、こうして無心で行えることを基本的に好ましいと思っている。邪心の混じらぬ鍛錬は効率的であるし、汗を流す風呂、腹を満たす食事、何もかもが幸せに回る。だが例外もあって、昼間に行った数々のプレイが示すように、二人は快樂に対しては積極的に考えを巡らせていた。どうすれば相手を気持ちよくできるか。

この日は、しかし二人ともアイデア勝負ではなく、もっと原始的な関係、すなわち夫婦としての愛に溢れた性交を望んでいた。太陽の下で欲望にまみれた数々のプレイを行った夜には、こっそりと布団の中で、ただただ愛にまみれた濃厚なセックスをしたくなるも当然であろう。

はやる気持ちを抑え、時が来るのを二人は待った。顔を突き合わせての食事や風呂、肌を着ることさえ苦痛となるほどに溢れ出す性欲、しかし、修行好きの二人は一流のマゾヒストであり、辛

抱が解放の悦びに繋がることをよく承知していた。

「あなた……」

蚊帳を張った寝室には障子戸の隙間から月光が密やかに射し入っていた。髪を下ろした神通が蚊帳に入ってきて来て、青白い光に照らされながら帯を解く。

それが二人の合図だった。

獣のように求め合う二人は火照る唇を重ねた。舌と舌の競り合いはどちらが自分の唾液をより多く相手の口内へ送り込めるかのささやかな夫婦喧嘩だ。

もはや布の煩わしさはなく、肌と肌を合わせた夫婦は当然の如く繋がった。天嶮は己の上に跨った妻の細さに硬さを増し、神通は膣内に収めた夫の熱量にさらに愛液を滴らせた。夫婦の挿入は興奮の炉に火を入れることに等しく、唇を貪り合いながら、二人の野生が激しく肉を打ちつけ合う。

「あなたっ♥ あんっ、あ、やつ、んああ♥ はあ、ああっ♥ やんっ、んうう♥」

日ごろの鍛錬が神通の膣に締めりと柔軟性を与え、天嶮の巨大な肉棒を全方位から攻め立てた。揺れる神通の胸は昼間に吸った愛しき母性、その乳首が行燈の灯りに照らされて尖った翳を襖に落とした。

数々の変態的なプレイもすべては夫婦の愛を確かめる行為に他ならない。彼らにとってセックスとは性欲を満たすためのものであるのと同じに愛情表現なのだ。そこに生殖という意図は含まれず、しかし忌避することもしないため、生で中出しが常だった。

「はう♥ やつ、やあうう♥ んい、イツ♥ くううっ、うう♥ まだっ、イツ♥ んうう♥ もろお、もつろお♥」

騎乗位、後背位、正常位……手を変え品を変え二人は快楽を求めた。お互いの身体のこととは隅々まで把握している二人が、今は心ですら同調させているのだから、得られる快感は二倍にも三倍にもなった。神通は乳首と膣の奥が弱く、天嶮は龟头への吸いつきに弱かった。故に両者はお互いの弱点を攻め、高め合ったわけである。

「またイツ、イツてえ♥ はあああうう♥ んおっ♥ いおおお♥ いいう、おおあああっ♥」

そんな状態なので神通も天嶮も脊髄を伝わる絶頂のスパークをどうすることもできなかった。二人に絶縁はありえないのであるからして、神通の痙攣する膣電流に促された天嶮の尿道はその管を電氣的に全開にした。

「ひうう♥ んっ、きたあ♥ ああっい♥ んっ、せいえきい♥ あっ、あうううう♥」

ドボンという、水に沈む鉄球の如き音を発しながら天嶮の溜まりに溜まった精液が神通の火照った狭き膣に解き放たれた。精子のそれぞれが神通の卵子を犯して受精しようという強烈な意志を持って、その最奥を目指して怒涛の駆け上がりを見せた。神通の子宮もやはり今日一日の様々なプレイによってかなり降りてきており、その入り口は容易に天嶮の精液を呑み込んだ。

「もつとお……あなたあ、もつとお♥」

夫婦は汗ばむ肌を滑らせて突起物を刺激しあった。天嶮の筋肉

質な身体を神通の柔らかな肉体が包んでいく。もちろん、射精も一度で終わるわけではない。

精液を、愛液を泡立たせる怒涛の突き、あるいは怒涛の腰振りが再開される。ピストン運動をどちらが主導で行っているのかも分からないほど二人は蕩けて一つとなった。

「はっ♥ あああ、きますう♥ きちやいますう♥」

もう何度達しただろうか。最後の大きな絶頂が向かってきていることをいよいよ悟った神通が天嶮の腰を両足でしっかりと固定する。一番奥に刺さった巨棒は内臓を押し上げ、子宮と完全に密着した。

「イクッ、イクイクウウウ♥ んいい♥ んひゃあああああ

♥ あっ、うあああああ♥」

神通の絶頂とほとんど同時に天嶮も達した。溢れる精液は子宮をめぐって一直線に流れていく。あらゆる感覚がなくなり、ただ快感だけが両者を包み込んだ。

神通の柔らかさ、天嶮の硬さ、互いにないものを愛しく思いつつ、夫婦は営みの終点にある多幸福感を堪能する。抱いている、もしくは抱かれている相手を自分自身よりも大切に想い、それが相手からも伝わってくるこの幸せ。

比翼連理の太陽と月、変わることはない愛情の法則が二人を支配しているのだった。

「なあ、神通……」

ようやく波の退き始めた頃合いに天嶮は傍らの妻の名前を呼ん

だ。

それは独り言ともとれるほど小さな声だった。もう寝なければならぬ。明日はまたこの道場に陽炎たちがやってくるのだ。子どももない二人は彼女らを本当の娘のように思っていた。

「なんですか、あなた」

眠りの淵へと落ちていく天嶮は穏やかな波の海に浮いていた。音も、風も、呼吸も、わずらわしいものは何もない。ただ妻が隣にいるという安心感だけが天嶮の心を満たしていた。

「あいしてる……」

「……私も、あいしています」

静かな夜。夫婦の寝息は連なり、やがて一つの愛の旋律となつて、優しき闇に融けていくのだった。

ドスケベボディ黒タイツ包み

silk

前回までのあらすじ

えつちなことはしない約束で
神通ちゃんが黒タイツと
白ビキニを着て
I Vを撮ることになったよ

恥ずかしい…

かみ〜

おっぴん

ドキ

ビキ

ウチ

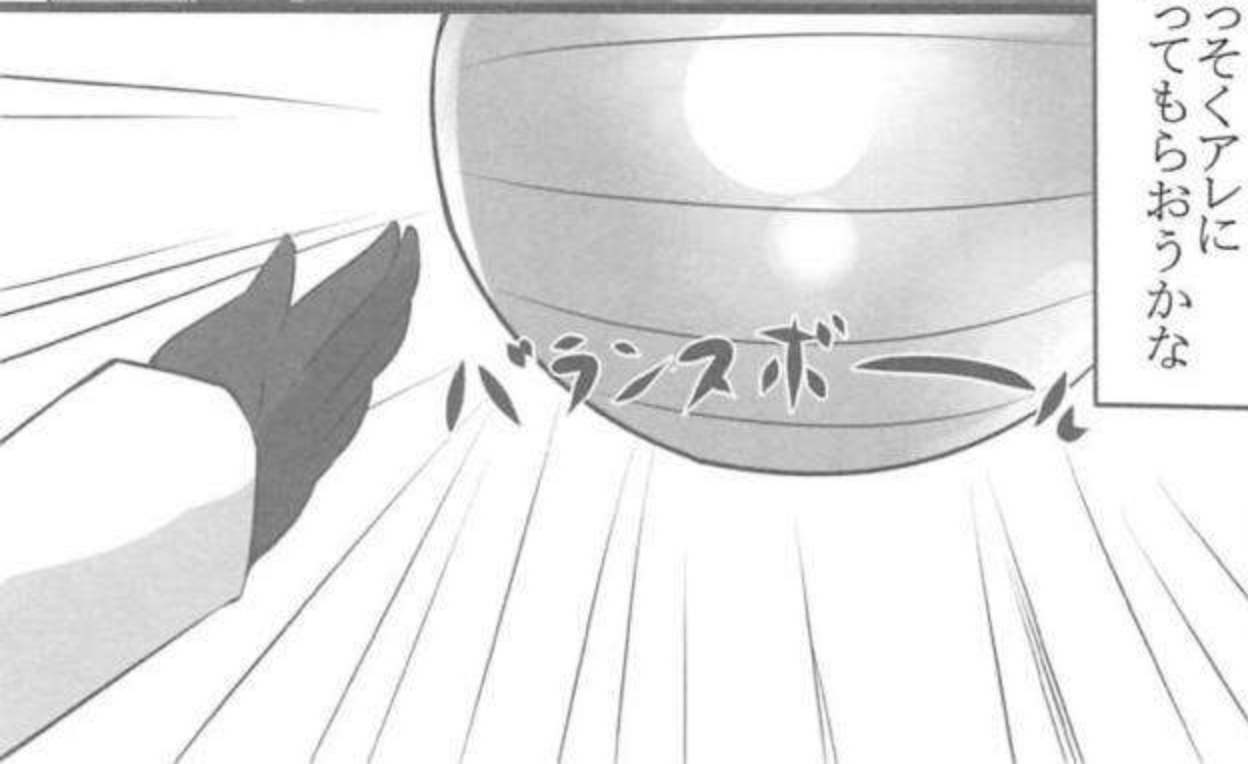
ムキッ

さっそくアレに
乗ってもらおうかな

ムキッ

ウチ

バランスボール





こんな感じでしょうか…



ポヨン



キャッ

ズルッ

いいよー神通ちゃん
可愛いよ!

えっと、
ありがとうございます…?



(水着がずれてるのは黙っておこう)

数十分後…

神通ちゃんお疲れ！
じゃあタイツ切るね

えっ!?

あの、
やっぱりタイツの下に
ストッキング履くのは
変態っぽいというか…

か

っわ

ムム
ドキ

ドキ

おおく…
すっごい蒸れ蒸れ

大丈夫！
すっごいエロ可愛いよ！

む

わ

頑張ったご褒美に
クリちゃんをなでなでしてあげよう



Fine

…もう

えっちなこと
しないって
言ったのに…

保健室

ヒサギ



作: HISAGI

保健の
神通先生
神









坂上

執務室の大きな窓から差し込む陽光はとても穏やかで、春の長閑さを象徴するかの外では小鳥たちが盛んに可愛らしい鳴き声を上げていた。

その空気とは裏腹に、提督は普段の優しい（ときには情けないとも揶揄されがちな）顔はどこへやら、厳しい面持ちで椅子にかけ、執務机の向こうで那珂の輸送任務完了報告を聞いていた。

「報告はこれで全部だよ！那珂ちゃんえらい！」

那珂がキラキラと輝くような笑顔を浮かべる。机に両肘をつけてそれを聞いていた提督は一瞬目を伏せ、ちらりと机の下を窺った。大きな執務机は、大人が一人は余裕で入れるほどの空間を有している。その中で黒い影がもぞりと動いた。

「どうしたの提督？」

いつもより少し様子がおかしいように見えたのか、那珂が声をかける。提督ははっとして顔を上げた。彼女の顔は怪しんでいるというより、純粹に不思議に思っているだけのようだ。

「いや、その、少し疲れてるだけだ」

「そっかー！元気がないなら那珂ちゃんライブで励ましてちょうよ！」

どこからともなくマイクを取り出す那珂。提督は小さく笑うと、彼女の提案をやんわりと断った。

「ちよっと集中して作りたい書類があるから、それが終わったらな。つ、二時間ほど、よほどの緊急時以外は、執務室に誰も入るなと皆に伝えてくれ。」

「はい！お仕事頑張つてね！そうだ、神通ちゃん見なかった？お洋服買いに行きたいんだ！」

「あー、神通は、ちよっと特別任務に一人で当たつてもらつてる。だから、うん、それが終わったら、あとで伝えとくよ」

「そっかー残念。じゃあ提督お疲れ様！」

「ああ」

笑顔でひらひら手を振る那珂に、提督は軽く手を挙げて見送る。重厚な執務室のドアがぱたりと閉じた。

提督は脱力したように椅子の背もたれに背を預けた。

「……神通」

「ふあい」

秘書艦の名を呼ぶとくぐもった声が応えた。もぞもぞと机の下から影が這い出す。その正体は、提督の秘書艦、かつ恋人でもある神通だった。

先程から神通は机の下に隠れ、提督の陰茎にむしゃぶりついていたのだ。その証拠に、可憐な唇には先走りながらとらと光り、提督を見上げる顔はすっかり紅潮している。その様相に提督は思わず唾を飲んだ。だが、次の瞬間小さく首を横に振った。

「やっぱりこういうのは」

「どきどきしましたね……」

「そういうんじゃないわよ！那珂ちゃんにバレたらどうす

るかと！」

「提督のごまかし方上手でしたよ？それに、提督も随分興奮されたみたいで……」

神通は身を起こし提督の体に縋った。二人分の体重を受けて椅子がぎしりと軋んだ音を立てる。そのまま彼女は愛おしい手つきで提督の砲身に触れた。言葉通り、それは大きくそそり立ち興奮の色を顔にしていた。

「そりや、まあ、その」

つい言葉を濁してしまったが、体の方は実に正直だった。神通とはケツコンも果たした仲であることは公然の事実であるとはいえ、執務中の情交がバレたら一大事である。その綱渡りのようなスリルを、全く楽しめなかったといえは嘘になるのだ。提督は額を手で押さえた。

「続き、しませんか？」

唇が吐息とともに誘惑の言葉を紡ぐ。少し困ったように眉が下がっているのを見ると、とてもこの誘いを断ることはできない。まさかこんなことになるとは思ってもなかったのだ。神通がこんなに思い詰めていたとは、考えもしなかった。

「提督は、私のことを、どう思ってますか？」

前夜のことだった。就寝時刻を迎え、神通とともに布団に入っていると、腕の中で彼女がほつりと呟いた。肩を締め、おずおずと尋ねてきた唐突な質問に、提督はしばし思索した。

頼れる部下、有能な秘書艦、安らげる場所、そして恋

人。様々な単語が提督の脳裏を飛び交っていく。だが、そのどれもが真実であり、どれもが神通の問いに対する答えになっていないような気がして、提督は結局一言だけ、

「好きだよ」

と答えた。

神通の眉根がきゅつと寄せられる。これはまずい答え方だったかもしれない。

「あの、その、飽きてないですよね……」

「何で？全然そんなことないよ！」

パジャマの胸元を掴んでくるその姿は、捨てられた子犬のようにも見え、提督は心臓を直に掴まれたような気分になり、大慌てで否定した。

「最近あまりセックスもしてないですし、マンネリかなと思って……」

恥じらいと寂しさが混じった声とともに、神通が顔を俯けた。提督は狼狽えた。伏せられたまつ毛が綺麗だと一瞬思考が逸れたが、すぐに打ち消した。

「それは、その……」

元々己は淡白な性質で、そこまで精力絶倫という訳でもなければ、恋人との繋がりに肉体を重視する方でもない。最近では深海棲艦との戦闘も激しくなり、艦隊指揮に衷心していた。神通自身も最高練度を誇る軽巡洋艦として、最前線で動くことが多かった。その諸々の要素が重なって、最近では同衾しても抱き締めて眠るだけ、たまにキスするだけというだけの日々が続いていた。

「それで、私考えたんです」

「はい」

提督は神通の言葉を静かに待った。恥ずかしがり屋の彼女がここまで心中を打ち明けてくれたのだ。粛々と聞くしかあるまい。

「あの、一度でいいので、執務室でしてみたいと思って……」

「はい？」

「ですから、執務室でセックスしてみたいです……！」

思わぬ発言を提督にぶつけ、神通が両手で顔を覆った。どんな表情をしているのかはわからないが、耳まで真っ赤になっていることから、一世一代の告白だったことは間違いなし。

「他の鎮守府の娘から聞いたんです。執務室ですると異様に燃えるって。雑誌にも同じような体験談が書いてありましたし」

「いや、でもさすがにそんな」

「……いやですか？」

潤んだ瞳でそんなことを言われれば、選択の余地は他にない。自身も奥手な性格とは自覚しているが、それ以上には彼女の期待に応えたい気持ちの方が強かった。

提督は躊躇い一つも首肯した。神通の小さな微笑みが、若干小悪魔めいたものに見えたのは、気のせいだろうか。

「ふふっ、じゃあ、覚悟してくださいね」

「え？覚悟？」

「何でもありません。おやすみなさい！」

言葉の真意を掴みきれず呆気に取られている間に、神通はくるりと背を向け、布団をかぶった。提督が声を掛けあぐねているそのうちに、すうすうと小さな寝息が聞こえてきた。

覚悟とは一体どういうことだろうか。考えのまとまらないまま、提督はまんじりともせぬ一夜を過ごした。

そして、この有様である。

いつものように各艦隊に出撃と遠征の命を下した（その中には神通率いる水雷戦隊も含まれていたはずなのだ）が、あと、小用で少しばかり執務室を離れた隙に、執務機の中へ侵入されたようだ。提督が驚きの声を上げる間もなく、鮮やかな手つきでスラックスのファスナーを下ろすと、提督の主砲を取出し啞え込み、あとは彼女のなすがままだった。

その途中タイミング悪く那珂が来てしまったが、意に介さず事を進められ、それでも射精しなかった自分の胆力を奮めてやりたいくらいだった。

「続き、しませんか？」

問いかけられた言葉に返す間もなく、神通が口づけてきた。いつもの彼女とは思えないほどに積極的に舌を絡ませ、それに応じるように口づけていると、提督の頭も次第に思考能力を失っていく。

あとは野となれ山となれだ。こんなに愛おしい恋人が求めてくるのであれば、それを叶えてやるのが男というものだろう。

「んっ、ふうっ」

唇を離すと、唾液が糸を引いた。蕩けたような表情を浮かべている神通を見つめていると、キスだけで昂ぶった熱がますます下半身へと集中していくのが分かった。

「きゃっ」

両脇に手を入れ神通を抱え上げると、彼女を机の上に乗せ、自分はそのまま椅子に座り込み、最早触れただけで暴発してしまいそうな雄を指さした。

「いい加減こつちが限界だから、神通の足で出したいな」

「足、ですか……？」

「手コキするときみたいに、足の裏で撫でてくれればいいから。あ、靴は脱いで」

「……はい」

訝しげな表情を浮かべたまま、神通は机の上に座ったまま靴を脱ぎ、そしておすおすとおすおすに包まれたすらりとした脚を提督の元へ伸ばした。均整のとれたアーチを描く土踏まずが、提督の男根をなぞり上げる。硬い布の感触がかえってぞわぞわと気持ちよさを増幅させた。

「ん、いいぞ、神通」

次第にカウパーが潤滑油代わりとなったのと、神通も飲み込みが早いのかすぐに要領を得たのもあって、両腕で体を支えるようにしながら、土踏まずで挟むように、ぬちぬちと水音を立てながら扱き上げてきた。神通自身も心なしか息が荒い。太ももの隙間からパンツがちらりと覗く。白いパンツのクロッチ部分が濡れている。明らか

かに興奮していた。

その光景に煽られるように射精感が募っていく。

「うっ、もう出るっ」

「ひゃっ」

しばらく抜いていなかったせいか、精液はとてつもない勢いで迸り、座っていた神通の顔にまでかかっていた。

「ごめん」

呆然とする神通の体を引き寄せ、太ももに乗せると、頬や額当てに飛び散った粘液を指で拭い取る。その手を神通が掴んだ。かと思つと、精液まみれの指を神通は口に含んだ。ちろちろと赤い舌が皮膚を這い、熱い吐息が駆け上ってくる。

「提督の味がします……」

ぺろりと唇の端を舐め、恍惚とした表情を浮かべる神通。胸元で結ばれたタイを外し、胸を開くとその下に潜むすべすべとした陶磁のような柔肌に触れた。そのまま手を伸ばし、壊れ物を扱うようにやんわりと乳房を揉んだ。

「んうっ、あ、んっ……」

豊かな胸を覆うサラシごしでもわかるくらいにぶっくりと膨れた乳首を摘まむと、可愛らしい喘ぎ声が唇から零れた。自然と提督の興奮も増してくる。

「提督、こつちも……」

提督の手がパンツの中へと誘われる。薄い毛並みの奥はしとどに濡れており、じつとりと熱を孕んでいた。

ぐちゆりと音を立てて指を割り入れると、神通の体がふるりと震えた。かき乱すような指使いで膣内を責めると、とろりとした蜜が溢れて止まらなかつた。

「あつ、はう、ああんっ……提督、もう……！焦らさないでえっ」

両腕で首に縋りつき、神通は哀願の声を上げた。提督の主砲も、目の前の神通の痴態に張りつめんばかりだった。

神通は襲いかかる快楽への期待を目に宿しながら、己の中へと提督の砲身を沈めた。

「あああああああつ！」

神通の体が陸に打ち上げられた魚のようにびくびくと撥ねた。ぎゅうと引き絞るように肉壁がまとわりつくが、寸でのとこで提督は射精を耐えた。

そのまま突き上げるように神通を揺すぶると、その度に神通は嬌声を上げた。

「あんっ、あうっ、やつ、ふか、てーとく、もっ……！もっ……！」

普段の慎ましやかな姿は消え去り、先刻までは提督を翻弄した蠱惑的な仮面も剥がれ、神通はあられもなく提督の与える快感に身を委ねていた。

目の前にある薄桃色した乳輪を舌で転がすようになぞり、赤子のように乳首をちゅうちゅうと吸い上げると、それに連動するように膣壁が蠢いた。むくりと提督の肉が大きさを増し、神通の声色がさらに艶めいた。

その声を受けて、提督の胸にちよつとした悪戯心が湧

いた。

「神通、ここどこかわかってる？」

「しつむしつ、ですつ……！」

「何するところ？」

「てーとくが、ひゃんつ、おしごと、する、ところお、あうんつ」

「俺たちは、今何してる？」

「せつくす、ですつ！」

「だれか来ちやうかもよ」

「やつ、だめえつ、んつ……！」

提督の質問に舌足らずながら律儀に返事をする神通だったが、この状況に興奮していることは目に見えて明らかだった。答えることに臆壁はきゆうきゆうと提督を締め上げ、神通は身悶えた。

「てーとく、もう、あああ、イっちゃいます！じんつう、イきます！」

「俺も、出すぞつ」

込み上げる欲望のままに、どくどくと神通の中へと精液を注ぎ込む。神通も痙攣と見まごうほどに体を震わせながら絶頂した。

「えー、それで神通さん、満足いただけただしょうか？」

いつ誰が訪ねてきてきてもいいように身を整えると、提督はさつきまで神通と睦み合った椅子にかけ、神通を膝に乗せたままその顔を覗き込んで尋ねた。

「はい……」

恥ずかしげに両手で顔を覆いながら、しかし幸せを隠しきれない調子で神通は返事した。どうやら本人が予想していた以上に燃え上がってしまったらしい。

「あんな神通初めて見たよ……」

「あの、やっぱり恥ずかしいですね……」

心なしか触れる肌がさらに火照っているような気がした。

「でも、神通がそこまで俺のことを求めてくれるなんて、とても嬉しい」

「私も、思い切って言うてみてよかったです」

まだ頬をうつすらと赤らめたまま、ふふと笑みを零す神通は、窓から射す日の光を受けてますます輝いているようにも見えた。

「……提督、愛してます」

腕の中に包まれたまま、神通が顔を上げて真剣な眼差しを向けた。

「俺も、君の全部を愛してる」

部下としても、秘書艦としても、そして大切な恋人としても、提督はその愛らしい額に小さくキスを落とすと、背後からしっかりと神通の体を抱き締めた。

「でも、今日みたいなのは、さすがに頻繁にするのは避けたいかもな……」

ぼつりと愚痴ると、神通がくすくす笑った。

「そうですね……。次は玩具とか使ってみます？」

「はい？」

「冗談です」

そう言うて浮かべる笑みは、やはりどこか悪戯っぽい。まだまだ自分の知らない一面を持つこの神通に、飽きることなど到底ないだろうと提督は思った。

了



んう...?
どうしたの神通さん?

あのっ...提督
すごい、よろしいですか?

ご相談があつてですねっ
えっと...そのっ

えっちに
満足できなくて

神通さんだっって
ほしがらさんっし

どう…ですか？提督。

すっ…

それとも私は…
他の子のような魅力は…
ない…っですか？

こほっ！

冗談だろ？

じっ、冗談で…！
こんな恥ずかしい
恰好しません！

いっ
いっ

ほのっ

666

666

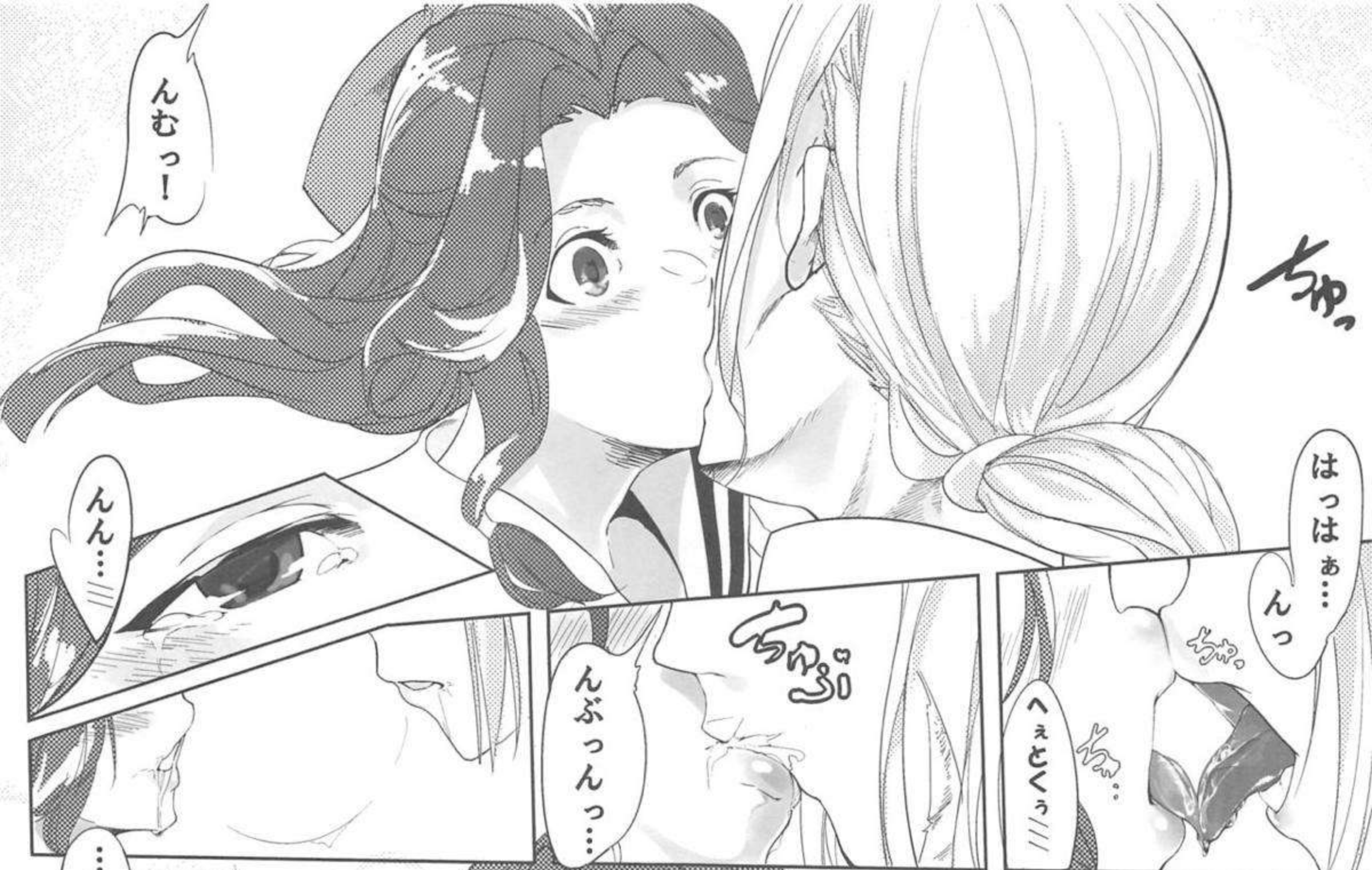
???

ああっ！もう！
我慢ならんッ！

ガッ

ひい。





んむっ！

んっ

はっはあ...

んっ

んん...

んぶっんっ...

んっ

んっ

んっ

...神通さん？

んっ

んっ



まったくこんな格好で来て...

誰かに見られたら

どうするつもりだったんだ？

んっ

乳首い...だめですっ

んあっ



んっ

んっ



こんないきなりなんて
嫌だったよ



あー！
わりい神通さん
つい我を忘れて



そんなことないです

提督があんなに激しく
求めてくださって

私、嬉しくて

火照ってきてしまいました…

鎮めてください…

提督っ…

おはあ

ルル…

ギッ…





ねえ〜提督う〜
那珂ちゃん提督と
もつと遊びたいなあ♡

提督、今日は私と
夜戦するって
約束

ドイト



姉さんは駆逐艦
の子達と演習
ですっ！

那珂、
資材確保の
遠征任務は
終わったん
ですか？



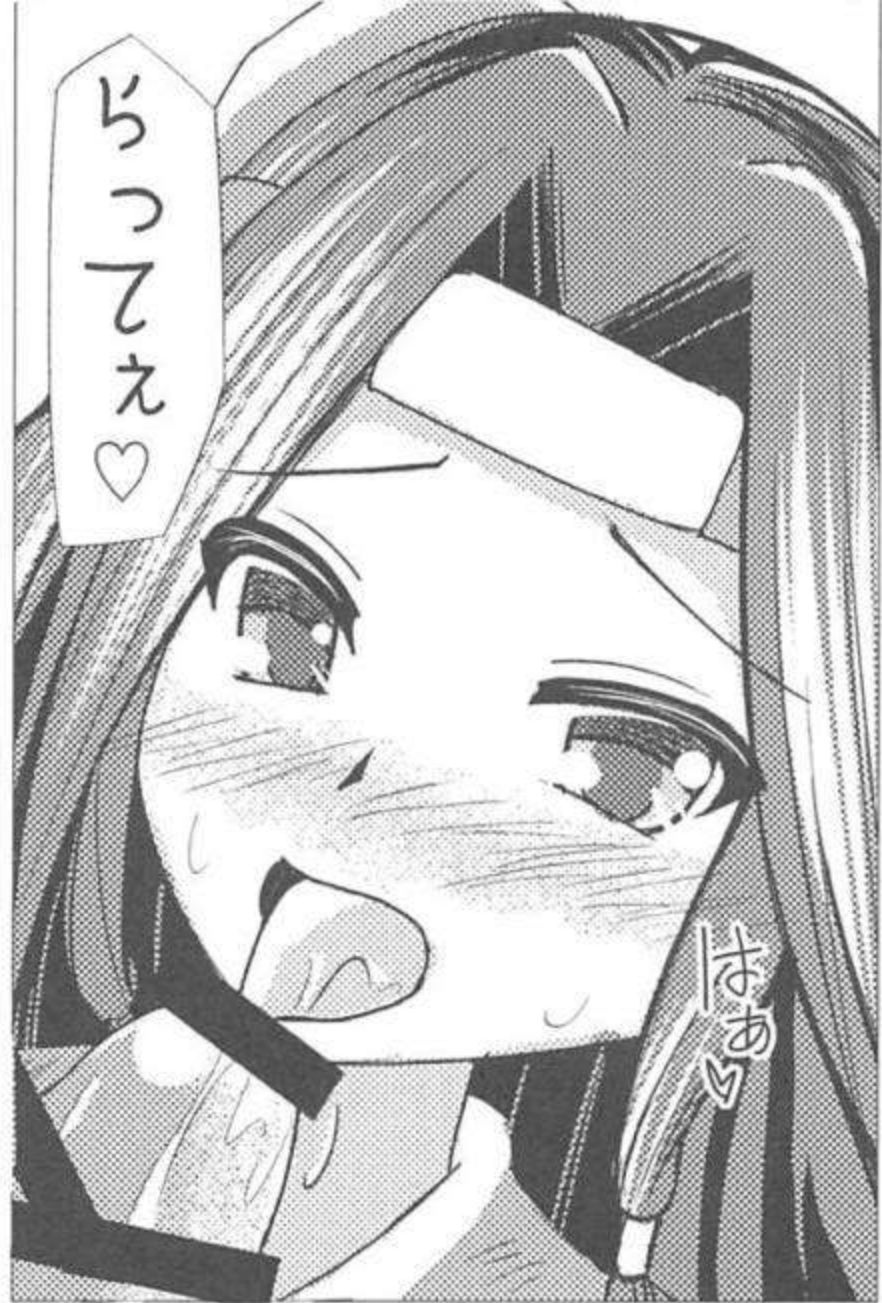
行って
きます！

軍規の緩みは
お股から
-s.t. fake-



提督ももつと
しっかりして
ください！

最近軍規が
緩みっぱなし
です！



らってえ♡

はあ♡



なーんて

ち○ぽしやぶりながら
言っても説得力が
無いぞ神通

ちゅる
ちゅる

トロォ

きゅん
きゅんっ



いつも提督が姉さん
とか那珂ちゃんとか
ぱっかり相手に
するからあ…

わっ…
私も…っ

那珂
ちゃん

姉さん…
はー

あーダメっ
んちゅっ

俺もイッ
アイトルまん
まませやろ

はーっ
私にも
なーっ

おうっ内
たっちゅる
受け取んえ

ああっしゅる
もっとおっ!!



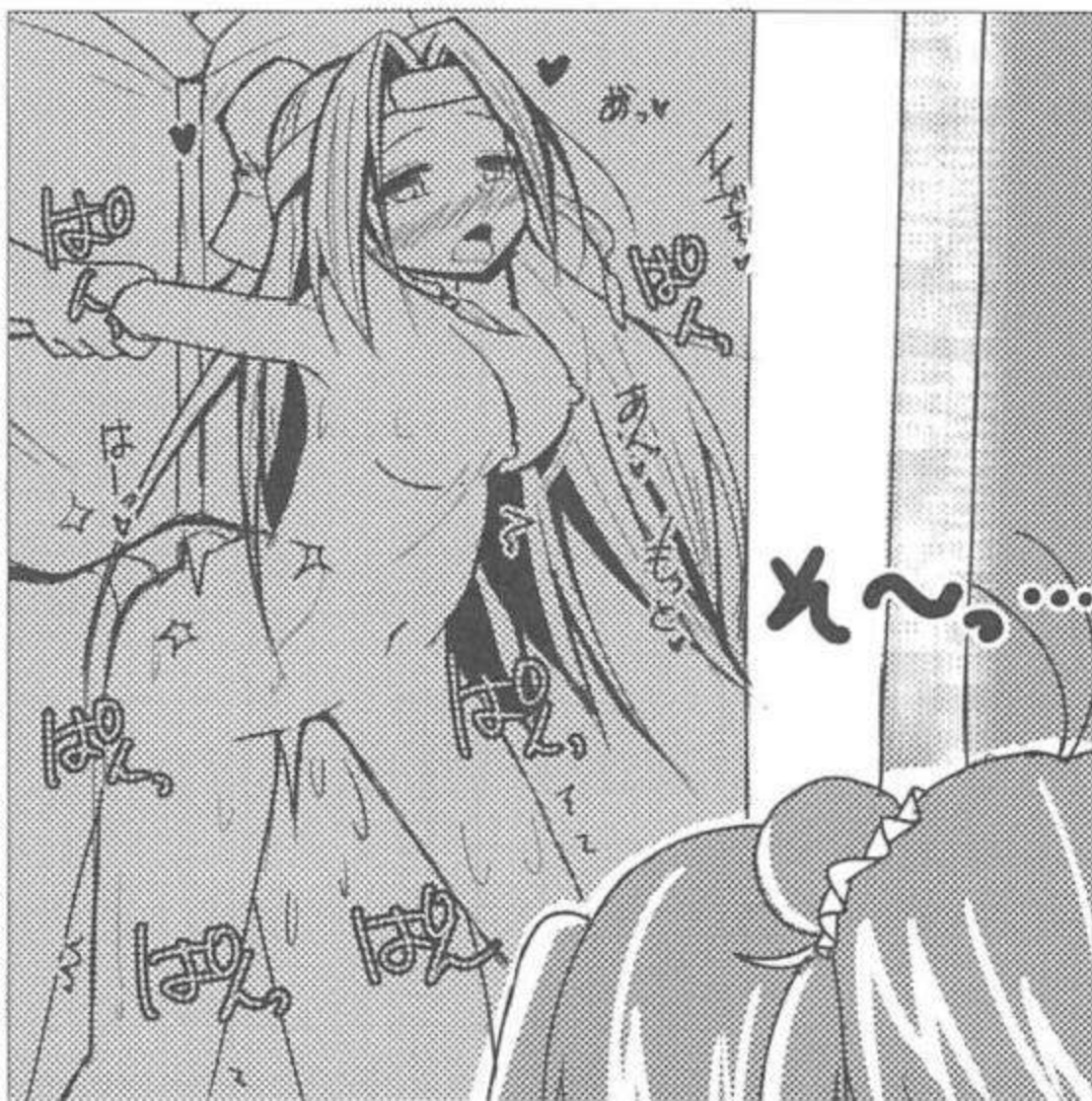
もっともっと
提督に愛して
もらいたいのおっ

ぱあ♡

ム
ム

提督の愛を…♡
この神通に
注いでくだしやいっ♡





締まり続けるのは、川内型姉妹のアソコだけ♡

by 仮死パン

教えて! 神通お姉ちゃん

あら……?
提督、この子って……

そうだ神通、
良かったら案内して
やってくれないか?

ええ……私で
よければ……

ああ、息子の
○○だ

ぽけ〜
どうしても
鎮守府の中を
見学したいって言うて
きかなくてな……

○○君……
わからない事が
あつたら何でも
聞いてね……?

ふふ……なんだか
可愛い……

じゃあ
聞いてもいい?



せつくすつて
気持ちいいの？



いつ、いえつ、
そんな事は…

皆すごく気持ち
良さそうな顔
してるから…
お姉ちゃん美人だし
そういうの
詳しいかなーって…



ななな…
どこでそんな
言葉を…

あの提督は…

父ちゃんが
いつもこの人達と
してるのヨッソリ
見てたから



目元とか提督
そつくりで…

あ…でもこの子…



それなら…
直接教えて
あげましようか…♡

ちよつと…
可愛いかも…♡



お姉さんも詳しいわけじゃないけど…
よいしょ…



お、思ってたより大きい…

これが〇〇才の男の子の…
お〇んちん…♡

んっ、はむっ…♡
声…我慢しないでいいんですよ…♡

お〇んちん…
気持ちいいんですよ…♡



あっ、うっ…
お、お姉ちゃ…



あ、すごい…
ピクピクしてる…

気持ちいいの？
〇〇君…♡

う、うん…

フキョ…



あ…♥すごい…♥
もつと大きくなりましたね…♥



んあああっ！

むきむき
しましようにねえ…♥



あっ…うっ…

お〇んちんカバーもお…
ゆっくりほぐしへえ…



こういうのは…
どうでしょうか…♥

それじゃあ…
大人ち〇ぽになつたお祝いに…



ふふ…私の胸で
こんなになつてもらえる
なんて…嬉しいです…♥



あつ…すごつ…
おっぱいフワフワで
気持ち…いい…

あつ、お姉ちゃ、
くるつ、なんか
きちゃうつ！

んっ、いいですよっ
私の胸でっっばい
出して下さるっ…

♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡

あぁ…すごい量…
初搾りぷるぷる
せーえき…♡
○○君…
精通おめでとう
ございます…♡

じろるん

はあ…はあ…
お姉ちゃん…
僕まだ…

あつ…じゃあ…

次は…
こつちの方で…

ホントに大人に
なっちゃい
ましようか…♡

♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

ビッキン



おまんこ♡♡♡
おまんこ♡♡♡



そう…ゆっくり…
挿入れてえ…

……?

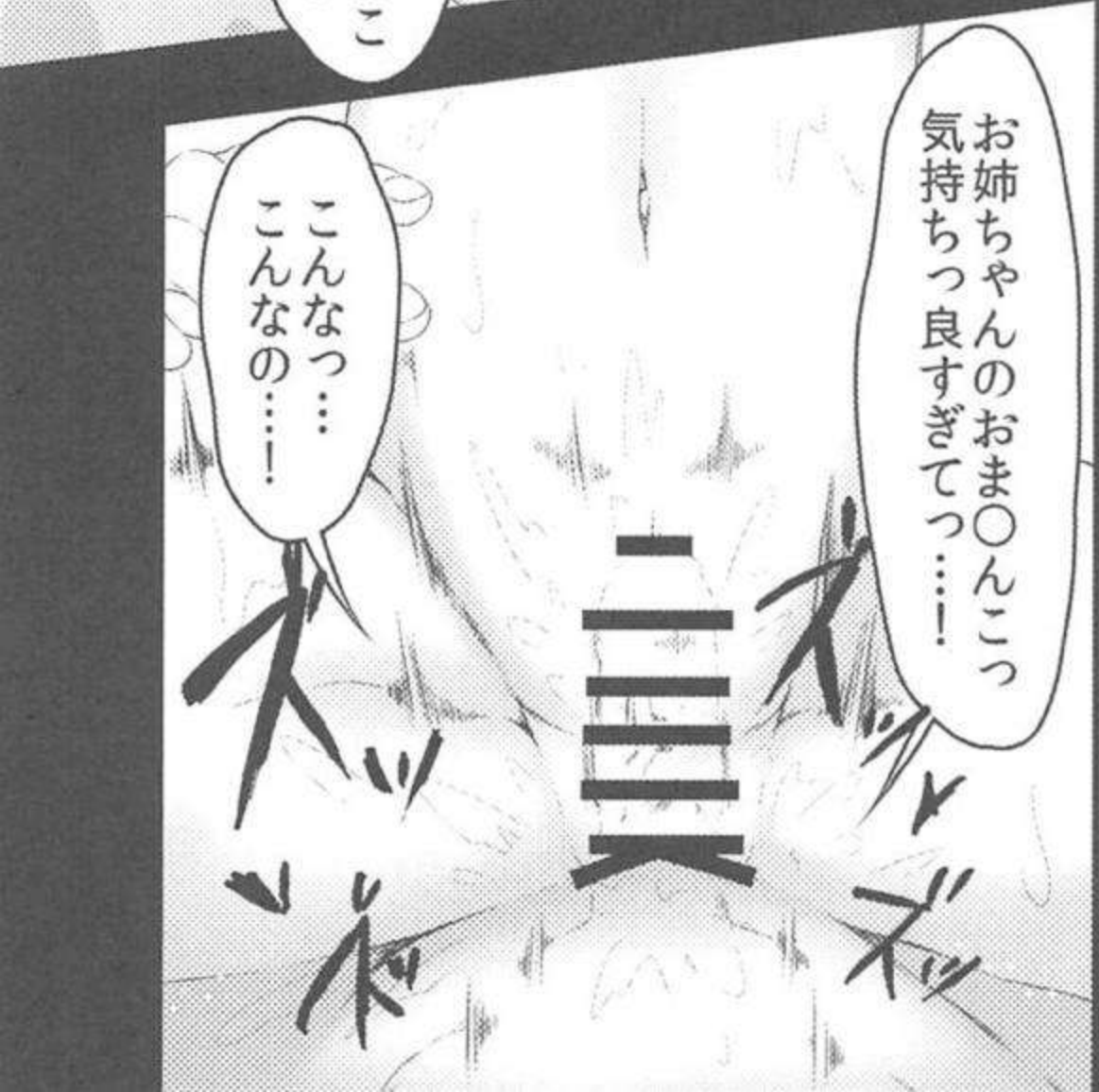


おま○こ…
お姉ちゃんのおま○こ
気持ちイイよお…!!

この穴じゃなくてえ…
おま○こって…
言うんですよ…♡



すっすっ…
お姉ちゃんのこの穴…
すごい気持ちいい…



こんなっ…
こんなっ…!!

お姉ちゃんのおま○こっ
気持ちっ良すぎてっ…!!



あっ♡すっごいっ♡
○○君っ…がっつき
過ぎっ…ですう…♡

ごっごめんなさいっ…!!
でもっでもっ…!!



好きになつちやうつ…！
お姉ちゃん好きつ…！
お姉ちゃんのおま〇こ
大好きつ…！
もつと…もつともつと
いっぱいせつくす
したいよお…っ！

嬉しいつ…ですつ…
〇〇君つ…
いいですよつ…
神通のおま〇こでっ…
いっぱいせつくす
しましようね…

あつ…
〇〇君つ…

嬉しすぎてっ…
お腹の奥きゅんきゅん
しちやいますつ…

お姉ちゃんっ！
またくるっ！
出ちやうう！

んっ…
いいですよつ…
出して下さいっ…
膣内でっ…一番奥でえっ…



あーっ
♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡

はー…すごかった…
これがせつくす…

ふふふ…お役に立てて…
本当に嬉しいです…♡



また沢山せつくすして
差し上げますから…♡

提督には内緒にして下さいね、
そしたら…

神通さんと睡姦
なぎりあ

前略、風呂から
戻ってみると
嫁が私の布団で
寝ていました。



いやはや
まるで
眠り姫ですな。



はっ、もしやこれ
嫁としたい百の
セックスの一つ、
睡姦ができるの
ではッ!?



思い立ったが吉日、
失礼しますね
神通さん!!!





まずこれですよこれ！
いやー神通のおっぱいは至高ですなあー



名残惜しいがいつ
神通が起きるか
わからないからね。
善は急げ、さっそく……

……おや？

おっと、あまり
悠長にはして
いられない……！



……もうすでに
濡れているん
ですが神通さん



神通さんパンツ履いてないじゃないですか！
まあいい好都合だ。
さっそく前戯でも……

ははあ：もしや私が
風呂に行ってる間、
ここでオナニーして
ましたね。
ムツリスケベです
もんねえ神通さん

さて、本当は
寝フェラとかも
してみたいんですが
流石に起こして
しまいそうですし：

えーそれでは

スツ

いただきます。

あ

!?

ちゅぽぽ

ズ
ア...

んっ

コ

神通さん？

起きてらっしゃいます？

だろ



危ない危ない
セーフだった
ようです

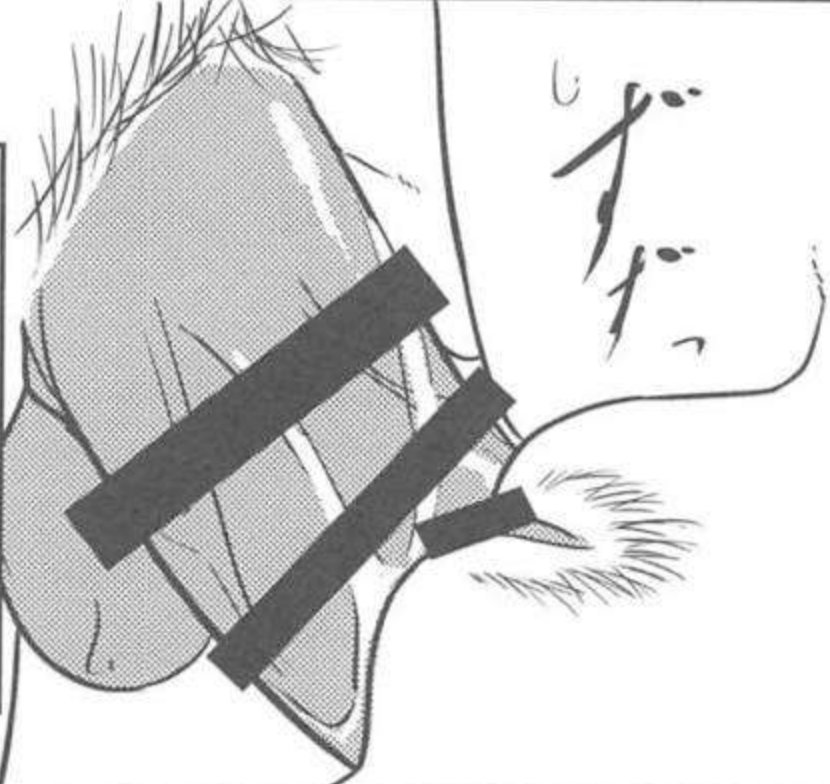


これはもう少し
慎重に動いた方が
よいのかもしれない
ません。

んっ

ズッ

ゆっくりじゅっくり
蝸牛のように
いきましよう



んっ



ん

ふっ



背徳感というのが、
とても堪りませんね…
実に興奮します。





じ
実は始めから…

…いつから起きて
いらつしやったん
でしようか…



射精しちやい
ましたね…♡

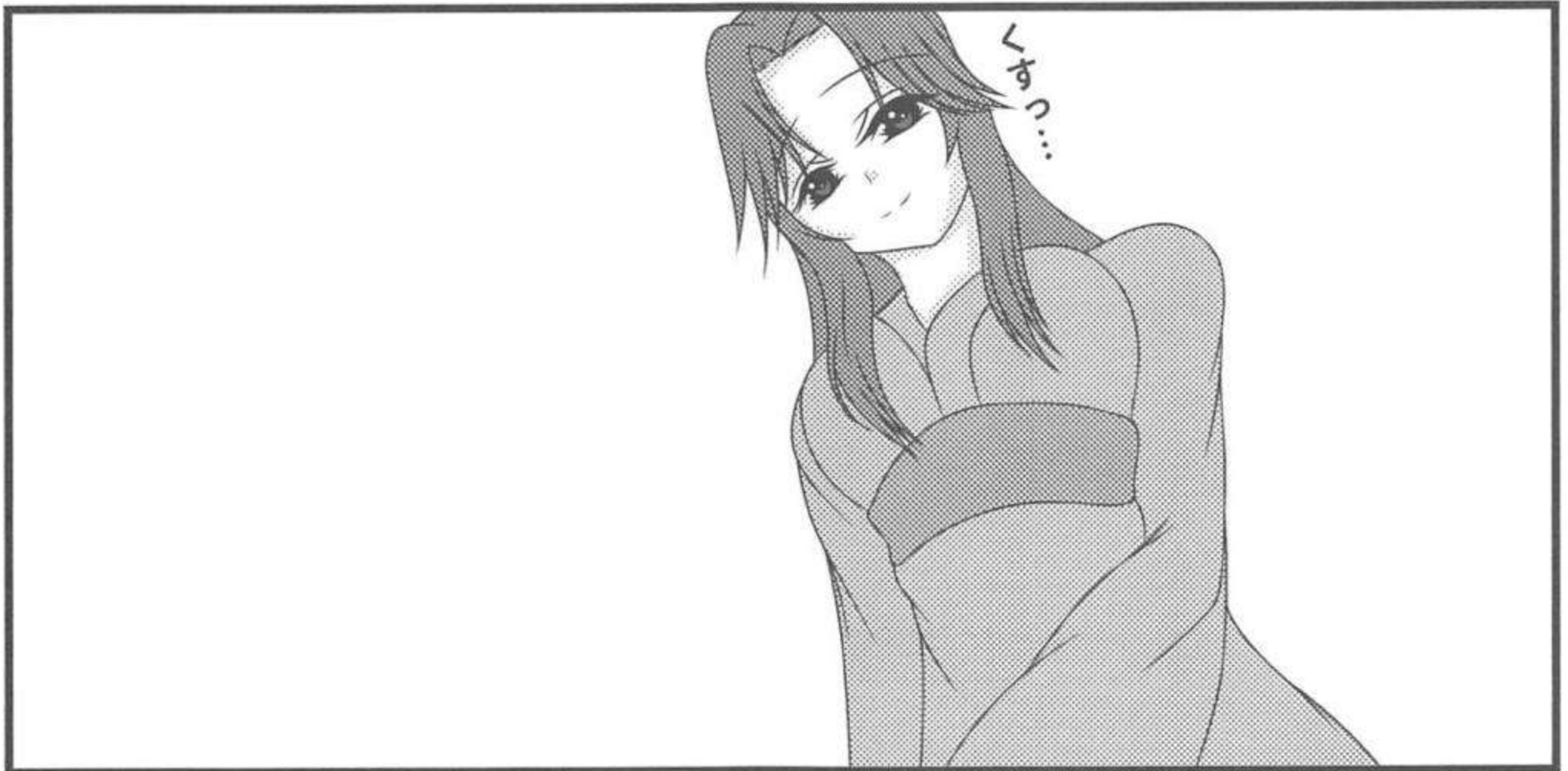
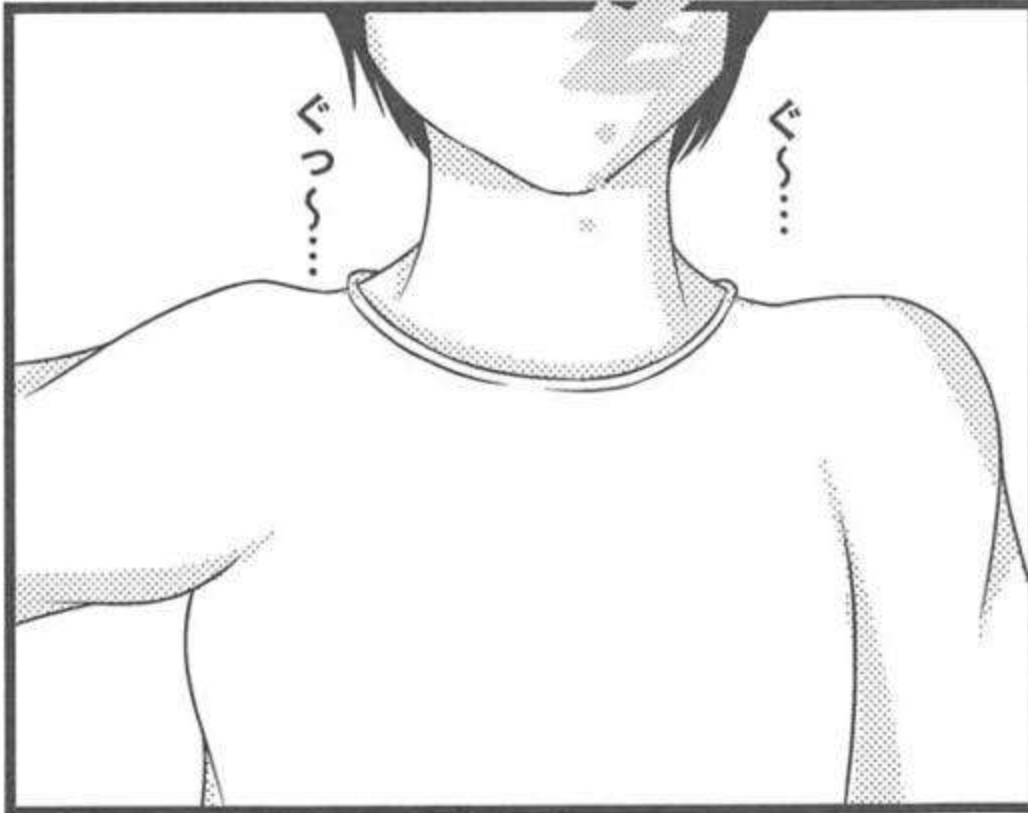
なっ
中…♡

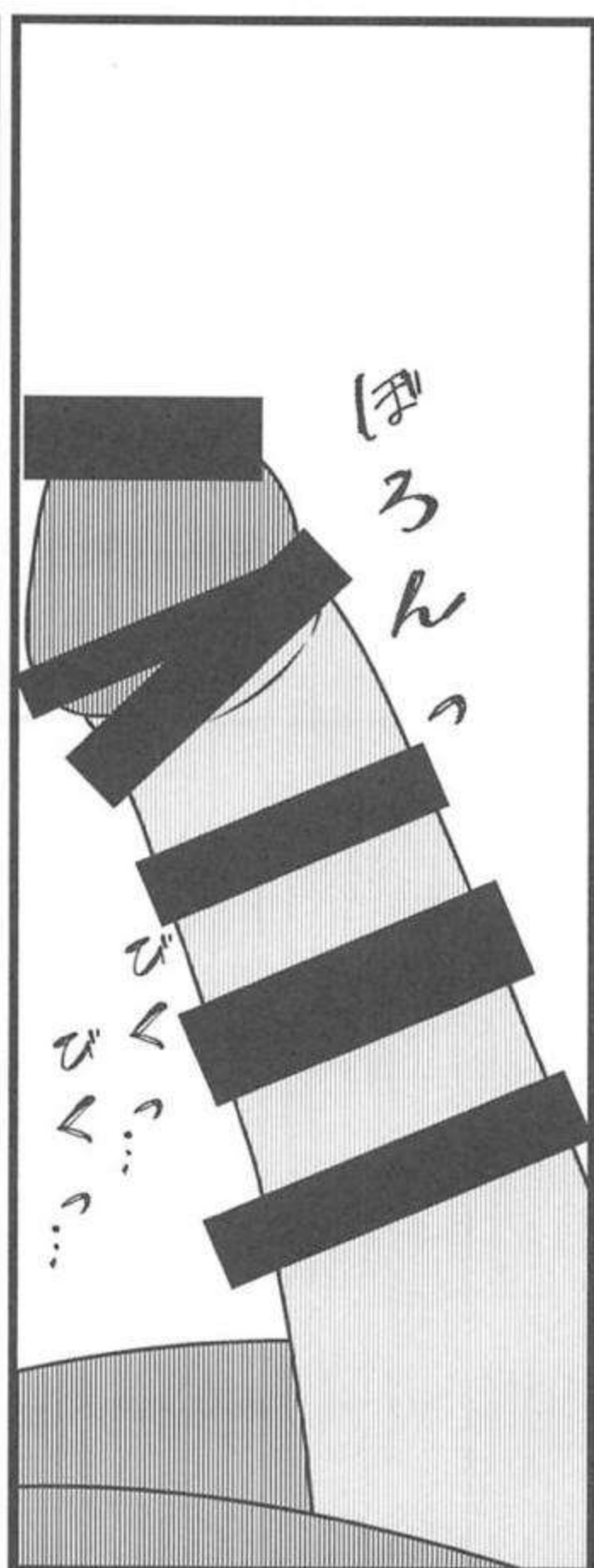
神通の秘密

琉球雛

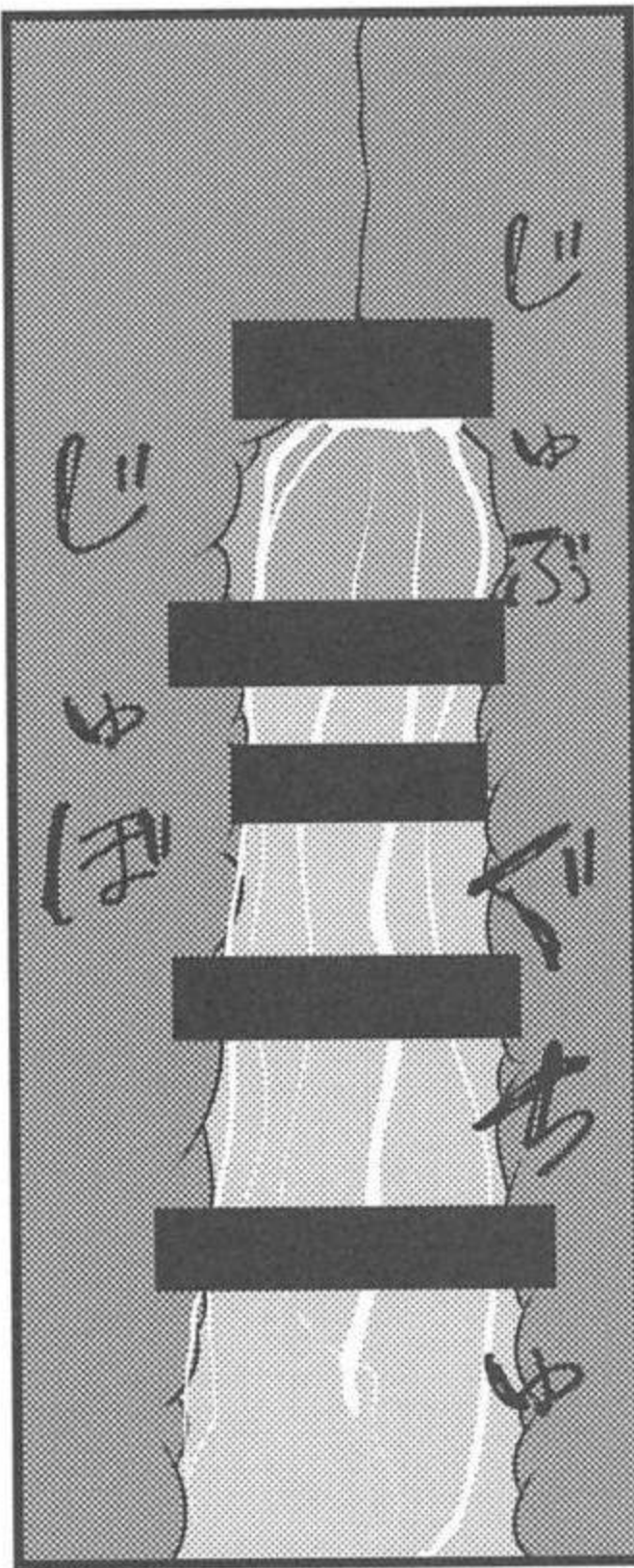
スツ...

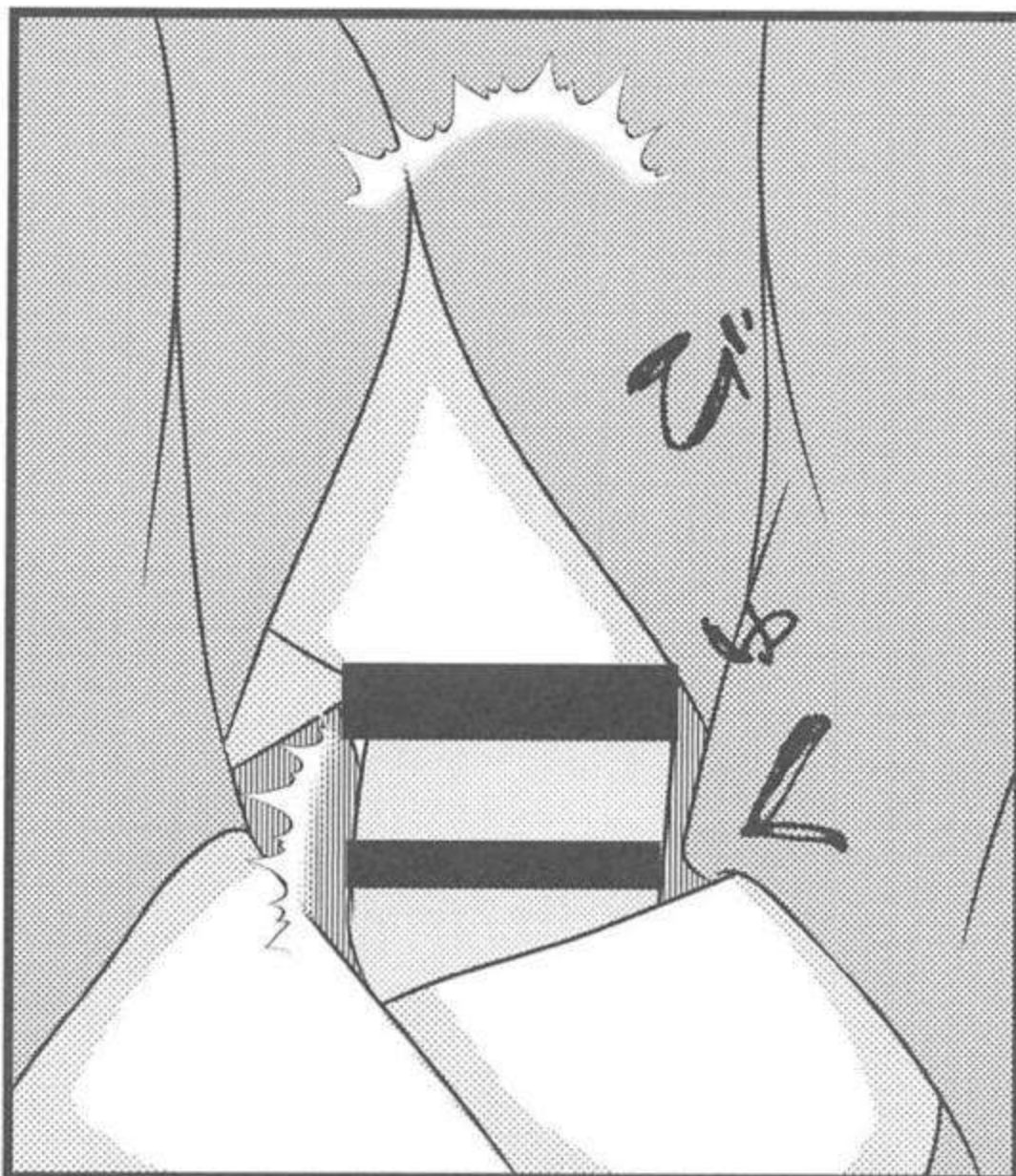
んんん...













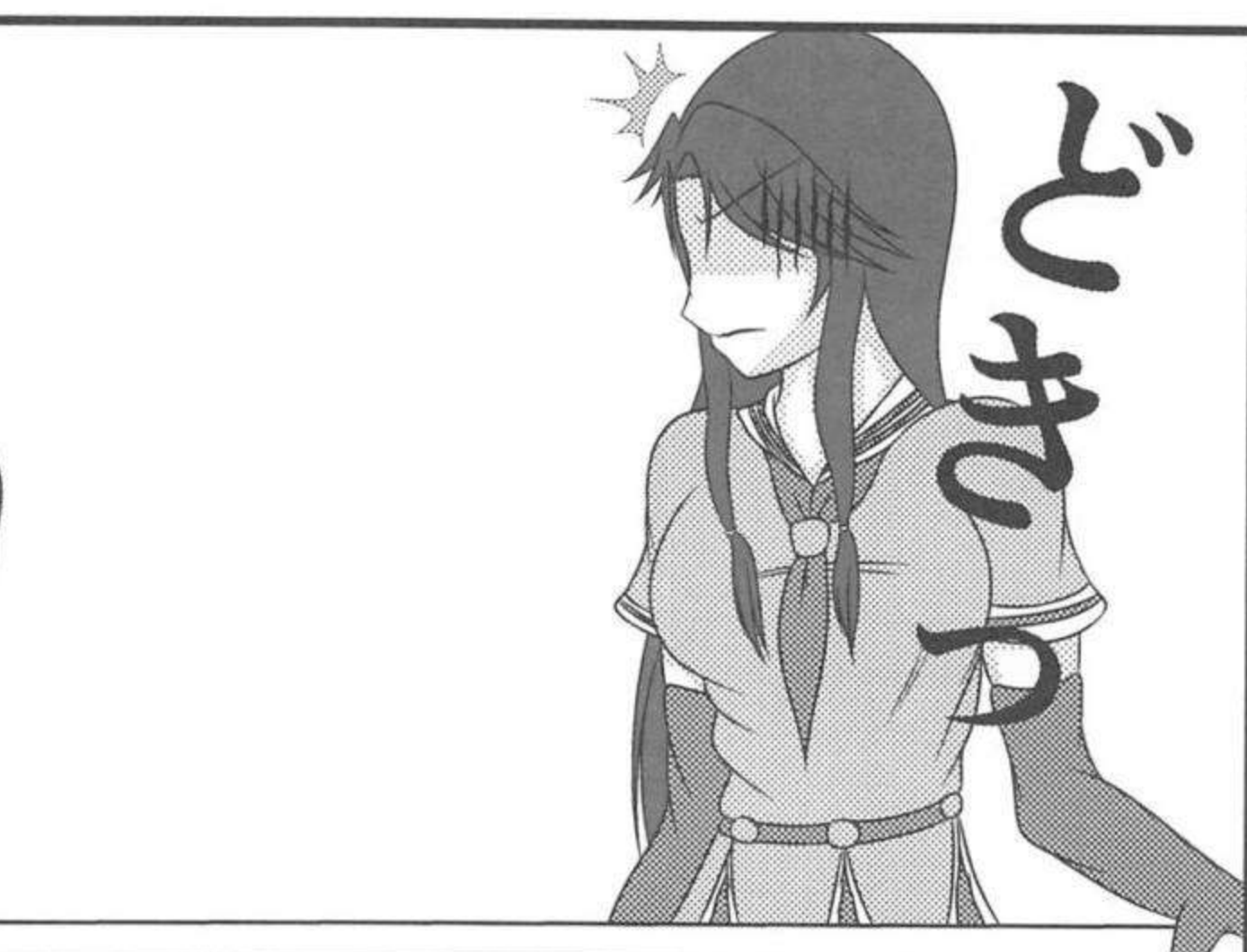
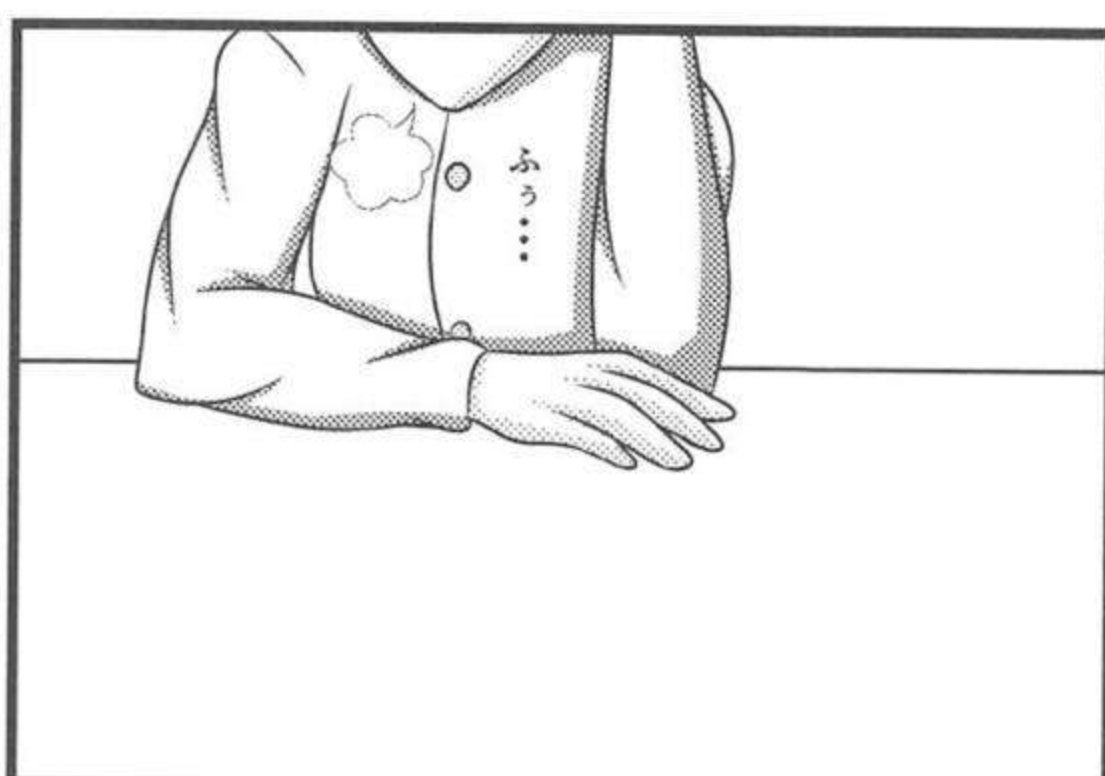
はあああああ
あああああ
ああっ
ああああ...!!

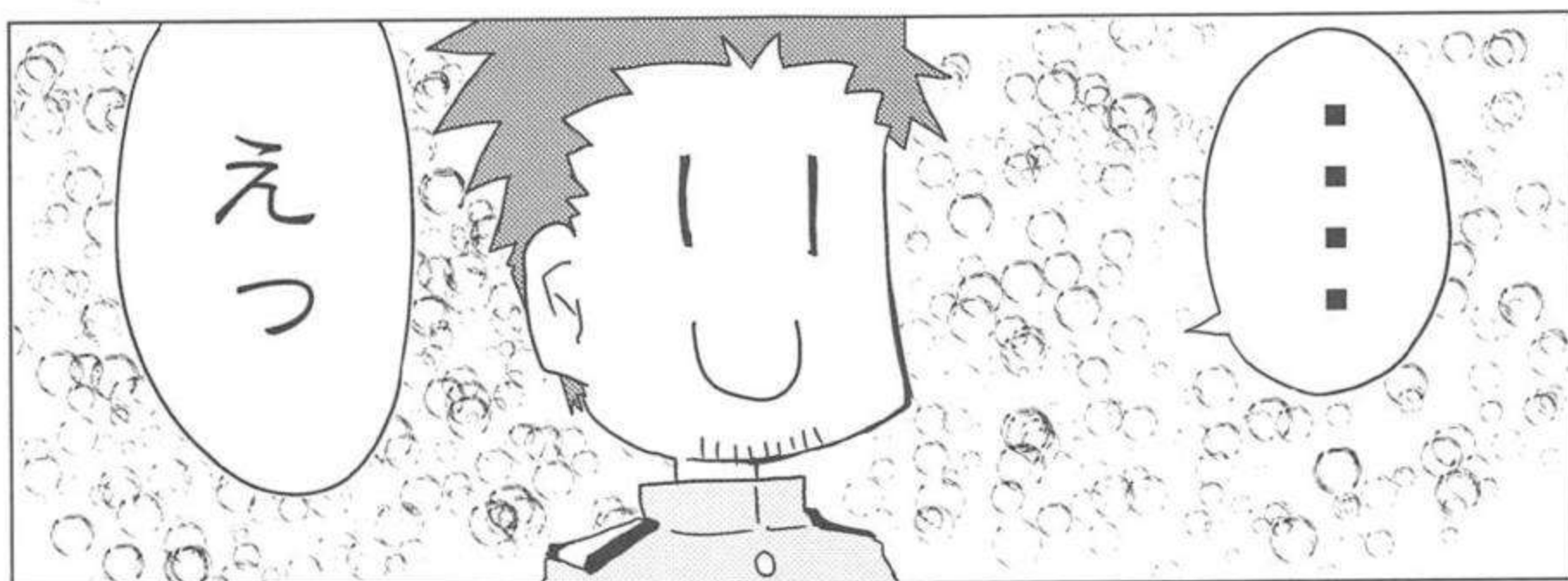
びりりりり
びりりりり
びりりりり
びりりりり

び

びりりりり
びりりりり
びりりりり

はあ...
はあ...
はあ...





じ、神通さん……
なぜおしり？

前がダメ
後ろがダメ

その……
睦が修復中の事を
陸奥さんに相談したら……

えエー……

それで、その……

もう準備も済ませて

ありますので……

来て、ください



じ、神通さん…
お尻初めてだよね？なんかその
めちやくちや柔らかいんだけど？

たんっ

たんっ たんっ

んう…っ はいっ、あのっ
陸奥さんにほぐすのを手伝って
いただきましたっ、のでえ…ッ

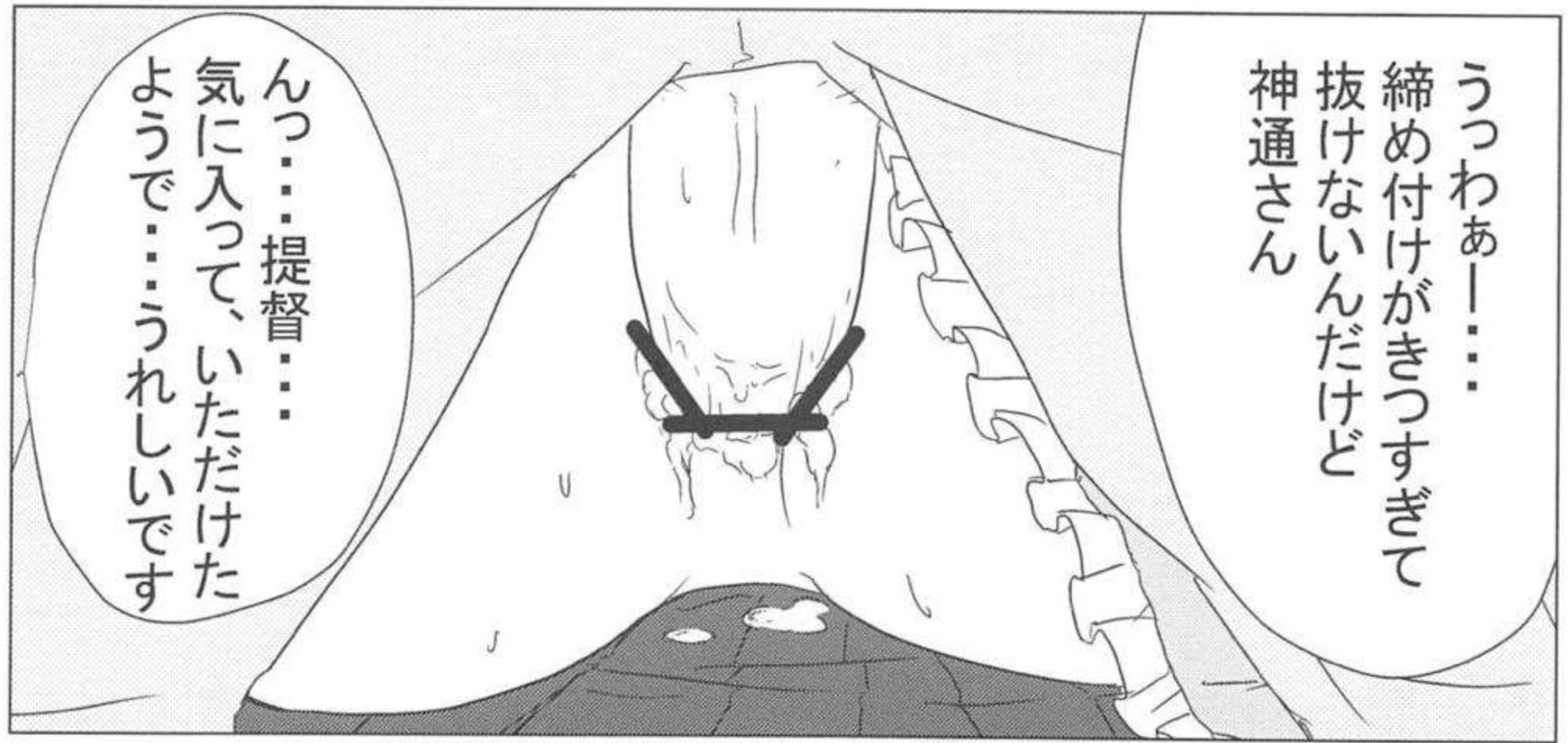
あッ…!!
そこっ 擦られっ

イツちやいますっツッ!!

ビクッ

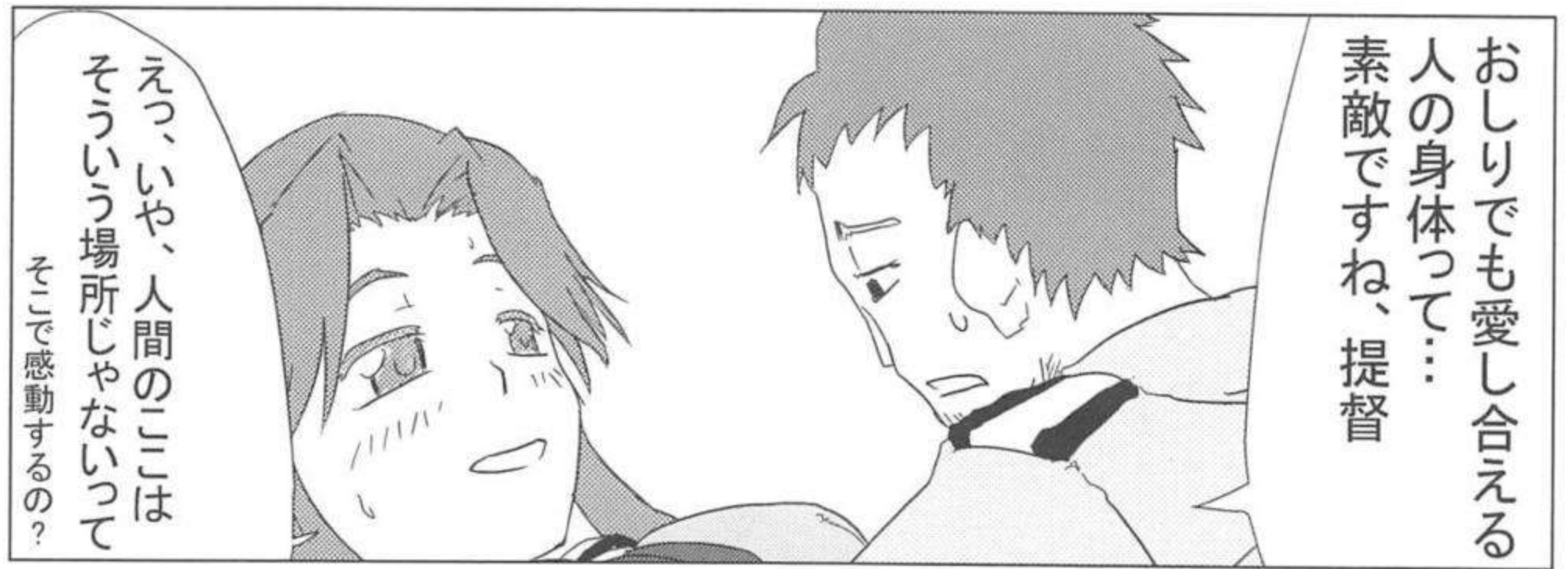
ええええちよつと神通さん
締め付けないで干切れる!!

ビッグセブン
対魔忍の房中術
おそるべし



うっわあー！…
締め付けがきつすぎて
抜けないんだけど
神通さん

んっ…提督…
気に入って、いただけ
ようで…うれしいです



おしりでも愛し合える
人の身体って…
素敵ですね、提督

えっ、いや、人間のこころは
そういう場所じゃないって
そこで感動するの？



あら、提督の…
また大きく

いやその
神通さんの中
気持ちよくて…

もう一回いい？

はい♡

神通さんの
アナルも壊れました。

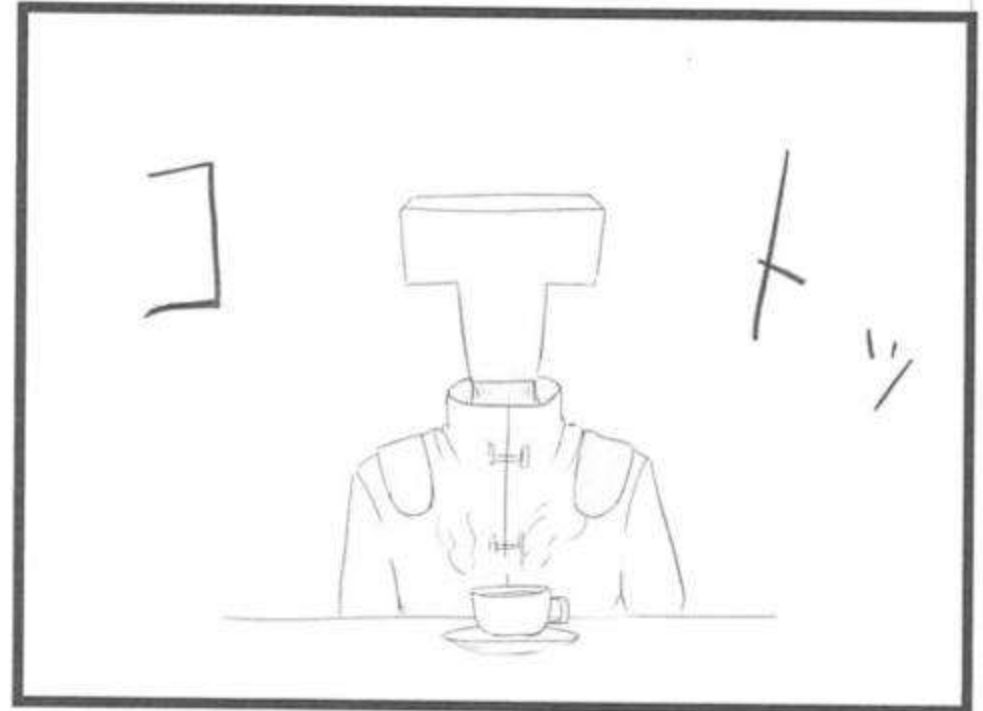


申し訳
ありません



ちゅっ♡

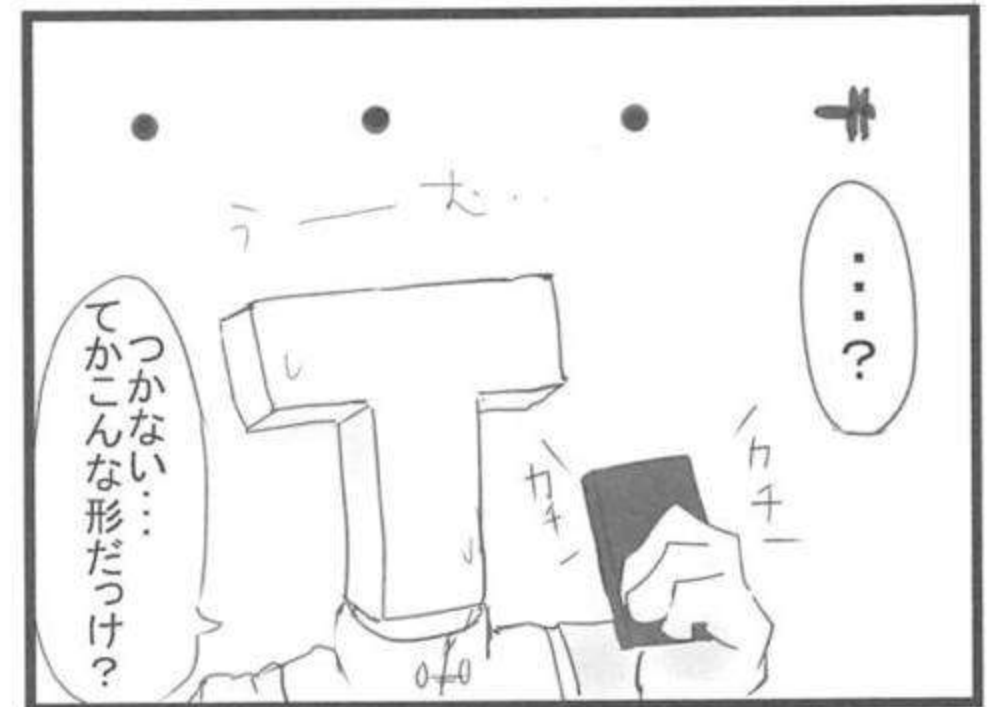
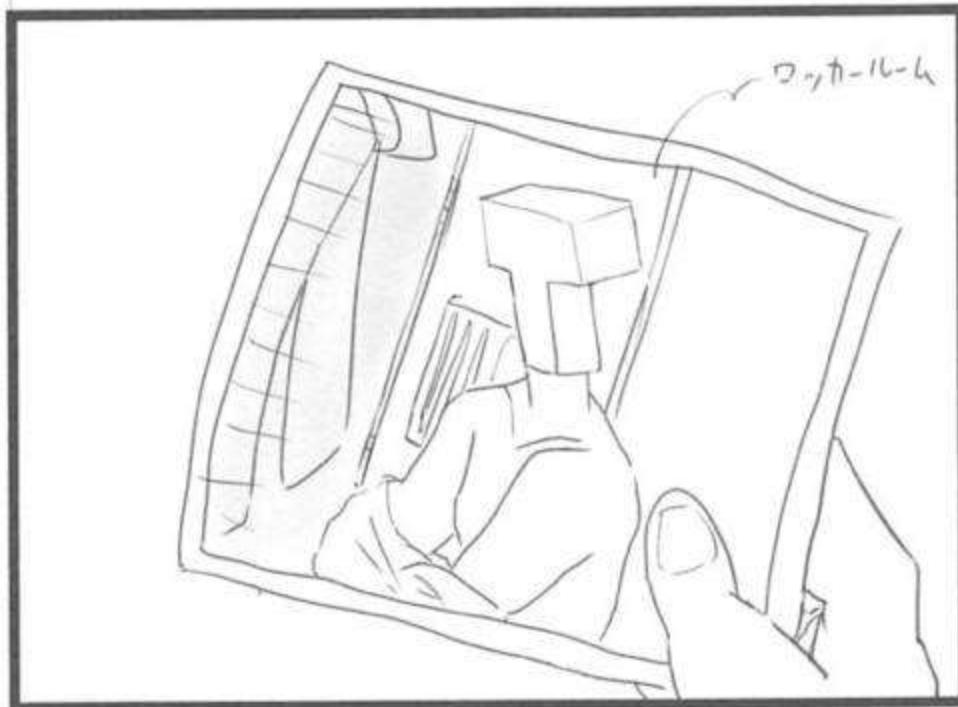
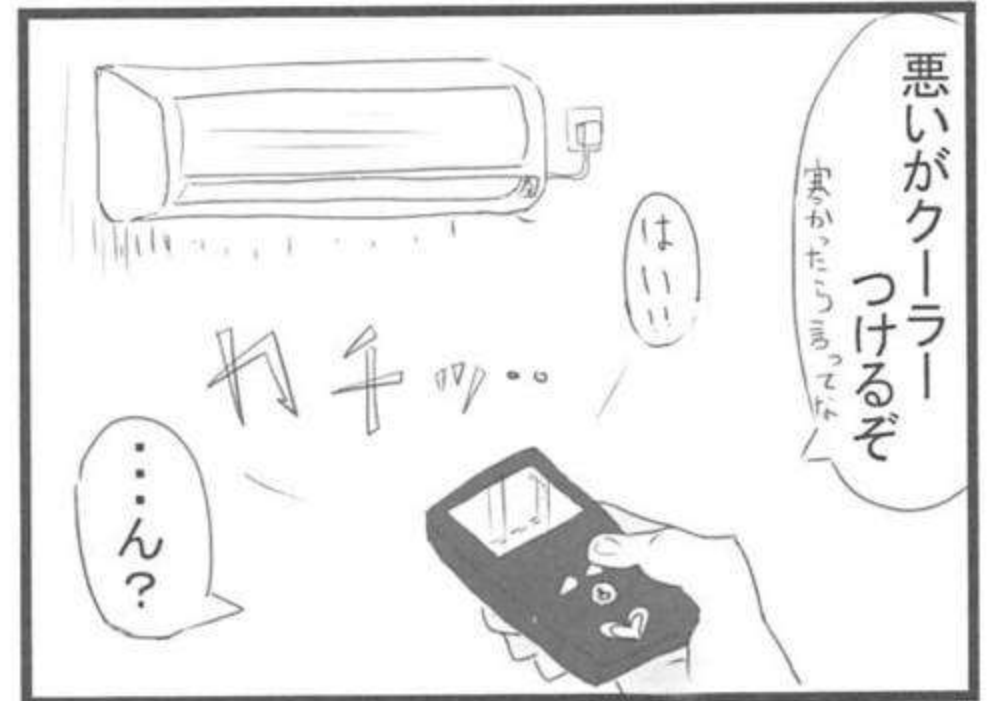
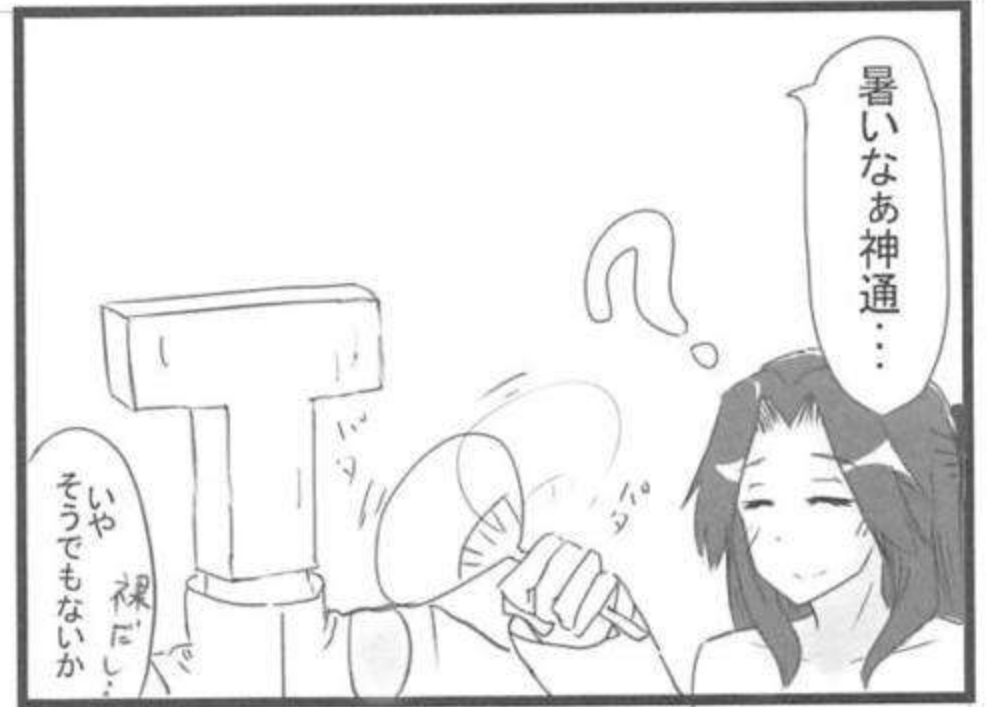
ひとはだ



※お茶です。

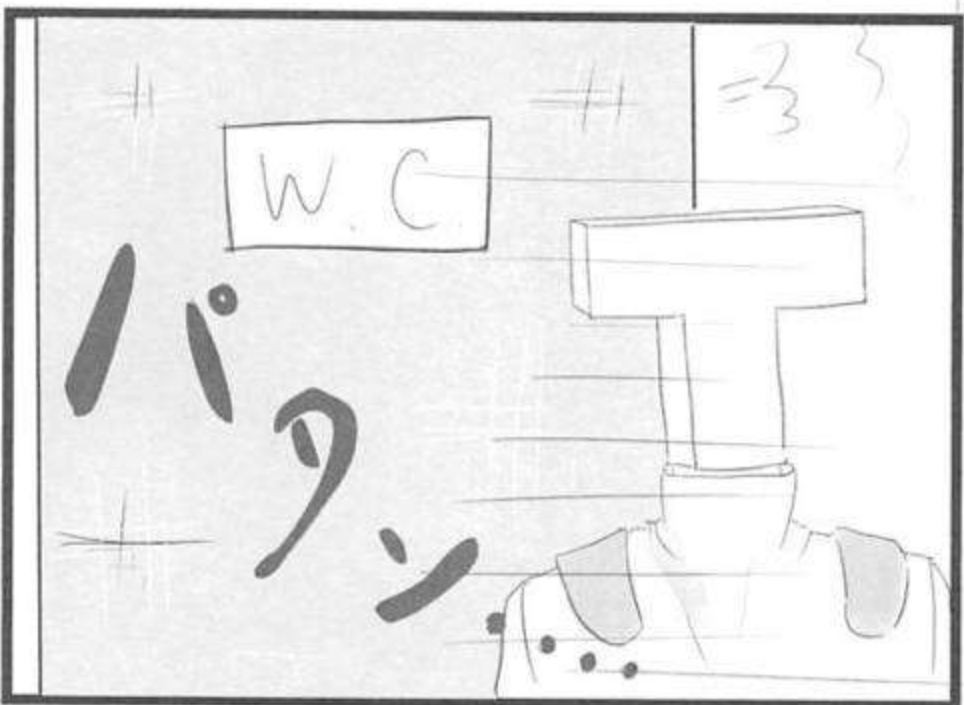
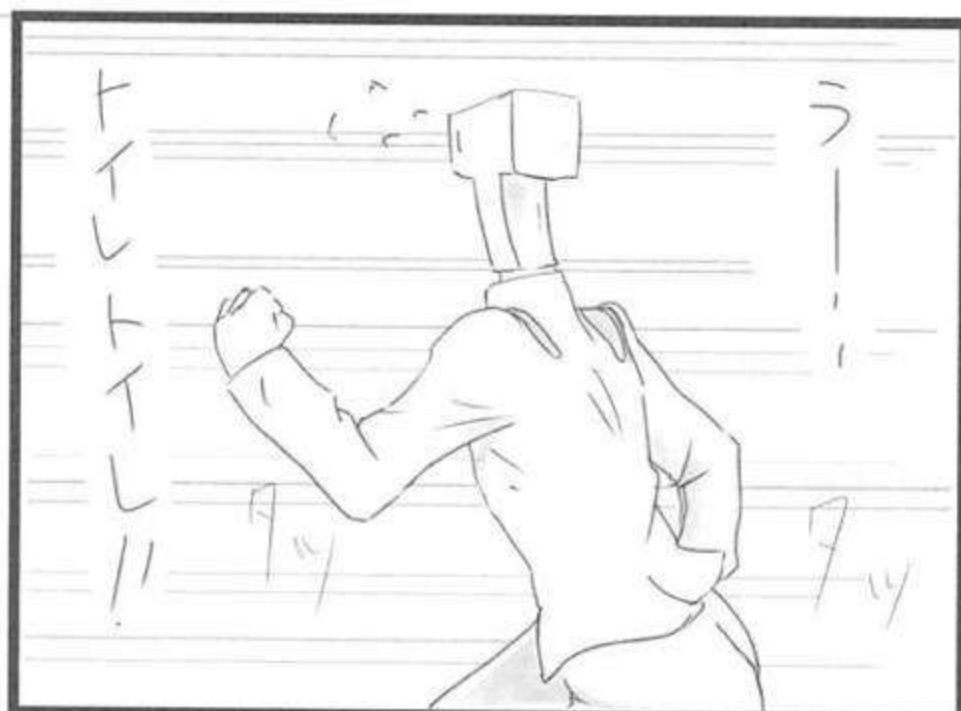
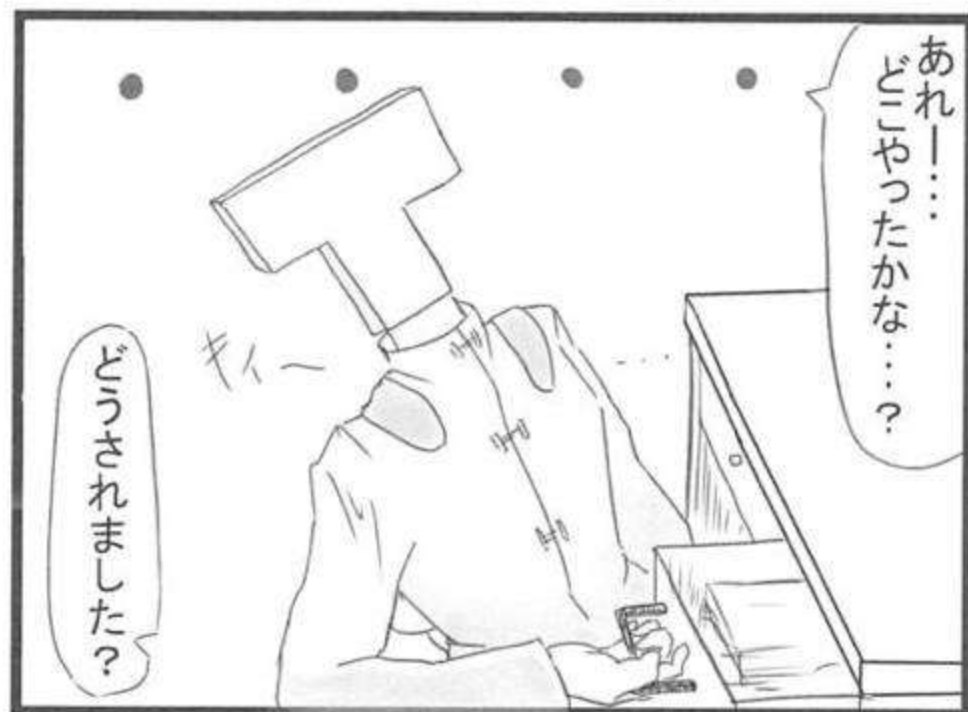
下のお口

リモコン



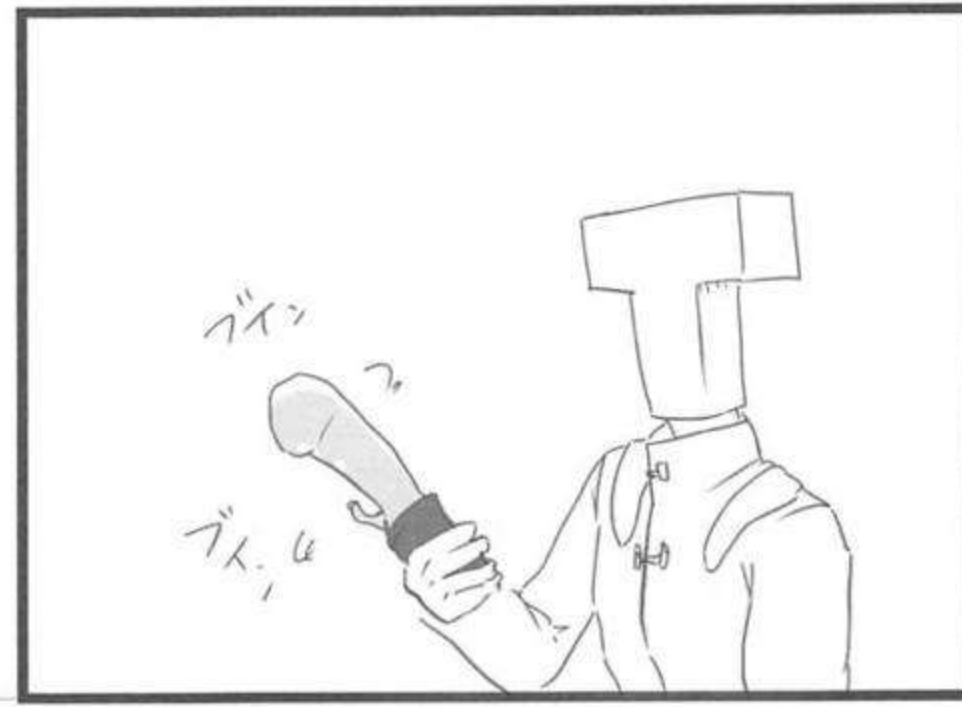
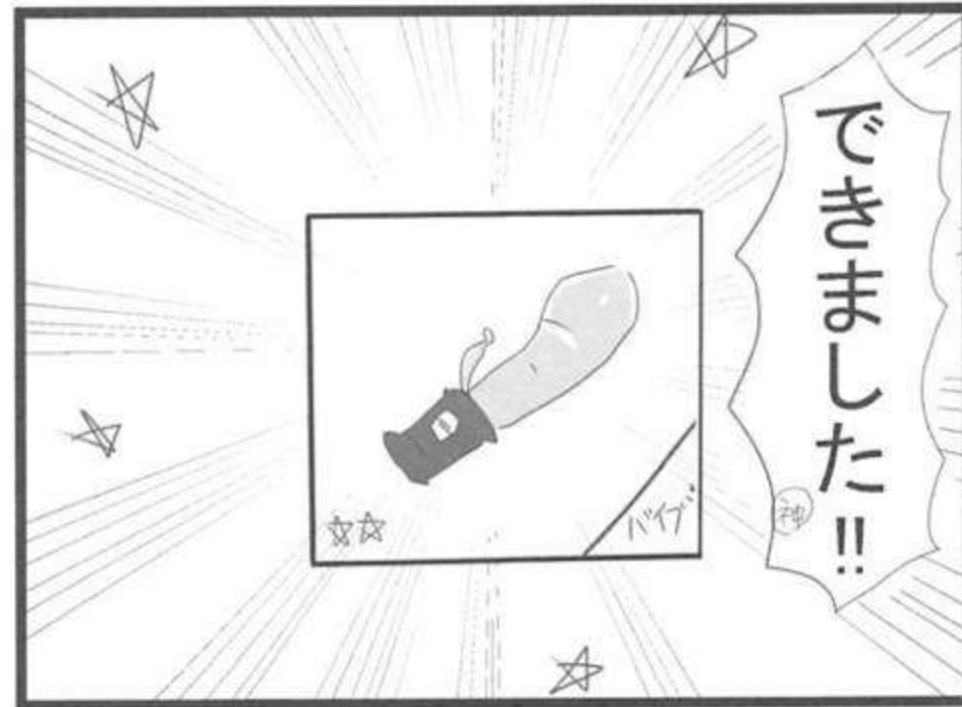
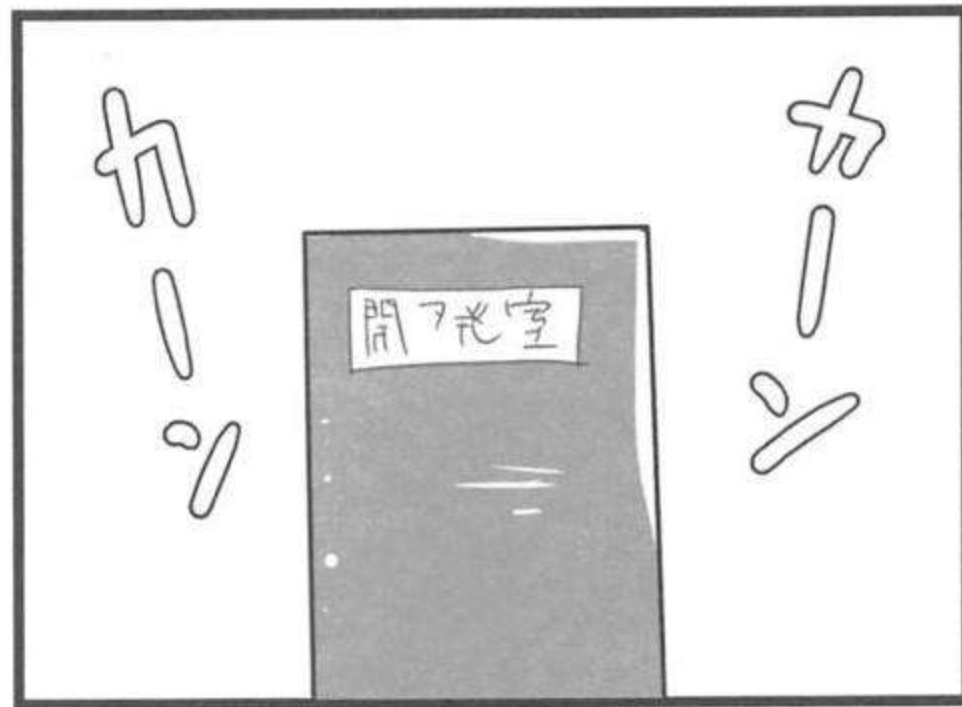
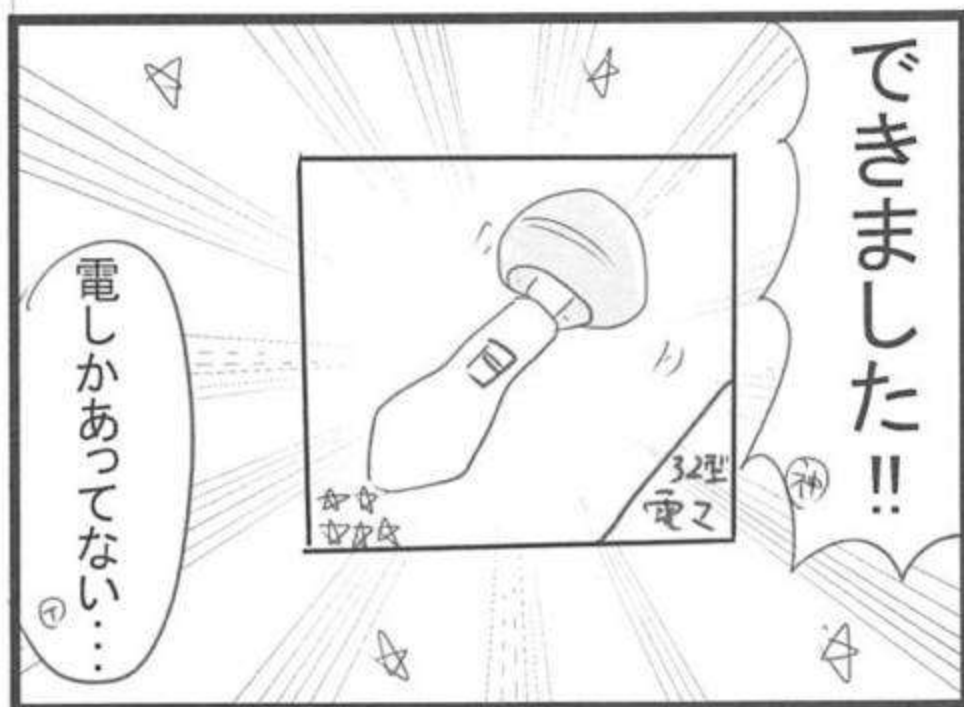
探し物

トイレ



開発 ②

開発 ①



HANDY★



ゆりも

ある雪の日の
帰り道ー

ごめんね神通ちゃん
傘に入れてもらっちゃって…

あ、いえいえ…
全然いいんですよ

あっ…神通ちゃん、肩に雪が…

あつ…き気にしないでください

神通と陸奥の
零々傘
作.くわん

きやあ!?!
む陸奥さんっ
一体何を…!?!

うん♪これなら
2人とも
雪かかないね♪

カ



神通ちゃんは
傘持って♪

だーめっ♪



あああの…
恥ずかし…降ろして…

カァッ



私が初めて合々傘を
した人は…

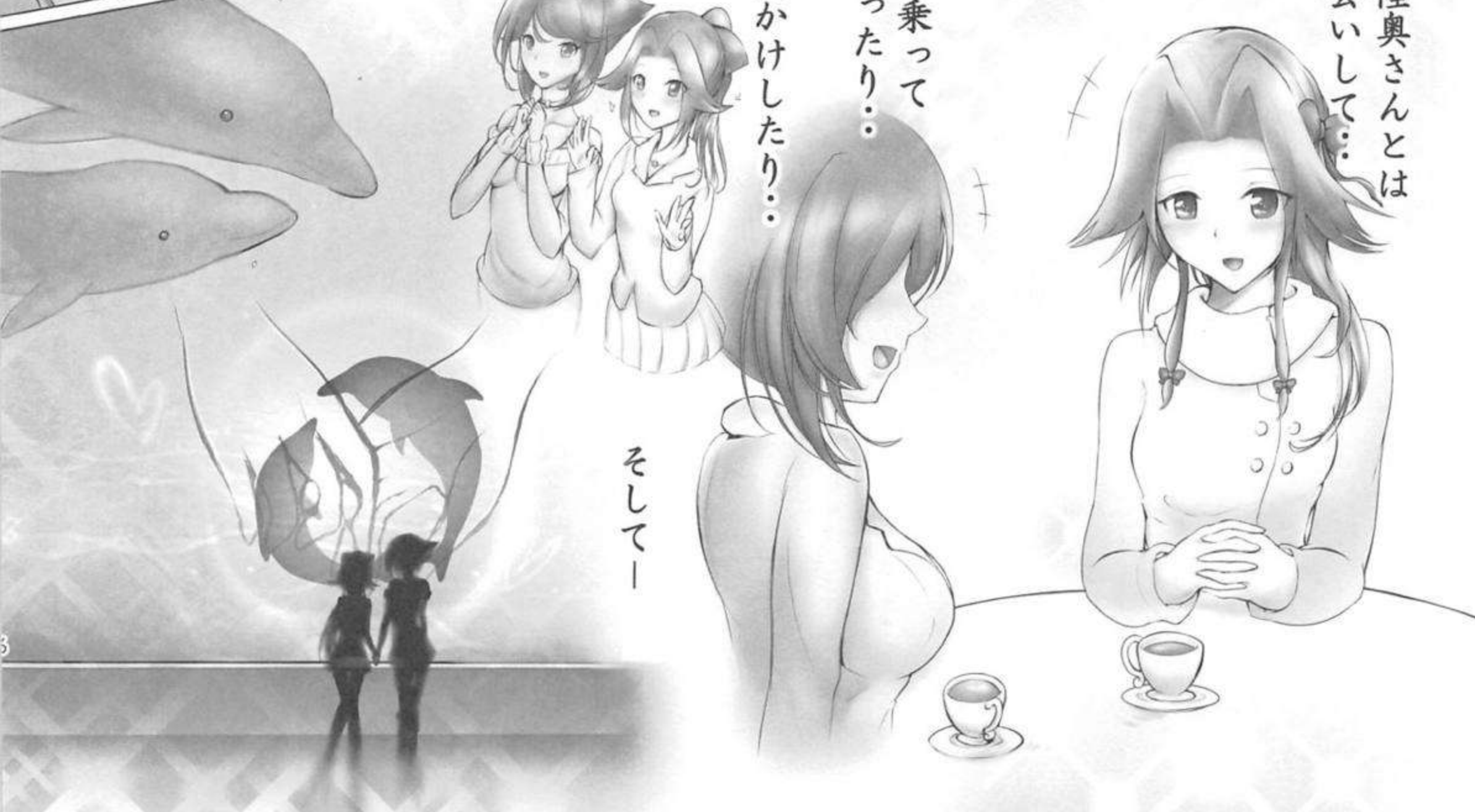
カもちで…

個性的な発想(?)で…

すごく大胆…

けど…
とっても優しい方でした…

ドキッ



それから陸奥さんとは
たまにお会いして…

相談に乗って
もらったたり…

お出かけしたり…

そしてー



んっ：

ねえ神通ちゃん…？

は、はい…

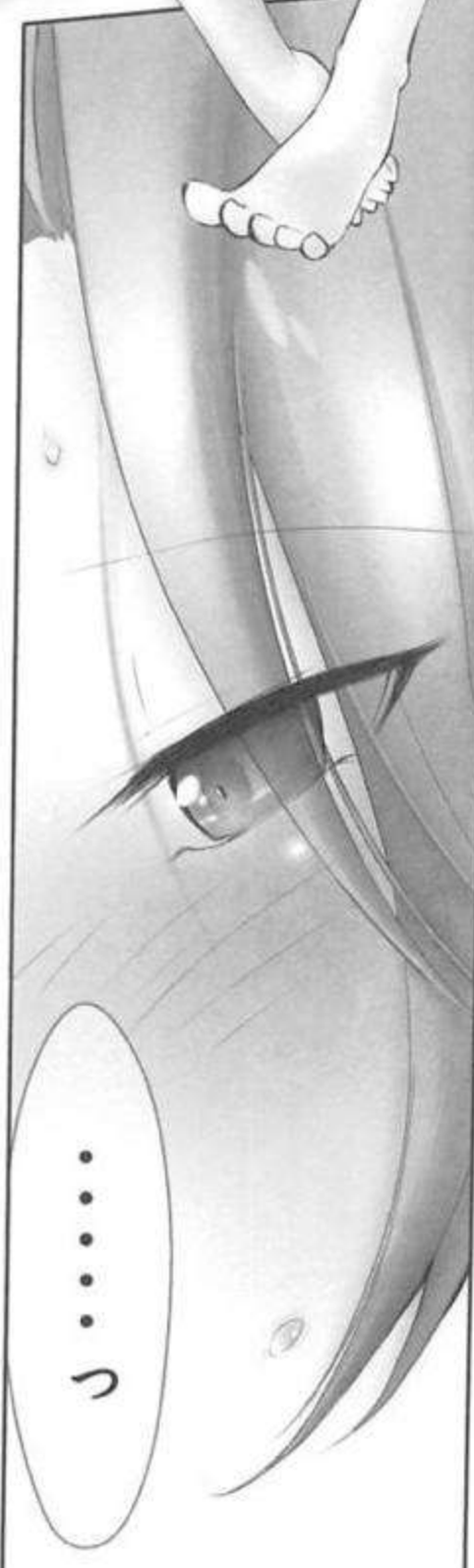
トクン

おん

トクン

私、同姓なのにあなたのこと
本当に好きになっちゃった：

こんなこと言っちゃう人
なんて…嫌い…？



……っ

陸奥さんは本当の気持ちを言ってくれた：

私も…ちゃんと伝えなきゃー

トキ

トキ

私の本当のキモチをー





私も好きです!!

大好きですっ!!



陸奥さんのキス—
すごく暖かい—
このままじゃ私—

とけちやいそう♡

あ♡

ぱはあ♡

トクン♡

トクン♡

トクン♡

トクン♡

トクン♡



ふあああああ!!

陸奥さんっ…
そこは…

すりり…

一緒に気持ちよくなるう。♡

神通ちゃんー
私えっちしたくなっちやったわ♡

はあ♡

はあ



あっ

ちよっと
待っ

あんっ

あらあらもうイッチャったの？
敏感なんだね：♡けど：

ここからが本番だよっ

ぐちゃ
ぐちゃ

あんっ



あああん♡

陸奥さんの指が
私のナカに入ってる…♡

お尻の
穴まで…♡

ずぶぶ♡

ちゅば

陸奥さん…
激しいですっ…んっ♡

ズッ

陸奥さんの指で

あー♡

あー♡

また一人でイッチャう・・・♡

ぐちゃ♡

くちゅ♡

だっだめっ！

はあ

陸奥さんにも

気持ちよくなつて欲しいっ！！

あらあら♡

神通ちゃん意外と大胆っ・・・♡

はあ♡

ぽん♡

うう・・・恥ずかしい・・・

けど・・・次はちゃんと2人で・・・！！

ちゅ♡



んはああああ!!

ひゅるる

ひゅるる

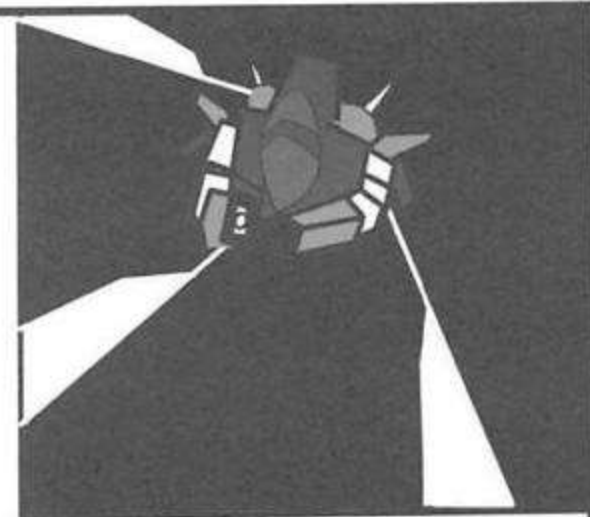


気持ちよかったですよ……

はい……
一緒に楽しめて
嬉しいですっ……♡

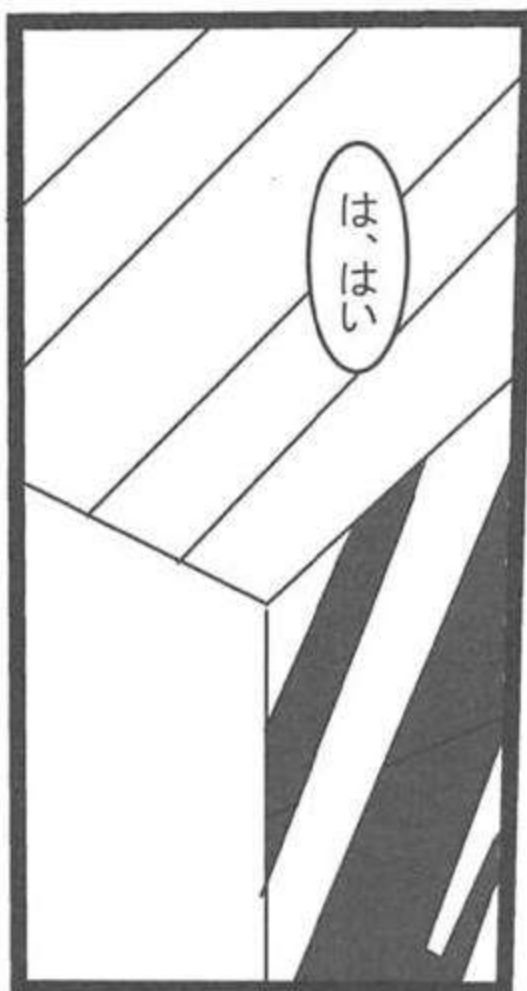
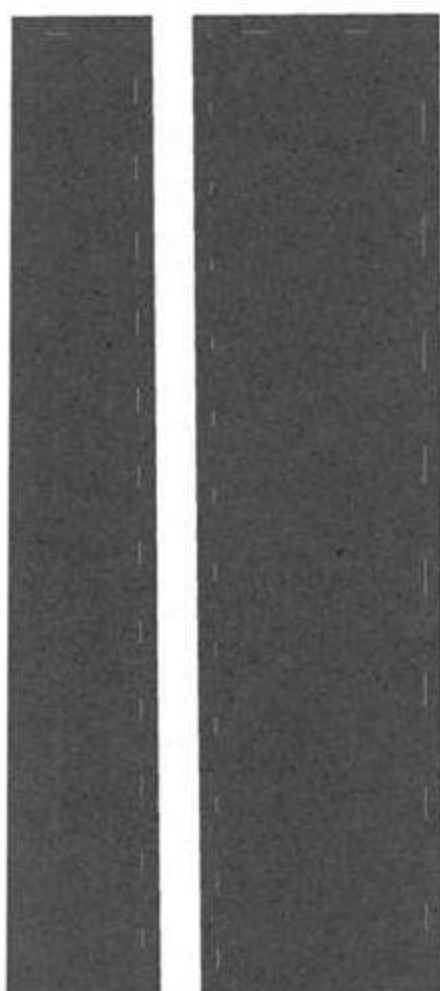
きゅん……

きゅん……

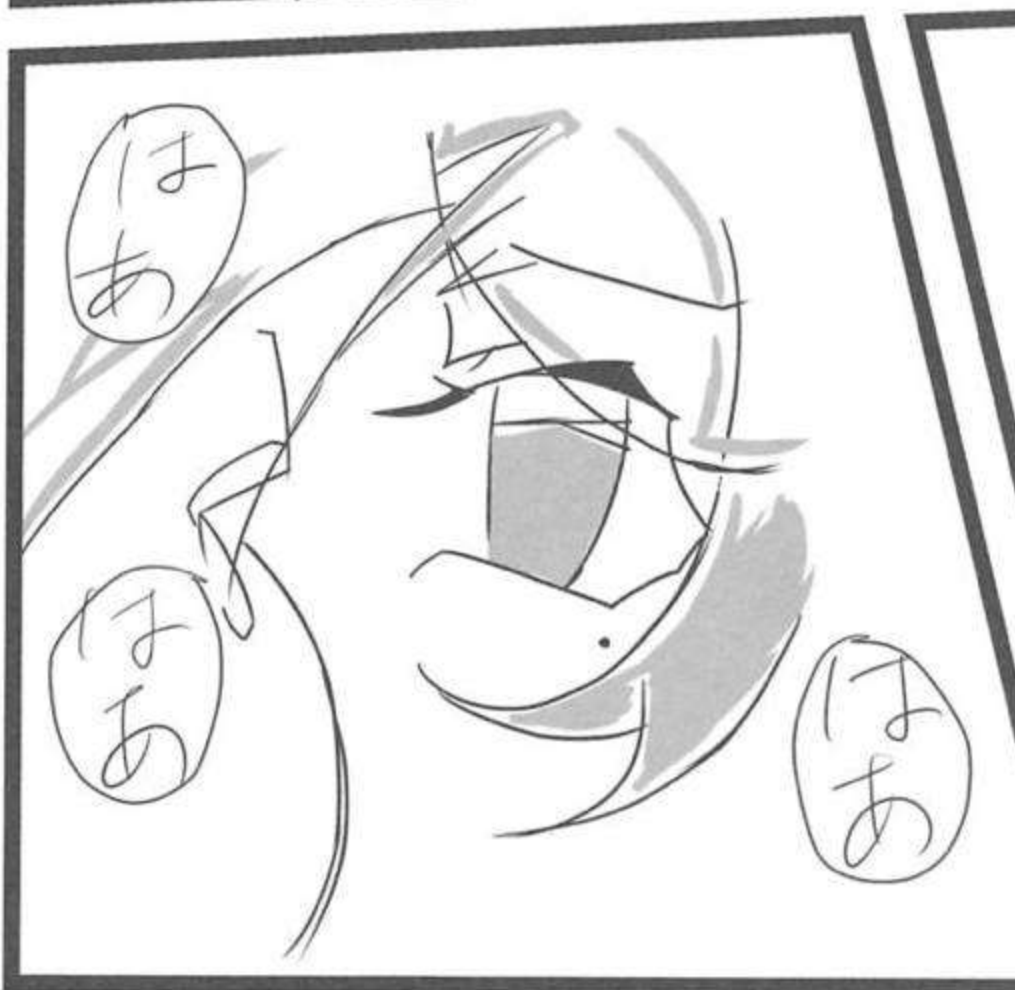
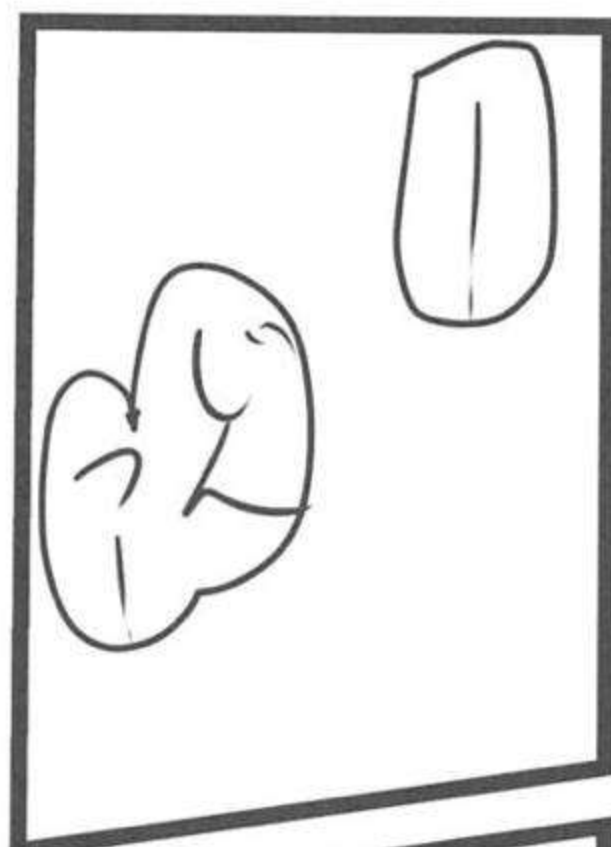


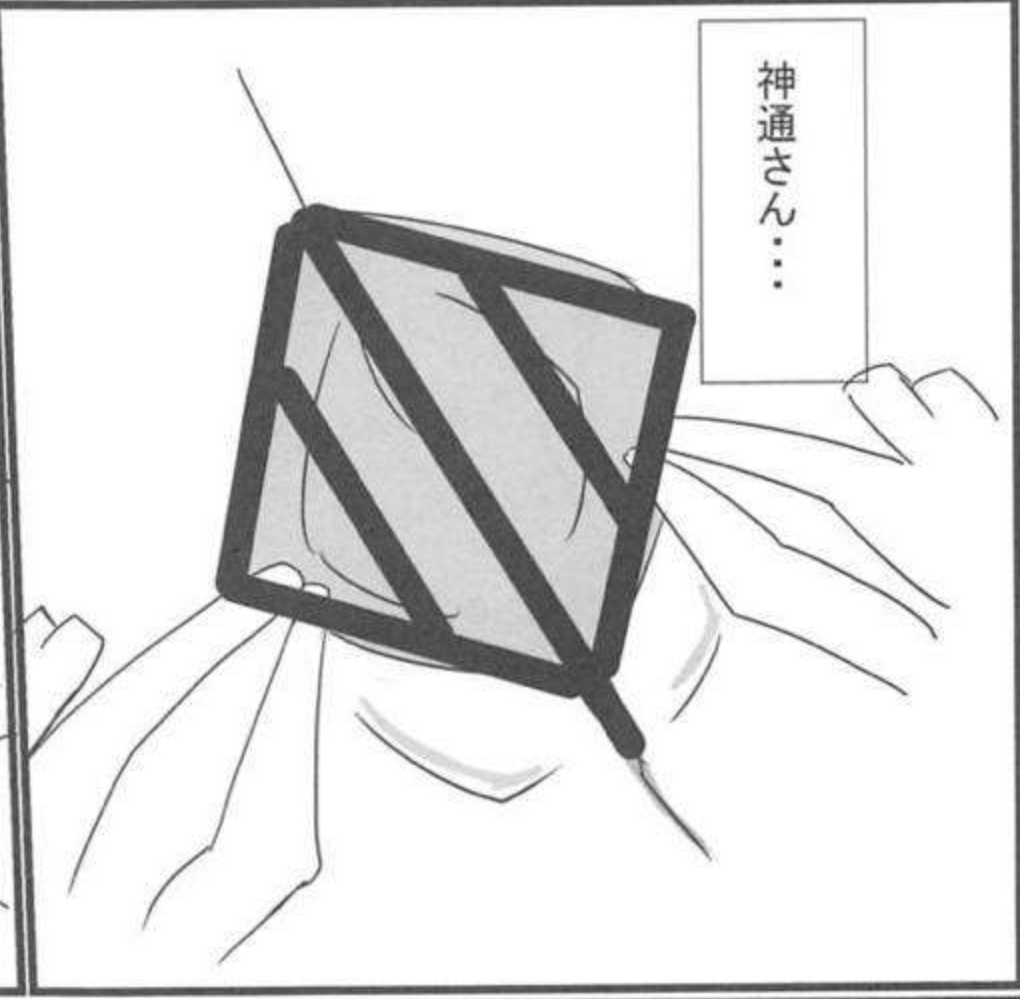
海風を抱きたい神通
ゴステロー







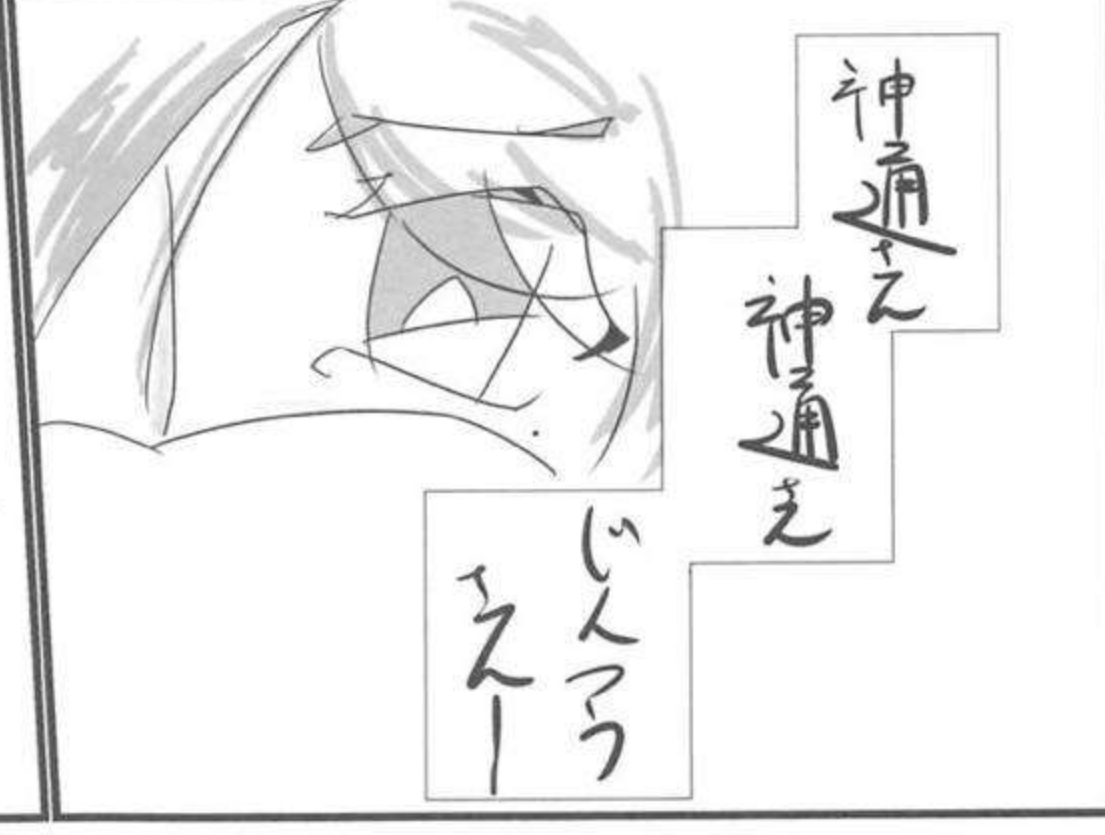




神通さん…



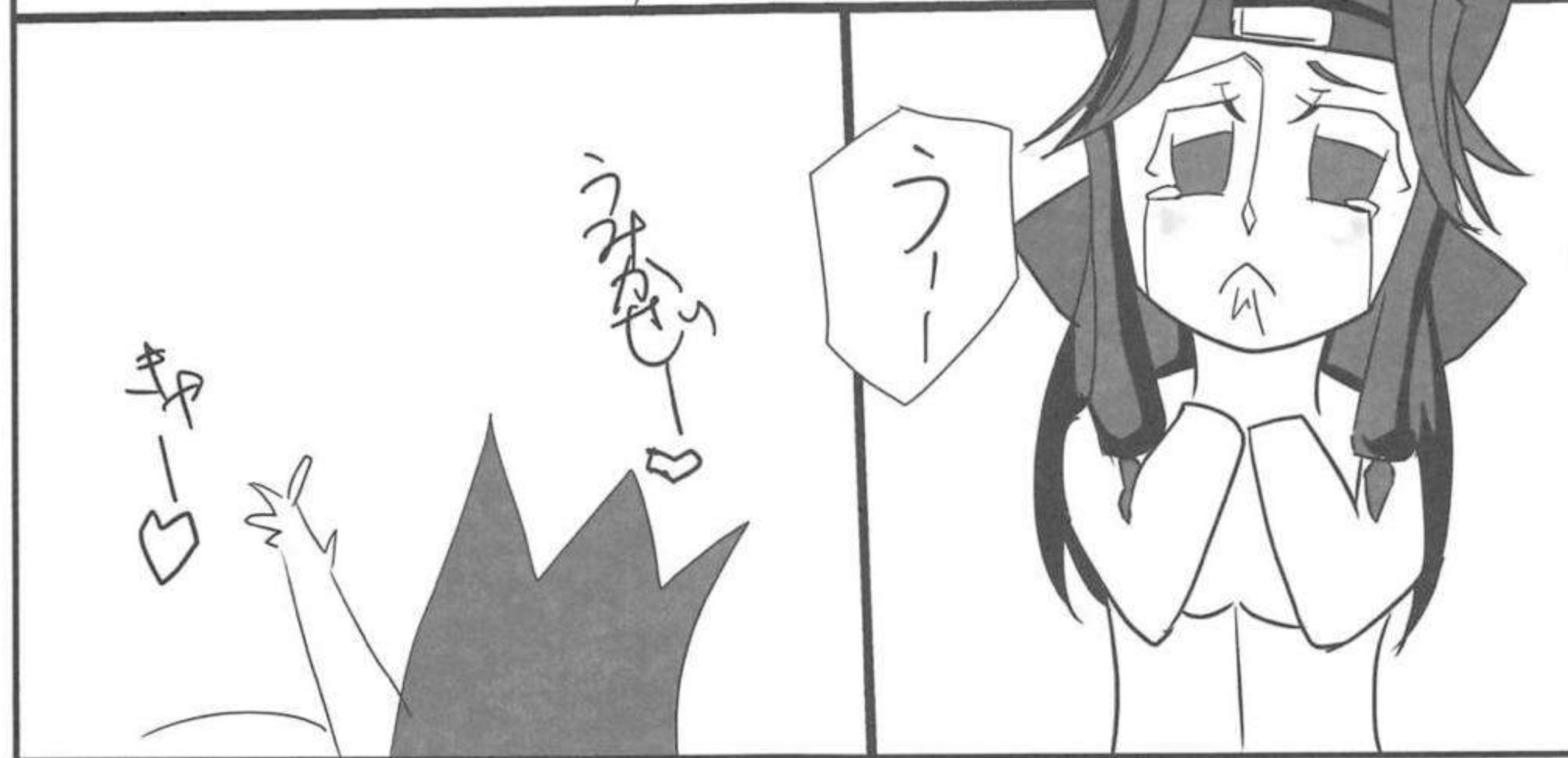
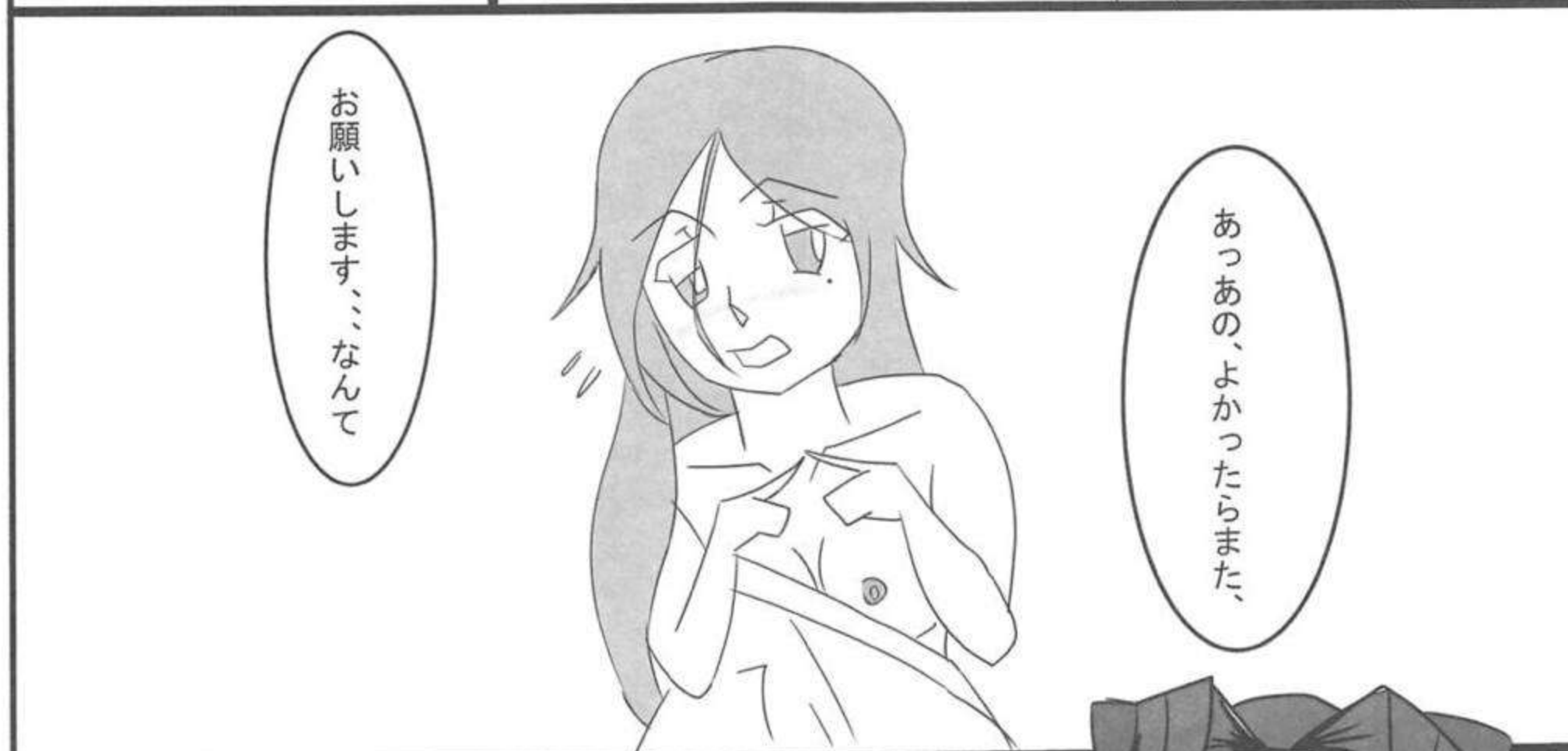
海風！



神通さん
神通さん

いんまう
えん！





「出撃していた艦隊が、帰投しました……」

とある日の深夜、単独での偵察任務を終えた川内型軽巡洋艦二番艦「神通」は任務完了の知らせを鎮守府の総司令である提督に報告をしていた。疲れ切った顔をしつつも彼女は事務的に報告を終え、提督に一礼をして提督室を後にした。その足で入渠ドックへと向かいつつ、愛する姉の事を考えていた。

「川内姉さんは、もう寝てしまったでしょうか……」

いつもであれば深夜でも夜戦好きな姉、川内は騒がしい。しかし今夜は静まり返っていて物音ひとつ聞こえない。そのことに少し落胆しつつも神通は足早に入渠ドックへと向かった。

◆
脱衣所に到着し手早く制服を脱ぎ、設置されている棚に置いて置いて。裸になってしまえば中に入り、シャワーが設置されている洗い場へと足を運ぶ。蛇口をひねってお湯を出せば傍の椅子に腰かけて、温度を調節しつつ身体を流し始めた。一度シャワーを止め壁に掛ければ次に石鹸を手に取り、泡を立てて腕から肩、胸、腹へと手を滑らせていく。

「……川内姉さんに、洗って欲しい、なんて……今度、お

願いしてみましようか」

そう呟けば洗い終わったのかシャワーを手に取って再びお湯を出し、身体の泡をぬめりが残らぬように、手で擦りながら流し始めると、不意に頭の中で声が響いた。

“神通の肌つてさ、すっごくすべすべで気持ち良いよね……ね、もっと触っていい？”

脳内で響く声の持ち主である姉の川内とは、普通の姉妹よりも先の関係へと進んでしまっていることを思い出し、かつて言われた言葉を思い出してしまうも、洗い流そうとするが何故か同じ場所ばかり擦っていた。

「姉さん……」

“うん、ホント触り心地抜群だよね……。こっちは、どう？”

神通の脳裏に浮かぶ姉は、腹を撫でおろして手を秘部へと滑らせ近づけていく。思わず同じ行動をとってしまうも止められず、赤面しつつもお湯を止めてシャワーを手放した。

「んっ……」

秘部に触れた指先に感じたのは確かに水分ではあるが、お湯には決して無い粘り気だった。くちゆりと水音がするも、それでも手は止められずにいた。

“もう濡れてるの？……神通ってば、イヤラシイんだから……”

「あつ、姉さんっ……やだ、言わないで……」

本当に背後に居るかのような、耳元で聞こえてくる姉の声に感じてしまい、秘部を擦る手が止められない。それどころか更にぬめりが増し、やがては肉豆に指が到達してしまい思い切り赤面してしまう。

“ここ弄ると気持ち良くなっちゃうんだよね？……可愛
い神通のイキ顔、見たいな”

「つや、姉さんっ……あ、あつ、ああんっ……キチャいま
す、姉さん、せんだい、ねえさ……いやあああんっ……！」

指の動きを速めて念入りに刺激すればもどかしそうに腰
を揺らし、強めに弄る。すると絶頂が近いのか脚の付け根を
ピクピクさせ、やがて背をのけぞらせれば、ぴゅくつと少量
の愛液を放ち、脱力した。はあはあと浅く速い息を繰り返
し吐きながら達した余韻に浸るも、ふと我に返って辺りを見渡
して場所を確認すれば一気に火照りが鎮まってしまう、シャ
ワーで身体を流して立ち上がって、恥ずかしさのあまり飛び
込むように湯船に張られている湯に身を沈めたのだった。



風呂から上がり、用意してあったワンピースタイプの服を
纏って、川内型が使用している寮へと足を運ぶも扉の前に立
った途端、胸が高鳴るのを感じた。それもそうだ、先程、姉
を思うあまり一人で致してしまったのだから。再び火照りそ
うな身体を震わせ、意を決して扉を開ければ予想通りに電気
は消えていて、中からかすかに寝息が聞こえてきた。妹であ
る那珂は遠征に行っている事は確認済みであり、今夜は愛す
る姉と二人きりだということは想定内だ。

「姉さん……」

同じ服を纏う彼女が寝ているベッドに近づき、窓が近くに
あるせいか月明かりに照らされる姉の顔を見つめてため息

を一つ。すると、あたかもそれを聞き取ったかのように川内
は神通の方へと身体を向けるように寝返りを打ち、わずかに
口を開いた。

「じん、っ……」

「……姉さん？」

寝言だろうか。言葉を放つても瞳を開けない彼女はすうす
うと規則正しい寝息を発している。安心したような、残念そ
うな複雑な顔をしつつも神通は姉の寝顔を眺めていた。

「むにや……」

再び声を発せば唇を舌でぺろりと舐める。その行為で唇が
潤い、艶々としている。そんな川内の唇を見て、神通は思わ
ず唇を自身の指でなぞってしまうのだった。

「この唇で……私の名を呼び、甘い言葉を囁き……」

囁く様に言葉を発し、うっとり見つめ微笑みながら唇を
なぞっていると、彼女の手が神通の太腿を撫でているのに気
づく。どきり、と胸が高鳴り、太腿を撫でる彼女の手を取っ
て指先を口に含んだ。

「あむ、ちゅ……ん、この指で、私のイケナイ所に触れる
のですね……興奮、してしまいます……」

夢中になり、まるで飴のように舐めるも川内は相変わらず
夢の中らしく、起きる気配も見せずに時間が過ぎ去る中で神
通はふと、とんでもないことを思いついてしまう。

“姉さんの指で、してしまいたい……”

今まで舐めていた指を離して、自身の下着を躊躇いなく降
ろしてベッドの下へと落とせば再び川内の手を取り、すでに
愛液を零す秘部へと彼女の指を這わせた。

「ん……あ、んっ……いいの、気持ち、イイ……ねえさん……っ」

寝ている姉の手を使い、くちゆり、くちゆりと水音を響かせて弄っていると身体が火照りを増し、彼女の腕を伸ばすように引っ張り中指を膣内に入れて、抜き差しをする。その間にも川内は瞳を閉じ寝息を立てており、こちらを見る気配はない。そのまま行為を続けていると突然指が勝手に動いたような違和感を秘部に覚えた。

「あん、姉さん……？あつ、あ……！」

膣内から指が抜かれ、肉豆を押しつぶすように強く刺激される。神通の腰は思いきり跳ねて、予想しなかった快感に流され濃い愛液を零し始めた。

「っ、や、ダメ、です、ねえさ……あん、ああんっ……も、わた、しい……イツ……つあ！いやああんっ……！！」

突然の甘い刺激に耐えられるはずもなく、姉の指に肉豆を押し付けるようにしてそのまま達してしまう。達した余韻に浸り、浅く速い息を繰り返していると指が秘部から離れ、寝ていたはずの件の姉は身体を起こし、指についた愛液を愛しそうに、見せつけるように舐めとっていた。

「……ん、ちゅ……ふふっ、私の指でスるの、そんなに気持ち良かったの……？えっちな蜜、すっごく濃いね」

「川内姉さん……！？あ、あのっ、いつから、起きていたのですか……？」

「んー？どうだろ、神通が部屋に戻ってきたあたり……かな？」

そう言うにつ、と笑う川内は悪びれた様子もなく、舌を

ペロツと出しておどけるばかり。そんな姉を見て神通は恥ずかしさのあまり、俯いてしまっていた。そんな彼女を見て川内は彼女の両肩を優しく押し、自分が寝ていた場所へと背中をつけさせて、顎を指でくいと持ち上げつつ視線を合わせる。

神通の瞳には、羞恥を感じすぎたのか涙がうつすら滲んでいた。

「ん、んっ……姉さん……私、私っ……」

懇願するように、情熱的な瞳で見つめれば、川内は頬を赤く染めて僅かに目をそらす。その仕草に若干の落胆を覚えるも、次の行動でその感情は一瞬で霧散していった。何故なら……。

「……可愛すぎるよ神通……夜戦したく、なっちやうじやん」

拗ねたように呟き、顎を持ち上げたまま顔を近づけ素早く唇を奪う。そして離れればいたずらっ子の様に笑って。そんな彼女を心の底から愛しく想い、神通は川内の首に腕を回して強く抱き付いた。

「シて、ください……姉さんと、夜戦したい、です」

「……そっか。じゃあ……私と、夜戦しよう？」

そう言って笑う川内の瞳も、情熱的な色を映していた。

「あん、姉さん……っ……」

お互いに一糸纏わぬ姿になれば川内が覆いかぶさり、神通

は彼女の首に腕を回して密着して。川内は左手で神通の胸を揉み、右手で秘部をかき回していく。

「ね、神通……どうかな、気持ち良く、なってくれてる……？」

「っ、は、はいっ……ねえさんっ、あっ……良いですうっ……」

神通は両腕を上投し、反対側の腕の肘を持つようにして快感に耐える。しかしその行動がすべすべの腋を晒し、それを見た川内はすかさずそこに舌を這わせ始めた。

「っあ、ね、ねえさ……！」

驚きの声を上げるも川内は胸を、秘部を弄りつつ舐め回す。その行為に更に高ぶりを覚えて神通の秘部は更に愛液でとろとろになってしまっていた。

「ん、ふふっ……気持ち良いって泣いちやってるね……可愛いよ、神通。……すっごく美味しそうだし、舐めても良いよね？」

そう問いかけつつも指で触れている箇所を外し、両手で神通の脚を持ち上げて割り開く。膝裏をぐっと押しやれば秘部をすべてさらけ出すような、非常に興奮を招く姿になってしまう。言うが早いか、質問をしておきながら返答を待たずして愛液で濡れる秘部の割れ目に舌を這わせ始めた。

「あぁっ！？や、だ……姉さんっ、あん、姉さんっ……！」

最愛の姉が、躊躇いを見せずに自身の秘部を舐めている。その事実を認識すれば更に濃い蜜を溢れさせ、腰を震わせた。蕩けた瞳で宙を見つめ、半開きの口からはとめどなく甘い喘息が漏れ出して部屋全体が淫猥な空気になりつつあつ

た。

「ちゅ、ちゅる……ん、くう……ん、おい、し……」

割れ目の端から端まで舌を往復させ、時折膣の入り口や肉豆を舌先で刺激されればその度に神通の腰は揺れ、甲高い悲鳴を発する。

「ひあ、あぁんっ！や、あんっ、あんっ……らめれすう、おかしくっ、う、あ、やぁんっ……」

「……だめ、なの？……じゃあ、おわりにしよっか」

いきなり刺激を止め、あつさりと顔を上げた川内は神通の蕩けた顔を見つめてにっこりと綺麗に微笑む。今すぐにでも泣き出しそうな顔をして神通は姉を見つめ、わずかに腰を揺らしてか細い声で言葉を紡いだ。

「いや、です……姉さん、お願いします、イカせてくださいませ……」

その言葉を聞き川内は意地悪そうな笑みを浮かべ、再び神通の秘部に吸いつき、肉豆を執拗に攻めてやれば彼女は思いきり目を見開き、腰を浮かせて川内の口に押し付ける。

「りょーかい……ん、んっ……じゅる、じゅ……」

「あぁっ！？っあ、あぁっ、ふあぁっ……せんっ、だ……ねえさ、ん、んうっ、あっあぁんっ……！」

吸われる度に腰を痙攣させ、感度が高まりすぎたのかすぐに絶頂を迎えてしまえば甘い喘ぎと共に愛液を噴き出してしまい、そのまま脱力した。浅く速い息を繰り返して呼吸を整えようとするも、達した疲労感と姉の温もりで覚える安心感とで一気に瞼が落ちてきてしまう。

「……神通？」

「ねえさん……すみません……わたし、っ……」

突如襲い来る睡魔に抗うことが出来ず、そのまま瞳を閉じた。神通が意識を落とす直前に感じたのは、愛する姉の、頬へ触れる手の温もりだった。

終

百合の香の娘と、桜に錨と。

あさゆきはじめ

ずんぐりとした機体が波を蹴立てて、その飛行艇は棧橋にやってきた。

ここはとある南の島。棧橋に立って出迎えるのは、草色のジャケット上下——海軍第三種軍装姿の長身の女性と、柿色のセーラー服を着た少女だった。少女の方が頭一つ分ほど身長が低い。

飛行艇から降りてきたのは、いずれも女性より高い階級章をつけた将校たち。

女性と少女が踵を鳴らして敬礼をした。

「遠路はるばる、ようこそおいで下さいました」

女性——この島の基地司令、七瀬実夕中佐が言った。隙のない営業スマイル。傍らで、少女は、軽巡艦娘神通は、見事な敬礼を崩さなかった。

本国の高官たちがこの島に視察に来ると知らされたのは数週間前のこと。それを受け取った七瀬は、垂れ目気味な目を弧に細めた。長い睫毛、右目の右下には控えめな泣きぼくろ。この人、ほんとうに年齢がわからない顔をしている。神通はいつもそう思っていた。

「いい機会だと思わない？ 中央からこの艦隊への支援を引き出すの」

執務机に向かい手を組んだ彼女は、神通に向かってそう言った。何やら見下したような、皮肉っぽさを感じさせる笑み。そして何かをたくらむような目つき。眉はゆるやかにハの字を描いている。

「と、いうと」

神通がじとつとした視線を向ける。眉間にかすかに皺の寄った神通と目が合うと、七瀬はさらに嬉しそうに笑った。神通は、提督のこの不敵な笑顔が不思議と綺麗だと思っ

「わからない？ 『敢闘勇戦する可憐な愛すべき艦娘たち。中央が支援をくれればさぞかしさらに存分にその実力を発揮するでしょう』。こういうことよ」

『有能な提督のもとで』？』

七瀬がふふと笑った。彼女はセミロングの黒髪を頭の後ろで一つにまとめている。笑うのに合わせて髪がわずかに揺れた。笑いながら、彼女は豊かな胸を反らせて伸びをした。

「よく分かっているじゃない。そういうこと。せいぜい私の出世の役に立ちなさい。神通」

神通はため息をついた。どうしてこの人は、わたし相手になるとこういう言い方しかできないのだろうか。この提督の不器用な優しさを知っているだけに、神通は残念でならなかった。

この提督は、わたし相手になるとやけに悪ぶっているというか、突き放したような物言いを好む。そのくせわたしの艦装の些細な不具合や、戦闘で身体についた小さな傷によく気付く。事務仕事の小休止中に事務室のソファで転寝をしてしまったわたしに上着を掛けてくれるような優しさを示すことさえあった。度し難い、でも不思議と一緒にいたい上官。神通にとってこの提督は、そういう存在だった。

七瀬がこの艦隊に赴任してきたのはどれくらい前だったろうか。当時彼女は少佐に昇進したところで、この島の艦隊の設立担当官に任ぜられて本国からやってきた。ともかくにも彼女は完璧な笑顔と気遣いで駆逐艦娘の少女たちに接し、理想の女性提督を演じた。当初の秘書艦・叢雲は、七瀬の演技を見抜いていたようではあったが、あえてお互い何も言うことは無かった。

そしてそんなある日、ようやく艦隊にやってきた最初の軽巡洋艦、それが神通だった。

一見気弱そうな外見と立ち居振る舞いを見て、「この娘はあの『神通』の名を持つ

艦娘としてふさわしいのか」と七瀬はいぶかしんだ。しかしなぜだろう、不思議と惹かれる自分がある。七瀬は自分の胸のざわめきをごまかすかのように咳払いをする。と神通に命じた。

「あなたは我が艦隊初の軽巡洋艦ね。お手並み拝見といこうかしら。戦力強化が急務だから、さっそく秘書艦をやつて頂戴」

「は、はい」

つまり一言で言うなら、一目惚れだったのだろう。その後さっそく七瀬は神通に模擬戦を命じたのだが、気弱そうな第一印象に反して勇猛果敢、凜然たる戦乙女に豹変した新任秘書艦を見た七瀬はその姿から目を離すことができなかったのだ。出会った時に感じた胸騒ぎは、どうやら困ったことに、気のせいではなかったらしい。

そしてそれからというもの、七瀬は、この愛しい秘書艦と二人きりになると、理想的な女性提督の演技が出来ないのだった。彼女が改になり、改二になった時も、他の艦娘のときのように素直に祝福を言えなかった。

そして今日。

「ご苦労様。見事だったわ」

艦隊施設の視察、さらに模擬戦や演習風景。来客者たちへの対応とパフォーマンスを、七瀬と神通は予定通り、完璧にこなした。日は傾いている。

七瀬たちにもさすがに疲労がたまっている。しかしまだ、仕事は残っているのだ。提督室のドアがノックされ、顔を出した間宮が告げた。

「料理がそろいました」

「ありがとうございます」

七瀬は、優しげな、大人の女性の魅力を感じさせる笑みで礼を言った。間宮は照れくさそうにいそいそと部屋を辞した。

「さあて、神通。最後に一仕事よ。何事も最後の印象が大事。わかるわね？」

右の口角だけを上げて、冷ややかに皮肉めいた笑みを見せた提督。神通は真顔でうなずいた。

「笑顔よ、笑顔。いい？」

今のあなたにはあまり言われたくないわ。神通はそう思った。でも、この提督のために、最大限のことはしてあげたいのだった。

「はい、提督」

歓迎と慰労の宴会。つまりはそういうことだった。

ホストとしての優秀さを見せつける。好印象は我が艦隊への支援を、七瀬への評価を最大化させるだろう。胃袋を掴むのが一番。

心の底からの本心を言うなら——絶対に口にはしないが——独り占めしたい神通を、酒の入った男どもの前に出すのは嫌で嫌で仕方がなかった。と同時に、神通に対して露悪的に接し、神通を突き放して振る舞ってしまう七瀬の日ごろの性向からして、こういうことをするのは自然な成り行きでもあった。不器用な七瀬にはこうするしかできなかった。

がやがやととりとめのない話し声。鎮守府食堂は、来賓たちでにぎわっていた。

その中をせわしなく応対して回る、七瀬と神通、料理を運んできた鳳翔もときおりそれに加わる。

神通にとって、宴席で酌をしまわるといふのは不慣れで戸惑いがちなことだった。ひたすら気疲れする。深海棲艦の群れの方がよほど精神的には楽だろう。

酔客たちを軽くあしらいながら酒や料理を振る舞って回る鳳翔はさすがと言ったところか。一方七瀬はといえば、自分の出世に繋がりそうな相手を選んで愛想を振りまいていた。

神通は事前に教えられた通り、宴席にくまなく酒を注いで回っている。時折お相手を求められ、あまり慣れないアルコールを飲んだ。体がふわふわとする。

「七瀬君もよくできた秘書艦をもって幸せだねえ。ええ？」

神通が酒を注いでいると話しかけてきたのは中年の将校だった。少将の階級章をつけている。

距離が近い。酒臭い息。きもちわるい。顔をしかめたくなるのをこらえる。

「は、はあ、いえ」

こう返事するのが精いっぱいだった。

「さつきから七瀬君、あんまり私のところに来てくれないんだよねえ。七瀬君が軍令

部にいたころね、私はそれなりに彼女を気にかけてたんだよ？ ふふ」

「へ、へえ。そうだったんですか」

上から下へ、全身をなめ回すような視線。背筋が凍る。表情が引きつる。今すぐこの男から離れたい。

「昼間の模擬戦の時とはまるで別人だもんなあ、艦娘にしとくのがもったいないよ」

無遠慮に肩に手を置かれ、背中に隠した拳をギュツと握った。自分の頬がひくひくと痙攣しているのがわかる。なんて人。無言で目をそらす。ああ、この場から逃げ出

したい。誰か助けて。その時だった。

「少将閣下！ いいところに！ 先日ご高説頂いた予算獲得の件ですが、あの後いか

がですか？ ああ、あの件と言えは——」

グラス片手にやって来て、目の前の少将に向かって怒涛の如く話しかけてきたのは

七瀬だった。

少将は一瞬表情をひきつらせたが、すぐに愛想笑いのようなあいまいな表情を浮か

べてしどろもどろで「ああ、あの」などと言っている。

七瀬は肩をすくめて神通のほうを見た。目線でドアのほうを指す。神通はその意味

を理解した。

「わ、私は厨房にお料理を取りに行つてまいりますね。失礼します」

とりあえず炊事場に向かうと、鳳翔が声をかけてくれた。

「お疲れ様」

「あ、ありがとうございます……」

「あなたは提督の部屋で少し休んでいるといいわ。顔色が悪いもの」

情けない、という思いはあったが、そのまま体はすぐ近くの提督居室に向かう。仕

事のためによく出入りしているから、勝手知ったるその部屋に入る。

ああ、提督のにおい……。神通の体は柔らかいソファに沈んだ。

まぶしさに目を開ける。

「お客さんたちは帰ったわ。あなたもみんなも、よくやってくれました」

はたと自分の有り様に気付いて、神通は慌てて立ち上がる。

「提督っ、申し訳ありません！ わたししたら、宴席中に……」

立ち上がったときに足下に落ちた草色の上着は、彼女のものだ。

少しの間、気まずい沈黙が流れた。

「神通、私こそ、ごめんなさい」

突然、七瀬が頭を下げた。

「あなたを一人にしまして……。私は……自分のことしか見えてなかった……」

神通の手を掴む七瀬。その目が潤んでいる。朱が差した顔色といい、酒精のためだ

ろうか。神通はこんな表情の提督を初めて見る。

「うすうす心配していた通りになってしまつて……。馬鹿だわ私は……やはり神通を

あんな……」

「ありがとうございます……」

心配してくれているんだ提督。ちょっと嬉しい。それから――。

「提督もそんな顔するんですね。かわいいです」

ああ、わたしもお酒に浮かされているのだろうか。

「なっ」

真つ赤な顔で固まった提督。

「提督は、ひどい人です。そうやって優しいことを言いながら、きつとあなたは遠からずわたしを置いて中央へ行く……。そのつもりで今日の宴席だって……」

切なげな表情で言いながら、神通の右手が提督のネクタイに伸びる。神通が手を伸ばすと、提督がごくりと唾を飲み込んだ。

少しの間、ネクタイを愛おしげに手のひらで弄ぶ。神通の目の前には提督の肩。そしてそのまま顔をうずめる。握ったネクタイを少し引き寄せると、「わたしの提督がどこにも行かない」という安心感が神通を少し安らかな気持ちにさせる。

「提督……わたしを、ずっとお傍に置いてください……どうか、我儘を言わせて……」

神通は七瀬の顔を見上げる。七瀬は、神通を、目の前の愛しい秘書艦を抱きしめた。神通の右手が、そのまま提督のネクタイの結び目に絡まり、ゆっくりとそれを引きほどこいた。「しゅっ」と微かな音。

七瀬が身じろぐのに構わず、神通は三種軍装のカーキ色のシャツのボタンを外してゆく。ひとつ。ふたつ。

露わになった鎖骨と、豊かな胸の谷間。鎖骨のラインに唇を添わせる。

「んっ……ちよつと」

少しの驚きとくすぐったさに、提督が神通の身体を軽く押す。離れる神通。見上げる瞳は切なげ。

「あなたばかり、ずるいわ」

「提督……」

「そんな目をしないで。私は……私も……」

七瀬は少し言葉を切る。

「あなたを、もう離したくない」

七瀬はそう言って神通の額に唇を当てた。そして、目の前で自分だけを見つめてくるその瞳を見ながら、左手の指で神通の長い黒髪を梳いた。やわらかく、さらさらと

した指の感触。ああ、なんて可憐で、儂げで、それでいて凜として。

それから彼女は、愛しい秘書艦の頸を右手でくいと持ち上げ、唇を合わせた。首を曲げて顔ごと押し付け、貪るように。

そう、自分は実績を重ね、いずれ中央へ行く。栄達の道を歩く。それが有能な軍人たらんと生きてきた七瀬の、曲げられない自分だった。それ故に、この島でこれ以上神通を好きになってしまふのが怖かった。好きになってしまったら、彼女を海に送り出すのが怖くなる。自分の出世がなくなる。——でも。だから。

あたたかさを感じる唇を、離す。二人の間に唾液が橋を作る。

「だから、神通。あなたを、ずっと一緒に連れてゆく。どこへでも。一緒に」

それは不器用なプロポーズだったのかもしれない。

「はい！」

そして彼女の秘書艦は力強くうなずいた。

七瀬は再び神通の唇を奪う。そして、唇と舌はつながったまま、神通の腰に手を回す。そのままベッドへと、もつれあうように倒れた。

「好き……」

ベッドに仰向けに倒れた神通に覆いかぶさり、七瀬が呟く。神通の頭の左右に手を着いて、控えめに開かれた彼女の太腿の間に、膝を滑り込ませる。

そろそろといばむように首筋に唇を這わせると、くすぐったそうに身をよじる神通。

「香水？ ユリかしら」

神通から感じる甘い香りに、七瀬が問いかける。

「はい」

「香りが強すぎるから、宴席でユリは御法度なのよ？ 知らなかったの？」

「あんなもの、もう終わりました」

今日はおもてなしだから。というのは後付けの理由。本当は、提督に気付いてほし

くて。

神通は仰向けになって口付けられながらも、下から七瀬の胸元に、挑むように手を伸ばす。先ほど開けかけたシャツのボタンを再び外し始めた。

「生意気」

七瀬は神通の両手を右手でぱしっと取り、掴んだ神通の両手を彼女の頭上、シーツにぎゅっと押し付ける。そして空いた左手でセーラー服のフロントのボタンを手早く上から外した。

両手の自由を失ったまま、さらしの巻かれた豊かな胸をあらわにした神通。

「ふふ、かわいい」

それを愉しげに見下ろしながら、さらしの上から触る。指で包み、撫でるように。

そうするたびに神通が「ふっ」と切なげな吐息を漏らす。その表情ははじめて見た時の、少し気弱そうな面持ちを彷彿とさせた。

「顔、真っ赤よ?」

言葉で追い打ちをかけ、さらに左手だけで器用にさらしを解いてゆく。

押さえつけていた手を放すと、神通はおずおずとその両手を提督の背に回した。すがるような、求めるようなしぐさ。背中に感じるぬくもりに、七瀬は多幸感で身を震わせた。

「提督も、熱くなってます……」

神通が言う。うれしそうな笑顔。

唇と唇を重ねる。七瀬も神通も、夢中で互いを吸い求め、舌でまさぐりあっていた。くちゆくちゆと湿った音が耳を支配する。あわせた唇から、舌から、暖かさ脳髓をしばれさせるような幸福感が、気持ちよさが這い上がって来る。

口付けたまま、両手で神通の双丘を包む。いつも、ひそかに心の中で、好ましく、そして悩ましく思っていた。秘書艦のやわらかなふくらみ。ふにふにと手の中で逃げるそれを、手のひらで、指で追う。捉える。すると吸い付くように返ってくる弾力の

確かさ。じんわりと心が温かくなる。頂点の突起を指でつまむと、こりこりと固く充血した。桜色の乳輪を、そして乳首を、指の腹で焦らすように愛撫する。愛撫のたびに、神通の身体がびくりと跳ねた。

「ふゆう」

必死で声を抑えようとしているのだろうか。しかし抑えきれず、口から絞り出すような喘ぎが漏れる。

七瀬がぐいっと体を丸めて、神通の右胸の頂に吸い付くようなキスをした。続いて左。こちらは少し歯を立ててみる。

「うあ……あっ」

そのたびに吐息に声が混じる。さらに七瀬は自分の体をずると下へずらす。

舌先で神通の乳首をちろちろと刺激しながら、上目遣いにその顔を見る。

神通は提督に執拗に胸を責められ、その快感に体を貫かれていた。しかしそのたびに別の部分が食欲にうずく。胸から身体の芯へと走る快感が、下半身にうずきをもたらす。

「っは……あ……提、督……」

思わず、湿った声で呼んでしまう。身体が火照ってしまふ。わたしは、いったい何を求めてしまっているのか。神通は未知の感覚に身をよじった。

「欲しいの?」

顔を覗き込んで問いかける提督のいじわるな表情に、神通は恥ずかしさのあまりいやをする。そんな神通の反応が七瀬を余計に駆り立てた。

そろそろと、七瀬はその右手を神通の身体に這わせた。

胸から腹へ、へその下をじらすように撫でる。神通の顔を、わざとまじまじと見る。恥ずかしさが神通を熱くし、その反応が七瀬をたぎらせた。

神通はその意思とは無関係に、両腿をもじもじとさせる。

指は未だスカートに覆われた下半身へ。スカートの上からその敏感な場所をさする。

「んっ」

腰を強張らせた神通だが、芯の部分は骨格筋と対照的に熱く弛緩する。

七瀬はそのままスカートを素早くたくし上げた。露わになった下着は薄桃色。その中心を、中指の腹でくるくると弄る。そしてそのすじに沿って指先を往復させる。

提督が、自分のいちばん恥ずかしい場所へ手を触れている。神通はこの場から逃げ出したいような、でももっと深みへ進みたいような衝動に体を強張らせた。そしてその瞬間、秘所からこみあげる熱さを感じ、湿度を孕んだ吐息を漏らす。

「っ……はあっ……」

「あら」

指先に感じるしっとりとした感触に、七瀬が嬉しそうに声を上げた。

「下着越しなのに、もうこんなになってる」

神通の目の前に指を示して、親指と人差し指の間に糸を引く様を見せつける。

「恥ずかしい……」

涙声、素直そのもので言う愛しい娘を、七瀬は一度軽く抱きしめる。そして彼女は体を起こして神通の股の間に座った。そして、濡れた下着をそろそろと下ろす。恥ずかしさに思わず神通の両手が股間へ伸びるが、秘部を隠そうとしたその手を提督がやさしく除ける。

ああ、とうとう提督に見られちゃうんだな。神通はそんなことを想った、いつかこういう瞬間が来ると、実はそう望み、期待していたことを、彼女は初めて自覚した。仰向けに横臥した神通のセーラー服の前ははだけ、さらしをほどかれた胸は露わ。

大きく捲られてくしゃくしゃにされたスカート、そして、なにもまとわぬ秘部。その脚は開いてはいるが、緊張のためかお行儀よくまっすぐにのばされていた。しなやかな、見ているだけで頬ずりして舐め回したいような脚線美。みずみずしい少女らしさと、艶つぼさを併せて放つそのラインも、日ごろ七瀬の秘めた視線を奪ってきた誘惑だった。それを左右の視界にとらえながら、七瀬はゆっくりと上体をかがめる。

あまり手入りをされていないらしい、その淡くやわらかな茂み。朝露に濡れる若草を思わせた。

しっとり濡れそぼったそこに、ちゅっと口づけをする。むわっと伝わってくる熱気、湿り気。情欲をくすぐる香氣。

「ひゃっ」

神通の身体がびくりと震えた。七瀬は唇をべろりと舐めると、舌で、その敏感な辺縁部をちろちろと愛撫する。

「んっ、はああ……」

舌をさらに無遠慮にのたくらせる。両の花びらへ。そして時折、敏感な突起を。ぴちやぴちやと粘ついた水音が耳朶を刺激する。七瀬はその音の響きに、さらに昂りを覚えながら上目遣いに神通の顔を見た。

「ひう……ん……ああっ……だめっ……はっ……」

神通は目の端に涙をうかべ、必死に声をこらえようとしていた。しかし絞り出されるような嬌声と吐息が漏れ出す。赤く火照り、羞恥に歪み、それでいて蕩けた表情。

ああ、なんて可愛らしいのだろうか。七瀬はうっとり目を細める。

神通のうるおいを舌先で感じながら、さらに奥へ。ぬるりと生々しい熱を感じる。

「うあ、あ……もう……こんなっ……」

ぬふりと奥へ。そしていやらしくうねらせる。

「ひっ！ いああっ！」

神通はついにこらえきれず、切り裂くような嬌声がほとばしり出た。ぬるりと、蜜が溢れてくる。それを味わいながら、にちやりと舌を引き抜いた。

「はあ……はあ……」

四肢を投げ出し、胡乱な目で天井を見上げて息を弾ませている秘書艦。日ごろの慎み深く真面目な、凜然たる有り様を想うと、その乱れ様に七瀬はそれを成しえたことに満足すら覚えた。神通の胸元に浮いた汗のしずくをべろりとなめとる。そして腋へ。

むわっと湯気すら放ちそうなそこは、美しく、しつとりと上気していた。

七瀬はその腋を唇で味わうと、神通に顔を近づけ、頬を両手で包む。

「あなた、いつもに増してとつてもかわいくなってる」

見る見る間に、蕩けていた神通の表情に意思が戻り、その顔色がさらに真っ赤になった。

「うう……」

涙目で、はだけた服をかき寄せる神通。頬を膨らませ、「提督のいじわる……」と

小さな声で言う。

「あら、そんな私にずっとついてきてくれるって言うてくれたのはあなたよ」

提督がにやりと笑った。

「そうですね」

神通は提督の肩をがしりとつかむと、転げるように上下を逆転させた。

「油断しましたね？」

神通の、耳の先まで真っ赤なのに、挑むような表情がちぐはぐだった。

神通は提督の腰の上にまたがると、先ほど胸のところまで外したシャツのボタンに再び手を掛けた。すべて外し終えると、ブラを外そうとする。七瀬が背を浮かせて助

けた。そして神通は、露わになった提督の首筋からへそまでを、うっとりとした表情で見下ろす。

「……なによ」

「提督、わたしの提督……」

火のついた神通は、海での闘い様のごとくに熱っぽく相手に没頭し、執拗だった。

耳、唇、首筋。唇で、舌でなぶりたてるその間も両手は提督の乳房を包み、揉み上げている。ばさつと落ちてかぶさる長い髪は、意図せずともさわさわと七瀬を刺激し

た。ちゅば、じゅる、ぴちや、ちゅ。吐息の音と、唾液の音しか聞こえていない。

くすぐったそうに眼を細める提督の表情。それを目にした神通の中で、その積極性

がさらに鎌首をもたげる。

神通よりさらに少し豊満な提督の胸に、顔をうずめる。柔らかな感触を感じながら、神通は唇をすぼめ、強く吸い付いた。

「ひゃっ」

提督が驚きの混じった悦びの声を上げる。この声も、柔らかさも、口腔の中で硬さを増す乳首も、わたしのものだ。無心に、乳児のようにその乳房を吸いたて、舌でなめ回す。

「ッ……」

七瀬の両手がまさぐるように神通の後頭部を撫でまわし、さらに激しさを求めて頭を胸に押し付けた。しばらくして息が苦しくなって、ようやく神通はその口を離す。

肩で息をする提督をよそに、神通はくるりと体勢を変える。提督の脚の方向へ頭を向け、両足は提督の首のあたりをまたいだ。そして提督のタイトスカートのファスナーを下ろし、それを両手で下ろしながら太ももを撫でさする。

スカートを抜き取ると、神通は提督の太ももを持ち上げM字にさせた。そして、太ももを、鼠蹊部を、ストッキング越しに両手で撫でさする。時折ちゅつと唇を添える。

七瀬は、肝心な部分へ触れずに、徐々に近づきながらも周囲を愛撫する神通の焦らしに、思わず不覚にも切なげに吐息を漏らした。

ふう、と神通の息が荒くなる。七瀬からは見えないが、その目つきは夜戦に突入し、敵艦隊に逆襲を図る水雷戦隊旗艦のそれに近かった。

両の手にぐつと力を入れると、七瀬のストッキングを勢いよく引き破った。

「ちよつと——」

驚いて声を上げ体を起こしかけた七瀬だったが、さらに、強引に下着も下ろされる。そして——

「——んッ！」

焦らされて敏感に、そしてじんわりとしどになつていたそこに、神通が吸い付い

た。

「ぴちやつ、ちゆるっ……」

「あつ、うあ」

わざとなのか偶然なのか、舌先が間歇的に、七瀬の充血した蕾をすどく刺激する。七瀬は痙攣するように体をのけぞらせ、なすがまま。

神通は提督のそこから口を離すと、添い寝をするように七瀬の真横右側に寝そべった。

そして目が合うとにつと不敵に笑うなり、右手の人差し指と中指を、その左右の花びらにすつと添わせる。

「こんな……もう入港準備は万端ですね」

「ちよつと、何を言つて、待つ——」

提督の口を唇で塞ぐ。

そうしてから、ぬるぬると花びらをもてあそび、するすると侵入する。しなやかな異物。

「んんんっ！」

ぞくぞくと這い上がる快感に恐怖しながら、薄目で神通の顔を見る七瀬。その顔貌は狩る者の愉悅。凶悪なまでに戦闘的で、見とれるほど美しかった。七瀬の内奥から熱い脈打ちがせり上がってくる。体中を弛緩させるような陶酔感。

「提督の……指に吸い付いて。よっぽど欲しかったんですね」

「な、何を言つ……あ、私もう……ああつ！」

あの提督が、わたしの提督が！ こんな風にわたしを感じて！ 乱れて！ わたしがこの人を！

神通の昂りが、指先にこもる。

激しく、だが優しく、乱れた水音が、声が、荒い息が、二人の耳を支配していた。

「ひゅっ！ んっ！ 来ちやう……ああつ！」

七瀬は、意識を探照灯のような閃光に貫かれながら、自身の芯からしなやかな指が抜き取られるのを感じた。

ミルクを飲む子猫。

七瀬は、神通の口もとから、すなわち自分の下半身から聞こえるぴちやびちやといふ音にそんな形容を思った。

今は二人とも一糸とて纏っていない。ベッドに頭と足を互い違いに横になり、互いの、いちど絶頂に達して敏感になったそこを慈しみ合っている。

ぴちゅっ、じゆるっ。

そう思いながら七瀬も、かわいい秘書艦の桜色の陰部を吸いたてた。

「きやつ」

「かわいい声を出すのね、あなた」

「提督こそ。ずいぶん素直におなりです」

「急に生意気になっちゃって」

「急にしおらしくなった方に言われたくないです」

二人は、どちらともなくすすすと笑った。

次の戦いも、次の次の戦いも、きっと生きて還って、そしていつか戦いから離れても、ずっとこの人と一緒に居てみせる。

ずっとずっと、この娘の傍にいて、この娘と仲間たちを見守ってゆく。現場で、そして、現場を離れても、この娘はけっして離さない。

この先何があるかはわからないけれど、ただ互いに求め続け、寄り添い続ける。二人は決めた。

こみ上げるからだの熱さ、蕩ける快感のなか、思いは優しく、しかし強く——。

了



ゲスト コメント

。すずき たろう。
鈴木 多勞。

「神通ちゃんが裸エプロンDE
建造ちゃれんじの話」

を描かせて頂きました！
提督と神通ちゃんがひたすらラヴ
ラブするお話が好きで、普段もそ
んなハッピーな話を描いています。
今回も無事建造成功したみたいで
安心しました。
提督と神通ちゃんが幸せに暮らす
のを妄想して日々生きております。
目指せ！建造100隻！です。
(資材枯渇する。)
pixivやTwitterでも絵や漫画を公
開しておりますのでよろしければ
覗いてやって下さい。(STYX
か@suzukitarohで検索を…)

最後に…
これからも神通ちゃんが幸せで
ありますように…

。みめたち。

どーもみめたちです。
今回、
バニー神通を描かせて
いただきました。

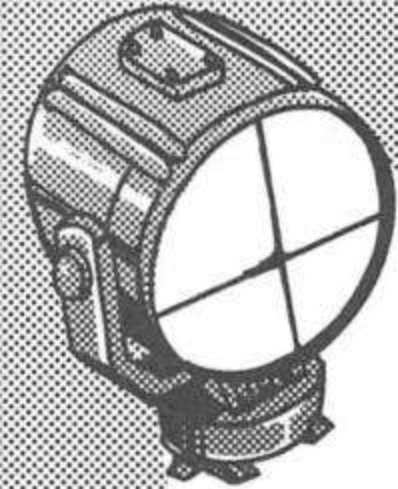
神通はいいぞ！！

赤木ハム



。なぎはしここ。





かなと

描く機会も
描く勇気もなかった
神通ちゃんのエッチな姿を
描ける機会を
ありがとうございました！



エッチな神通ちゃん万歳！！

清川 恒光

浴衣姿の神通さんが
大好きで大好きで。
あと、ちょっと困った顔の
可愛い顔をさせたくて
という、欲望だけのイラスト
を描かせていただきました。

とても楽しかったです！

素敵な本に
参加させていただき
ありがとうございました。

普段は、創作系で活動しています。

番茶

どのページを開いても
神通の本。
そんな合同誌の企画に
参加させてもらうこと
ができて、本当に楽し
かったです。
淫れる神通ちゃん、
略して淫通ちゃんを書
けたかはしらぬい。
今後も艦これや他作品
のネタで何でもない話
を書く機会があるかも
しれませんが、またご
縁がございましたら、
何とぞよろしくお願
いいたします。

ささくまきょうた

初めまして、ささくまきょうたです。
神通さんの合同本に参加させて頂けて
とても嬉しいです。

1冊丸ごと神通さんなんですよ……！
それだけで感動ものです……！

初めての合同本で緊張多いのですが、
がんばって描かせて頂きましたので、
気に入ってもらえたら幸せです。

C91冬コミでは主催ぶらむ様のお隣り
「ケ-14a」で神通本を頒布しています。

新刊は神通さんの利用衣装コスプレ本
という偏った内容ですが恥ずかしがる
神通さんを是非楽しんでください。

1月のコミトレも参加申込み済みです
今後ともよろしくお願いたします><

-PandaCotta-

twitter * @sasakumakyouta
pixiv * pixiv.me/sasakumakyouta
webカタログ * 13013245

ユキ

アンソロジー発行
おめでとうございます！
いっぱい神通ちゃん描けて
幸せでした♡



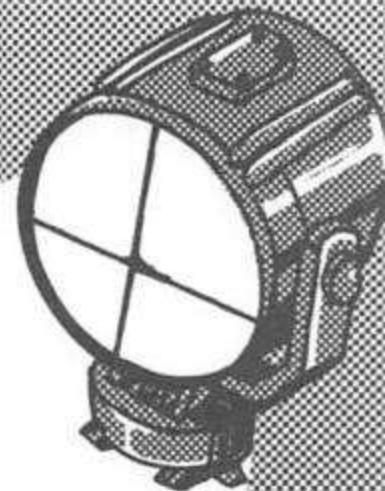
ユキ
Twitter: @uki_sug

水菜

人生初のエロ本でした。
神通ちゃん可愛いから
仕方ないね。淫らな神
通ちゃん書いて満足で
す。
また神通ちゃんを支え
る川内も好き。那珂ち
ゃんも出してあげたか
った！川内型最高！

私のサークル「水風船」も
よろしくお願いたします
(宣伝)

@mizunana_T



じゅんたか

はじめまして！じゅんたかです！
今回はこのような素晴らしい企画
ありがとうございます！

今回描いた神通ちゃんは初です。
欲望のままに描かせていただきま
した！描いてて楽しかったです！

性格とは裏腹にすげなほでい…

たまらんですなあ。

【サークル宣伝】
隼鷹製作所～J-TREC～
浜風提督の私を主催に活動してい
るサークルです。主に陽炎型を中
心に描いています。まだまだ初心者
絵描きですがこれからどうぞよ
ろしくお願いします！

twitter:@jyuntkk4110

silk

神通ちゃん、実は我が鎮守府
初めての建造で産まれた艦娘
だったりします。
当時は若く、阿呆なことを
してみたいと戦艦正規空母縛り
などというプレイをしており、
旗艦は神通、攻めるは当時難関
とされていた2-4、僚艦はもう
ボロボロでありながらも水雷撃
で敵旗艦を中破の神通が沈める
ということがありました。
元々初建造で初軽巡というのも
あってか惹かれてはいましたが
この件で完全に惚れました。

それがいまではすっかりスケベ
してえなあ…と考えるように
なってしまったよどうすんの。

まあそんな感じで神通ちゃん
大好きです。

CK/旧七式敢行

神通
ちゃん
は
天
使

坂上

書きたい内容が書け
て満足しています。
他の方の作品がとて
も楽しみです。

寒い時期なので神通
ちゃんの脱ぎたてサ
ラシを生姜をたっぷり
入れただし汁に浸
したサラシうどんが
食べたいです。薬味
は鉢金の布部分でお
願いします。

HISAGI

この度はゲストとして寄稿
させて頂きましたこととても
嬉しく思っております。
何気にエロ原稿自体は初
だったので四苦八苦しな
がら描かせて戴きました。
神通のエロさを感じ取っ
て戴ければ幸いです。

洲央

突然ですが致します。
聴いて下さい。

「姦パコ宣言」

お前を嫁にもらう前に
ヤッテおきたいプレイがある
少しえっちな話もするが
俺の本音を聞いておけ
亀頭の先を磨かれイキたい
お尻の穴に挿れさせて下さい
フェラはうまくしてね
いつも綺麗だよ
出来る男じゃなくてごめんね
忘れなくても出来る男に
愛撫もできるはずがないって事を
妻を愛せるはずがないって事を
お前には赤ちゃんが
できる日とかもあるから
ゴムを外して中で出して
大好き神通メッチャ♥LOVE♥



琉球雛

うちの神通は
静かに喘ぎます

提督の顔が見えないのは
仕様です！

い7!

ヾ(°ω°)ノ

仮死パン

おねショタは
いっしょぞ。



IAPOC

誘い受けて
えっちいですよね。

こんにちはIAPOCです。
この一言だけは
どうしても言いたくて。

提督じゃないとやだ
っていうわがまま、
かなえてあげたい漫画
でした！
神通さんが愛おしい。
神通さんが大好きを
めいっぱい詰込みました

風見櫻子

じんつうさんのおしり
で
おせっせしたかった

どうしてこうなった

前が使えない
なら後ろを使う
流れ...
これだ!!



なぎりあ

エッチな漫画描くの
初めてでして、
大変悪戦苦闘いたしました。
それでも神通のエッチな姿を
描くのは大変楽しかったです。
皆さんの股間に少しでも
響けばなと思います。

s. t. fake

(@st_fake)

○ 新年の目標 ○
一週間に一回、川内型
の絵を投稿すること。





青清空斗

初めましてこんにちは、青清空斗と申します。

この度は神通ちゃんのエッチな合同誌、発行おめでとうございます！

豪華な執筆陣が集まる中、私が混ざっていていいものかと思案しましたが、精一杯の神通ちゃんへの思いを込めさせていただきましたので、楽しんでいただければ幸いです。

…本職は川内提督です（小声）が、神通ちゃんも大好きです！

合同誌参加という貴重な機会をいただきありがとうございます。主催者や、執筆陣の皆様への感謝の気持ちも、次発装填済みです。

さあ、楽しく夜戦しよっ！

Pixiv : 4094532 / Twitter : shigure_box

ちくわん

神通×陸奥という稀有な組合せで描かせていただきました！
年上のお姉さんと触れ合い、様々な愛情のカタチを受け入れていく神通ちゃんの新たな可愛さを感じて貰えたら嬉しいです！



神通と陸奥の愛々傘

@yuyukopikumin

ちんぽ大將軍



神通ちゃんごめんね♡♡♡

あさゆきはじめ

どうも。普段は「生ケ物同盟」という文芸サークルでいろいろなものを書いている、神通さんが大好きな者です。今回の原稿もサークルの皆にとっても助けられました。

「神通さんと女性提督の百合とか読みたいなあ」そんなツイートを垂れ流してからおよそ一年後、幾人もの方の「やりたいうようにやるがよい」という天の声のおかげで、ウンウン言いながら自分で書くことになりました。楽しかったです。書きながらあのセーラー服の構造で悩んだりあげく、文章的ないやらしさを出したばかりに前開き式にしました。

さて、神通さん、その魅力はまさに（文字数

ゴステロー

流行れよ神通海風え！
なんで流行らないんだ！
誰か説明してくれよ！

ゆりも

@akahina1108



大好きな神通ちゃんを語りたいです！

神通ちゃんにはマジで神様なのです

いるかのねこばんち

編集後記

こんにちは、主催のぷらむです。

本書を手にとって頂き誠にありがとうございます。
いろんな人が書いたすけべな神通ちゃんが見たい！
という勢い任せで欲にまみれた企画にもかかわらず、
これだけ多くの方が参加してくださって
無事発行することができました。
~~みんなけっこうすけべなんだな~~

執筆者の皆様、応援してくださった方々、
本当にありがとうございました。
楽しんでいただけたら幸いです。
なおお楽しみになられた後は
作者様へ直接感想などお送りしますと大変喜ばれますので
どうぞよろしく願いいたします。

ぷらむ

奥付

神通桃色遊戯録

発行日/2016年12月31日

発行/ARCH・ぷらむ

plummy.s2@mail.117.cx
twitter@archplum
pixiv ID=13804

印刷/緑陽社

本書は著作権元とは一切関係ありません
18歳未満の購読、無断転載・転用、webアップロード禁止

赤木ハム
あさゆきはじめ
IAPOC
s.t.fake
風見櫻子
仮死パン
かなと
清川恒光
ゴステロー
坂上
ささくまきようた
CK/旧七式敢行
じゅんたか
silk
洲央
鈴木多勞
青清空斗
ちくわん
ちんぽ大將軍
なぎはしここ
なぎりあ
番茶
HISAGI
水菜
みゆたち
ユキ
ゆりも
琉球雛

ふらむ

Fleet Girls Collection
JINTSU
unofficial fanbook